

L = 63.00(m)

L = 62.00(m) 東西土層(要道・排水渠部分)

東西土層(石室部分)

L = 63.00(m)

L = 61.00(m)

L = 60.00(m)

L = 62.00(m)

石室主軸線

L = 62.00(m)

L = 61.00(m)

石室主軸線

L = 61.00(m)

炭化物を含む層

0

4m

SM1001墓域及び墳丘周辺土色

一二の堆積

- 1. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
- 2. 黄褐色10YR5/6砂質土
- 3. 明黄褐色2.5Y5/6砂質土
- 4. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 5. 淡黄色2.5Y5/6砂質土
- 6. 淡黄色2.5Y5/6砂質土
- 7. 褐褐色2.5Y5/6砂質土
- 8. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 9. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
- 10. 淡黄色2.5Y7/4砂質土
- 11. 淡黄色2.5Y7/4砂質土

排水渠

- 12. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土

石室

- 13. C.I.-II黄褐色10YR7/3砂質土
- 14. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 15. 橙色7.5Y5/6砂質土
- 16. 淡黄色2.5Y7/4砂質土

周溝

- 17. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土
- 18. 明黄褐色10YR6/6砂質土
- 19. 淡黄色2.5Y7/3砂質土
- 20. C.I.-II褐色6/6砂質土

墳丘北側削り

- 21. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 22. 反黄褐色10YR8/6砂質土
- 23. 淡黄色2.5Y7/4砂質土
- 24. 淡黄色2.5Y8/6砂質土
- 25. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 26. 反黄色2.5Y7/2砂質土
- 27. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 28. 反白色2.5Y7/1砂質土
- 29. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 30. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 31. 淡黄色2.5Y7/3砂質土

墳丘東西削り(石室部分)

- 32. 淡黄色2.5Y8/6砂質土
- 33. 反白色10YR7/1砂質土
- 34. 反白色10YR8/6砂質土
- 35. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 36. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 37. 反黄色2.5Y7/2砂質土
- 38. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 39. 淡黄色2.5Y7/3砂質土
- 40. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 41. 反白色2.5Y7/1砂質土
- 42. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 43. 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 44. 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 45. 反白色2.5Y7/1砂質土
- 46. 淡黄色2.5Y7/3砂質土

西側削丘

- 47. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 48. 反白色10YR7/1砂質土
- 49. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 50. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 51. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 52. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 53. 反白色2.5Y8/6砂質土
- 54. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 55. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 56. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 57. 反白色2.5Y7/1砂質土
- 58. 带反白色2.5Y5/6砂質土
- 59. C.I.-II黄褐色2.5Y5/6砂質土
- 60. C.I.-II黄褐色2.5Y5/6砂質土
- 61. 反白色2.5Y6/6砂質土
- 62. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 63. 带反白色2.5Y5/6砂質土
- 64. 反白色5 Y7/2砂質土
- 65. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 66. 淡黄色2.5Y7/2砂質土
- 67. 黄褐色2.5Y5/3砂質土
- 68. C.I.-II黄褐色2.5Y5/3砂質土
- 69. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 70. C.I.-II黄褐色2.5Y5/3砂質土

墳丘東西削り(要道・排水渠部分)

西側削丘

- 71. 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 72. 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 73. 淡黄色2.5Y5/3砂質土
- 74. 反白色2.5Y8/2砂質土
- 75. 反白色2.5Y6/1砂質土
- 76. 反白色2.5Y6/3砂質土
- 77. 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 78. 淡黄色2.5Y7/3砂質土

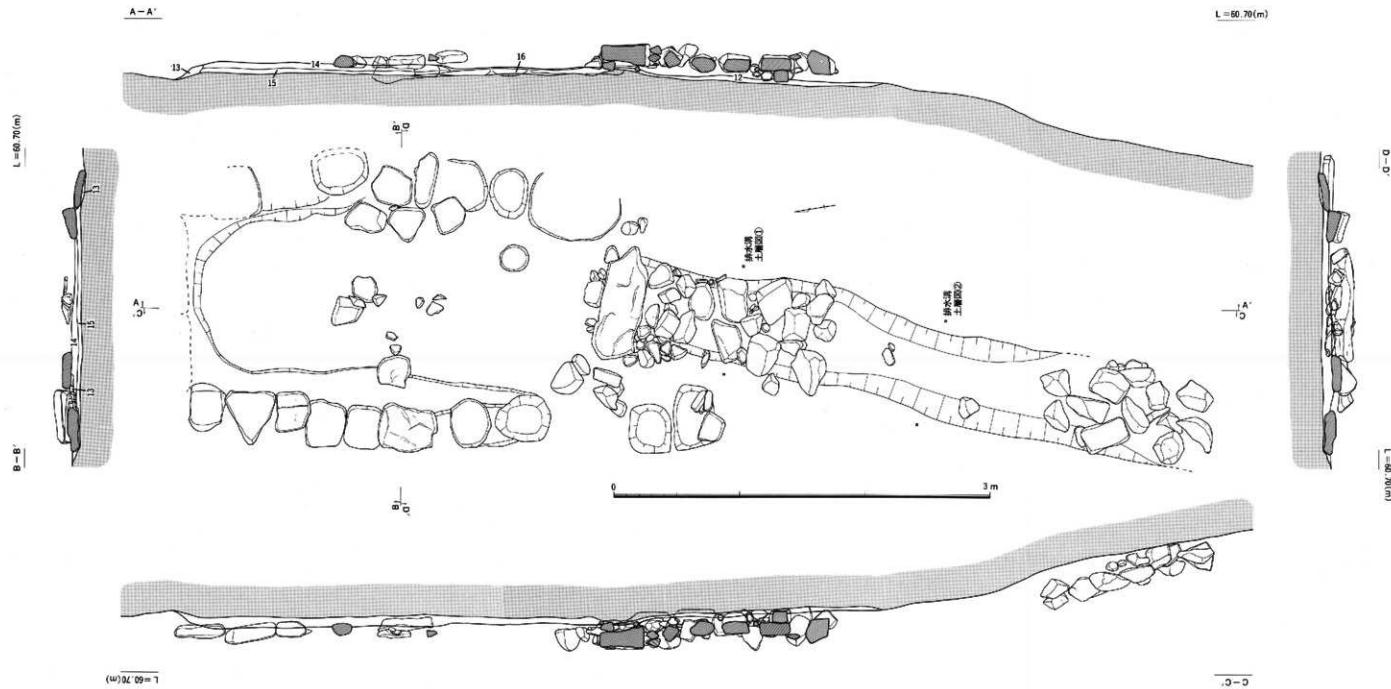
東側削丘

- 79. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 80. 淡黄色2.5Y8/2砂質土
- 81. 淡黄色2.5Y8/2砂質土
- 82. C.I.-II黄褐色2.5Y6/3砂質土
- 83. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 84. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 85. 反白色2.5Y7/2砂質土
- 86. 明黄褐色2.5Y5/6砂質土
- 87. 淡黄色2.5Y7/2砂質土

石室底込

- 88. 反白色5 Y8/2砂質土
- 89. 反白色5 Y8/2砂質土

第7図 SM1001墳丘・墓域内土層図



第8図 SM1001横穴式石室展開図（土層番号は第7図に一致）

築時や再利用の際に墳丘を再形成するような改変を行う例の少ないとこや、列石には掘り方が伴っていないことから、ここでは①の場合を想定しておきたい。従って、礫の下側から出土した須恵器は、作業時に偶然混入したか、墳丘築造時の祭祀に伴うものということになる。また、小堅穴式石室は列石を部分的に除去して、墓壇を掘削していたことが分かる。

内部施設（第8図）

現状

調査前の地形測量の段階で、盜掘坑と考えられる長さ約6m、幅約3mの窪みがあり南側に開口する横穴式石室の存在が念頭におかれた。調査の進行に従って、検出される石材が碎けたものが多く、石室の破壊が予想以上のものであることが明らかとなっていた。中でも義道部排水溝の上面には、石室を構成していたと思われる砂岩の石材が一辺5~30cm程度に砕かれ、集められていた。

石室内土層の観察によると、わずかに残存する床面にまで二次的堆積土が及んでいることから、玄室の保存状況はきわめて悪いといえる。割石を含む層（第7図第8・9・10層）には瓦器碗が含まれており、中世以降の堆積であることが確実である。さらに割石の層を切り込む層（1~7層）がみられ、玄室床面をほぼ覆い尽くし壁体と裏込めのほとんどをも切り込んでいる。この層には古墳時代以降の遺物として白磁碗が含まれていたが、先述の瓦器碗との先後関係が逆転しており、盜掘や擾乱の年代を位置づける資料とはならない。

構造

墓壇を掘削した後、まず整地を行い（第7図第14~15層）、礫床を敷き詰め、基底石を据える掘り方（13層）を掘りくぼめる。

石室は玄室の基底石の一部を除き、完全に破壊されていた。辛うじて原位置を保っていた基底石と石材の抜取り穴および2号墳の横穴式石室の形態から復元すると、玄室は基本的に長方形で、中央部でわずかに張り出す胴張のプランをもち、最大幅1.55m、奥壁部での幅1.3mとなる。框石の北西に接する抜取り穴を玄門立石または袖石と考えた場合玄室長は2.7mである。また、この抜取り穴を最重要視せず框石が玄門の位置と一致すると考えた場合玄室長は3.2mである。

排水溝（第9図）

横穴式石室玄室内から墳丘外へ向けて直線的に伸びている。主軸はN-19°-Eで石室の主軸（N-14°-W）からは反時計回り方向へ5°程度のずれがみられる。規模は現存長が4.65m、幅が0.6~0.8mである。断面形態は浅いU字形を呈しており、最も深い部分で20cmを測る。溝内には明黄褐色砂質土が全体に堆積しており、堆積後の擾乱や再掘削の痕跡はみられなかった（第9図）。底面のレベルには石室内と石室外では約0.5mの差があり、排水に際しての

充分な傾斜をもっている。框石より外側約2mには一辺30cm以上の砂岩の自然縫による蓋石が置かれ、検出時にはさらに蓋石の隙間には拳大の礫がみられた。この蓋石が置かれている部分は遺物が集中して多く出土した箇所でもある。

遺物の出土状況（第10～13図）

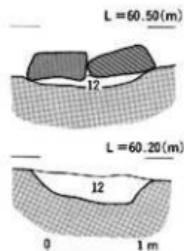
山田古墳群Aの出土遺跡のほとんどを占めているのは、1号墳に関するものである。しかし、白磁碗が玄室床面直上より出土するなど遺存状況は良好ではなかった。玉類を除くと玄室内から出土した遺物は相対的に少なく、原位置を保っていた遺物は極めて少ないものと思われる。追葬や石室破壊の時点での1号墳より持ち出されたことが想定できるものも含め、1号墳の周辺から出土しており、1号墳の副葬土器である可能性を強くもつものの、帰属させることを断定できないものについては別項を設けた。

周濠内からは少ないものの須恵器片が出土した（第11図）。いずれも数点ずつの破片がまとまっている。壺や杯身などの器種が含まれているが、玄室近くで出土したものと比較すると、新しい傾向がみられる。副葬土器の石室外への持ち出しとともに、周濠内への祭祀行為に伴う意図的な投棄行為の可能性も残される。

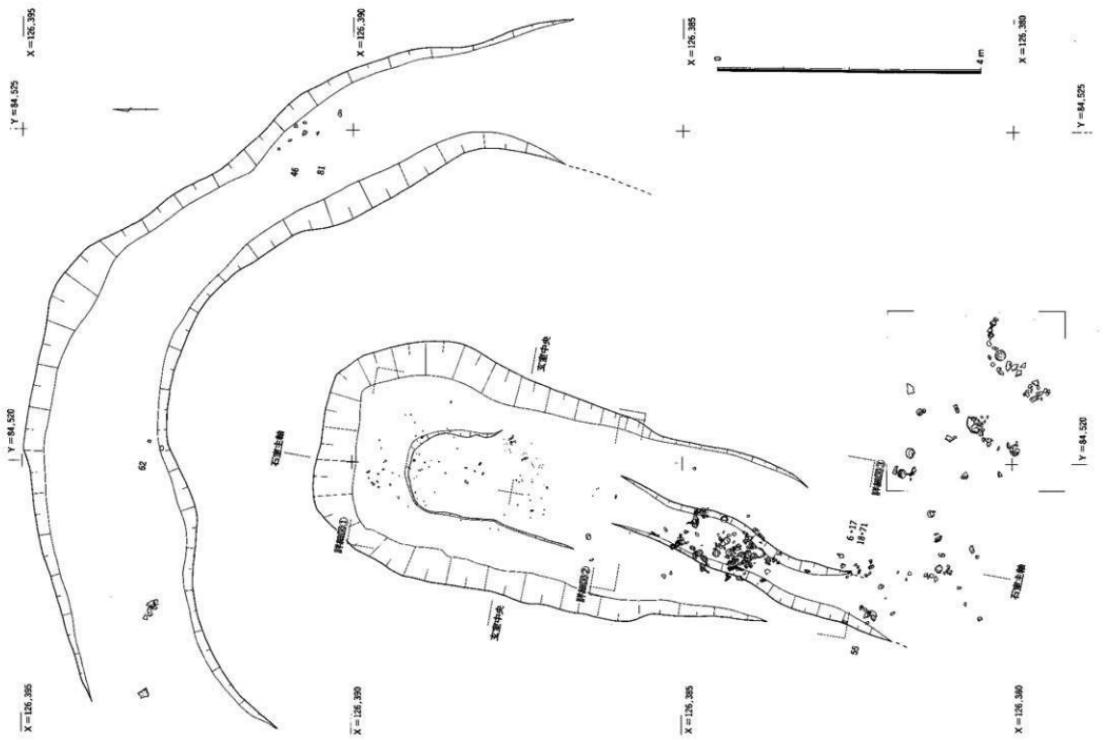
須恵器は玄室内からの出土はほとんどなく、排水溝内・同上面（第12図）、石室前部（第13図）より多数出土した。須恵器は型式的に数段階に分かれるものが含まれているが、型式ごとにまとまった出土傾向はみられない。また、排水溝で須恵器が最も多く集中して出土した地点（第12図 出土状況詳細図②）においては、出土した土器のレベルに約80cmの高低差があったが、ここでも須恵器の型式差は反映されておらず、破片の接合関係にも秩序はみられない。石室前部においては、完形の平瓶が出土するなど石室内遺物のある程度の大きさのものは徹底して持ち出され、前部などに投棄されている。

馬具をはじめとする鉄製品も、一部を除くとほぼ排水溝周辺から出土した。鉄製品の出土状況についても、須恵器の場合と同様規則性はない。轡や兵庫鎖などの比較的大形のものは、排水溝周辺に集中している。玄室内からは大刀や鉄鎌と考えられる鉄片が數十点出土しているが、いずれも細片が中心となっており、特定できないものが多い。

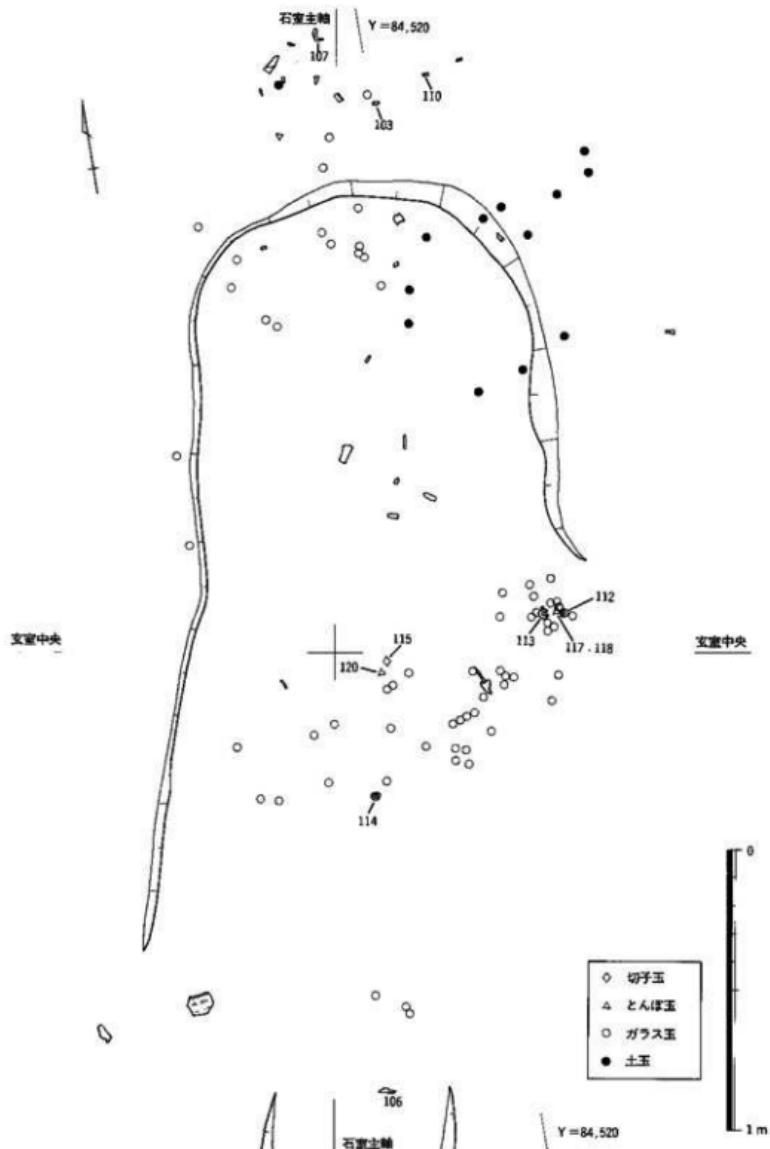
玉類は、一部が排水溝などより出土したが、おおむね玄室内に集中していた。特に出土数の最も多いガラス玉と次に多い土玉についてみてみると、玄室内に集中している。そのほかに耳環は玄室の中央部から出土した。合わせ部分の方向などに規則性がみられず、本来の副葬位置ではないことが明らかである。須恵器や馬具と比較すると、より原位置に近い状態の出土ということができ、その小ささが故に破壊・盗掘の手から免れたともいえる。



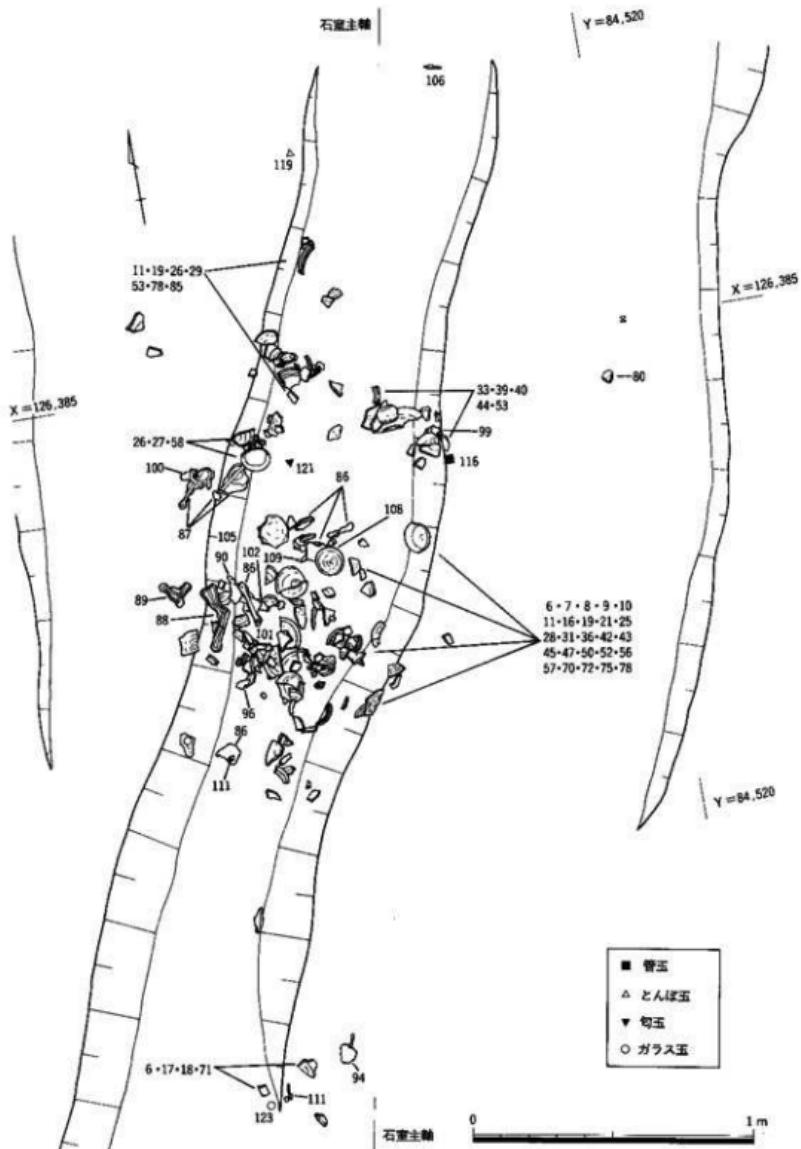
第9図 SM1001排水溝土器図



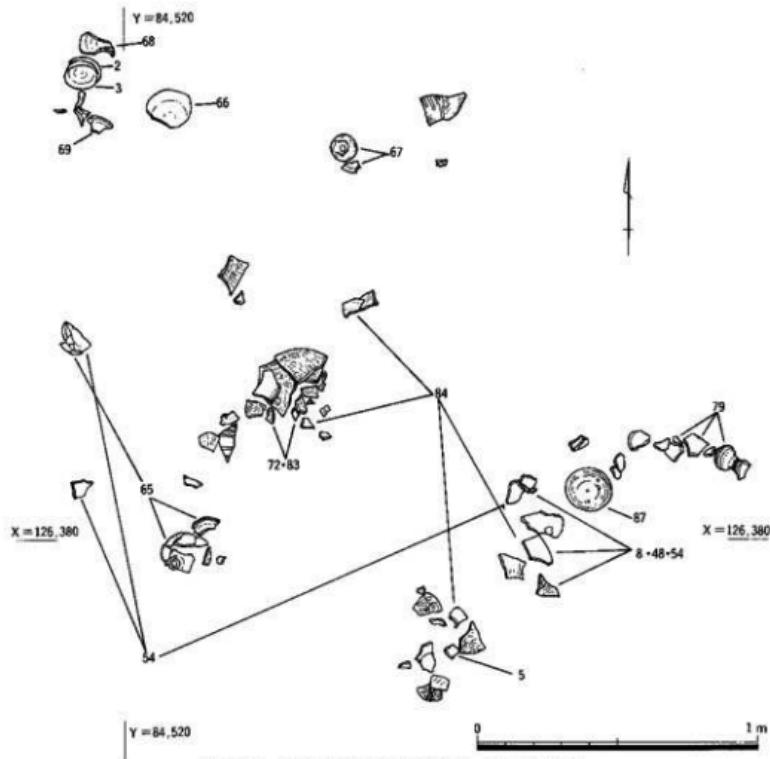
第10図 SM1001遺物出土状況図(全体)



第11図 SM1001遺物出土状況図 (1) 玄室



第12図 SM1001遺物出土状況図 (2) 排水溝



第13図 SM1001遺物出土状況図 (3) 前庭部

遺物

須恵器 (第14~17図)

蓋杯は、器種の判明したものの中で最も出土数の多く、杯蓋30点、杯身32点の計62点について、國化が可能であった。

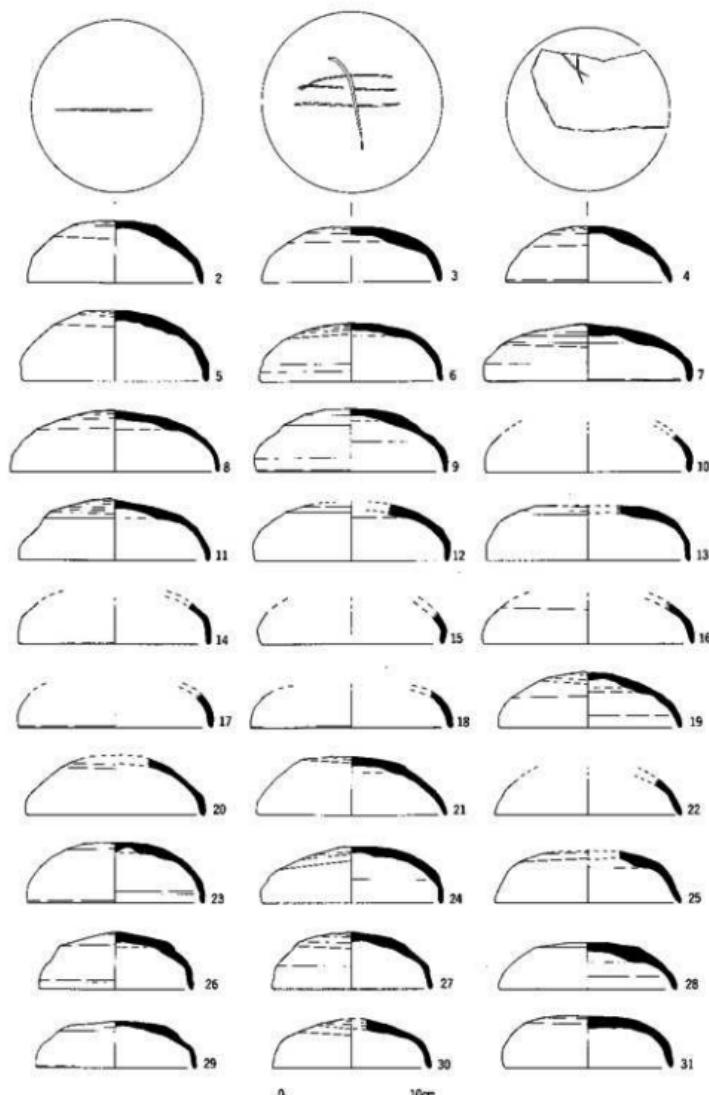
杯蓋はいずれも扁平で丸みを帯びた器形をもち、肩部の稜・口縁端部内面の沈線は退化しており、まったくみられないか、ごくわずかな痕跡をとどめるものである。口径11~15cm、器高は3.3~5.0cmの幅の中におさまる。口径・器高ともに大形のものがより古い傾向をとどめていることが、他の遺跡における出土例において明かである。しかし、連続的な変化であり2~4段階に分けうる点が指摘されるが、出土状況などの根拠が伴わない。2・3・4には天井部外面にヘラ記号が認められる。

杯身はその形態から3群に分けることができる。第1群(33~60)は偏平な皿形の体部に内傾する立ち上がりをもつもので、これに32点のうち大部分の29点が含まれる。形態にはバリエーションの幅がみられ、明確な線引きは困難でさらに細分することも可能である。立ち上がりの長さから8mm~10mmのもの(32~40)、6mm~7mmのもの(41~49)、6mm以下のもの(50~60)の3種程度には分類が可能である。立ち上がりが短くなるにつれて口径・器高とも小形のものを含む割合が高くなる。47~54の底部にはヘラ記号が認められる。第2(61)・第3群(62・63)は蓋と身の形態が逆転後のもので、第2群はやや平坦な底部に直線的な口縁部をもつものである。第3群は第2群に比べて大形の口径をもつもので、62には断面方形の高台がつく。この2群には内面にかえりを有する蓋を伴うものと考えられるが、その出土は確認されていない。

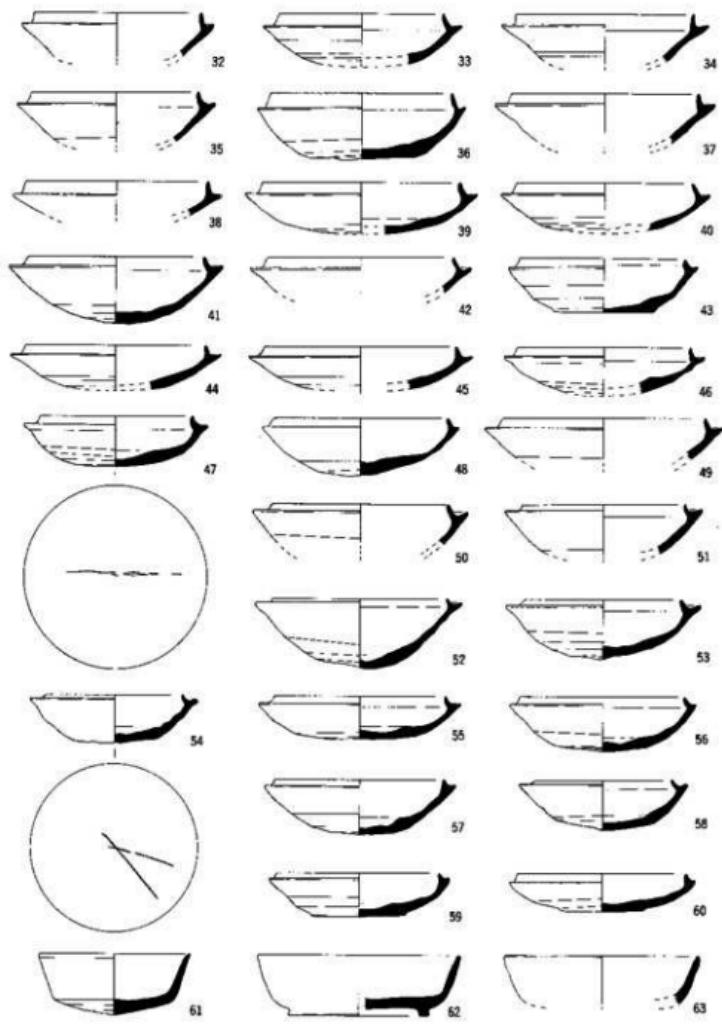
これらの蓋杯のうち、①13・39、②21・26・27・29、③28・56・57・59・60は色調や調整からみて、同工によるものと考えられる。①は軟質焼成でそのため胎土中の黒色の鉱物が浮きだして見えるものである。②は焼成がやや甘く、黄色っぽい色調を呈するものである。回転ヘラ削りが粗いか施されないため、回転ヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめる。26・29には、口縁部外側にナデによる弱い凹線が巡る。21は形態は異なるが、同様の胎土・色調・技法による。③は内面が赤っぽい色調をもつことによって他と区別が可能である。杯身は底部に平坦面をもち、短い立ち上がりという共通の特徴を有する。杯蓋28の天井部も平坦な特徴をもつ。これらはそれぞれの供給窯・工人の違いを示すものであろう。

高杯には、蓋を伴う長脚有蓋のもの3組、無蓋高杯1点とその他に脚端部のみの遺存で杯部などの形状が不明なものなどが3点含まれている。蓋杯の出土数と比較するとやや出土の割合が低い。有蓋高杯(68~70)はいずれも脚が端部に向けて八の字状に大きく広がるもので、脚端部が強いナデによって上下に拡張するものである。脚巾位には弱い2条の沈線がめぐり、その上下に2方向の長方形透かしを穿つ。68・70の透かしは幅をもたないスリット状のものである。これらに伴う蓋(64~66)はいずれも偏平なつまみをもっており、つまみの上面に外側に傾く端面をもつもの(65・66)には肩部にやや退化気味の稜がめぐり、古い形態をとどめる。64の天井部には、彫りの浅いヘラ記号がみられる。色調・法量などの点から64と48、65と69、66と70がそれぞれ一組になるものと考えられる。67は脚部が欠損しているが、開き具合から短脚となるものとみてよい。無蓋高杯71は脚柱がやや細身で、脚端部が丸く緩やかに接地し、上方へ拡張するものである。2条の弱い沈線で区画された2方向の長方形透かしを有する。杯体部下半には2条の突線間に櫛描の列点文を有する。72から74は端部の形状からみて短脚の高杯につくものであろう。

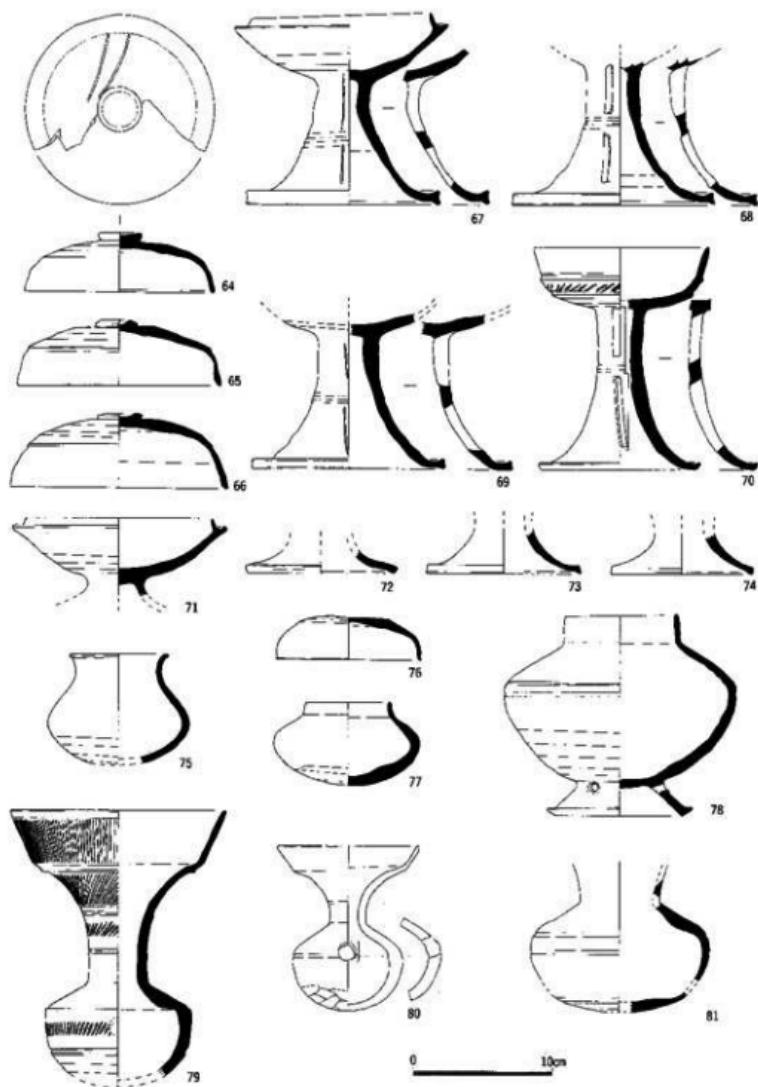
短頸壺には完形である77と破片となっている2個体(75、78)が確認された。いずれも蓋を伴わない。3点とも体部はやや扁平で新しい形態をもつが、口縁の形態はまったく異なる。



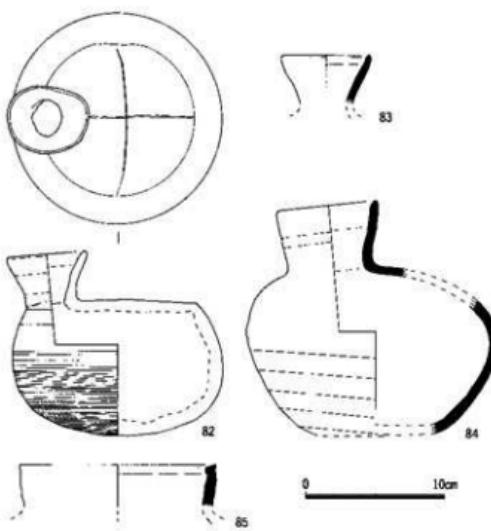
第14図 SM1001出土須恵器 (1)



第15図 SM1001出土須恵器 (2)



第16図 SM1001出土須恵器 (3)



第17図 SM1001出土須恵器 (4)

中でも、75の口縁は端部付近で外側へ強く折れ曲がるという特徴を有する。78は3方向に円孔を穿つ瓶脚を有し、この器種としてはやや特異な例である。体部中位に2条の沈線が巡る。脚端部は斜め上方へ大きく拡張する。

壺は3点が出土し、そのうち79・80は全体の形状が明らかなものである。79は壺部に比して大きく開く朝顔状に口頭部をもつ。突線

や沈線によって壺部に1文様帶が、口頭部には4つの文様帶が区画されている。口頭部上2段にはヘラ状工具による条線による文様が、3段目と壺部の文様帶には櫛描列点文の文様が施されている。80は壺部と比べて短い口頭部をもち、口縁部はラッパ状に大きく開く。81は残存部位が少なく、図上での復元を行っている。壺部には沈線2条を巡らせる。79・81は円孔部を欠く。

平瓶は3個体が出土した。うち83は口縁部のみの出土であるが、壺部の開きからみて平瓶とみられる。82は完形品で、体部は平坦面を上にし口縁部をつけ、通常のものと逆につくやや希有な例である。従って、下半は平行タタキ後回転カキメ調整、上半は回転ヘラ削りによって整形されている。体部上面の平坦面全体に「×」字のヘラ記号をいれる。84は復元によって完形となったもので、体部下半には回転ヘラ削りがみられる。端部はほぼ平底に近い。82・84とともに体部製作時に粘土盤を充填した痕跡が内面に観察できる。

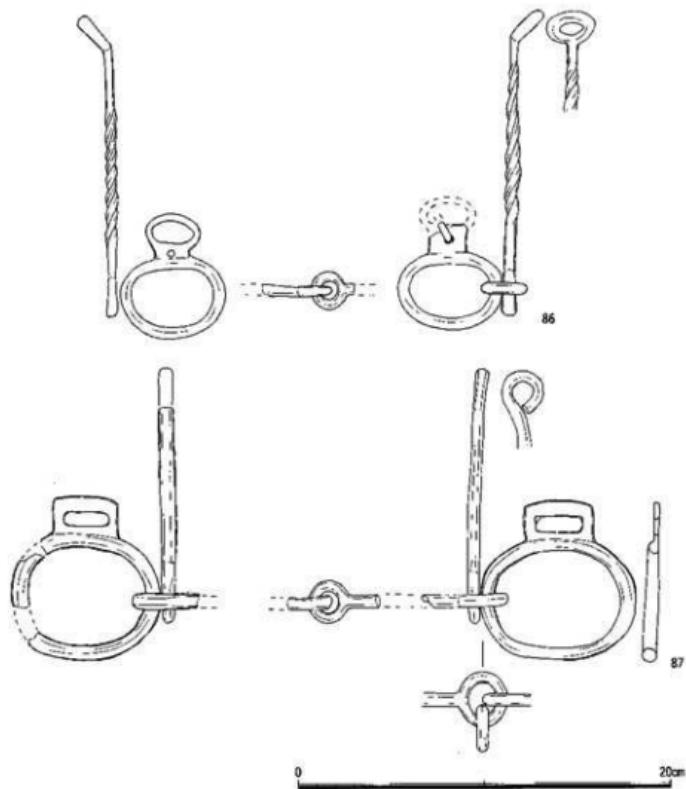
壺85は口縁部のみの破片で、直立し端部内面が大きく拡張している。

以上の須恵器は、蓋杯・高杯・壺・平瓶などで構成されており、なかでも蓋杯の個体数が多い点が特徴である。また、出土している個体数が80個体以上に及んでいる点も県内の古墳でももっとも多い部類と言える。

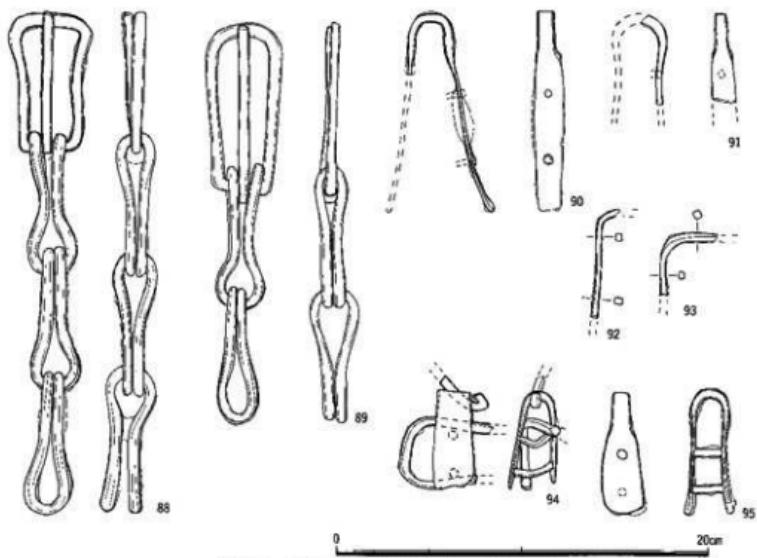
須恵器の年代を蓋杯のグルーピングからみてみると、第一群が田辺昭三氏の須恵器編年⁽²⁾

の TK43型式～TK209型式で 6世紀後葉から 7世紀初頭までのやや幅のある年代に該当する。1号墳出土の土器群でもっとも古い群であり、古墳築造の年代が 6世紀後葉にあったことが分かる。また須恵器が複数型式にまたがっており、この群内の期間で追葬がすでに行われていたことが想定される。第二群は TK46型式・飛鳥II～III式⁽¹⁾、第三群は TK48型式・飛鳥IV式にそれぞれ位置づけられ、これらは追葬に伴うものとみられる。第二・第三群はいずれも杯身しか出土しておらず、副葬土器の内容が少ない。出土状況が安定していなかつたとはいえ、ある程度副葬時の状況を表しているものと推定される。

鉄器（第18～21図）



第18図 SM1001出土鉄器 (1) 馬具 ①



第19図 SM1001出土鉄器 (2) 馬具 ②

馬具

いずれも追葬によるかたづけ行為によって、原位置から遊離した状態で排水溝などから検出された。内訳は素環鏡板付轡 2 セット、鏡に伴う金具 8 点、貝製雲珠の宝珠形飾金具 3 点、などである。

86は素環鏡板付轡である⁽⁴⁾。衡は二連式であり、小円環を介して連結する。欠損部分が多く、規模などに不確定な部分が多いが、引手と衡を連結させていたものと考えられる。鏡板は長径 6.6cm、短径 4.5cm(図面左側)または 4.2cm(同右側)の横長の環状を呈する楕円形で、径 5mm の鉄棒を使用している。鏡具造りの立闇をもつ。方形部の形態は左右でやや異なっている。径 0.4cm の刺金を伴い、右側の立闇では 1.2cm 分が遺存していた。左側の立闇では、鏡具造りの円環部分は高さが 2.9cm を測る。引手は両端に小円環をもつ一条造りで柄と壺部が一体に造られており、全長 16.1cm(同左側)または 16.2cm(同右側)である左右いずれも 2 局分の捩りが加えられている。引手壺はそれぞれ外側に 45 度開いている。

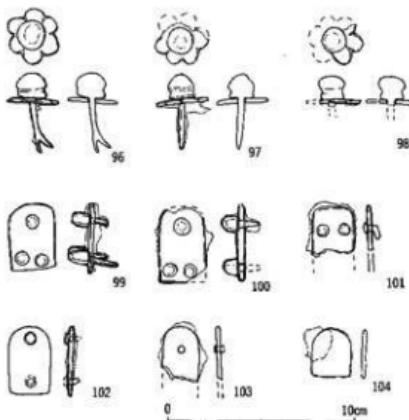
87も素環鏡板付轡で、86と比べて全体に大きめである。二連式衡をもつと考えられるが、やはり欠損部分が多いため衡の長さなどは不確定である。図上では 20.0cm に復元している。鏡板は横径が 8.3cm、縦径が 6.5cm の横長の環状を呈する楕円形である。径 7mm の鉄棒を使用している。立闇は横長長方形の透しをもつ矩形を呈する。規模は左側が幅 3.5cm、高さ 2.0cm、

厚み0.3cmで、右側が幅3.7cm、高さ2.0cm、厚み0.3cmである。引手は両端に小円環をもつ一条造りで、柄と壺部が一体に造られている。86の引手のような捩りや引手壺での開きはない。径8～9mmの鉄棒が使用されている。

88と89は兵庫鎖で、鎖に伴うものである。88は3連式の兵庫鎖で長方形の鉄具を伴う。銹化によって本来の形状を失っているが、復元される全長は26.9cmである。鉄具は幅0.6～0.7cm、厚み0.5～0.6cmの断面方形の鉄棒を中央部に弱いくびれをもつ瓢箪形を呈する。刺金も鉄具全体と同様の角棒による。長さが7.9cm、最大幅4.5cmである。鎖は径0.5～0.6cmの円形の鉄棒を用い、一連ごとの長さは上より7.7cm、7.7cm、7.6cmで同大である。89は現状ではやはり銹化が進み、本来の形状を失っているが、現状通りの鉄具を伴う2連式とすると全長は21.4cmとなる。鉄具は幅・厚みとも0.5～0.7cmの断面方形の鉄棒を用いている。上辺の丸い長方形を呈しており、幅4.1cm、長さ9.6cmで長さ9.4cmの刺金を伴う。鎖は径0.4～0.6cmの断面円形の鉄棒を用いる。一連ごとの長さは7.8cm、7.3cmとなっており、やや不揃いである。

90・91・92・93・94・95・96は木製壺鎖と鎖に伴う金具である。90・91・95・96は、鎖軸金具である。逆V字形を呈しており、兵庫鎖に連結する厚手の部分と木心部を挟み込む舌状の部分とからなり、2か所に鍔を伴うものである。確認された4点は舌状部分の長短などからみて2セットにはおさまりきらないものである。いずれにも有機質部分は遺存していない。90は木心を挟み込む部分が欠損しているが、大きく八の字状に開いている現状での全長が10.6cm、復元される幅が5.7cmとなる。兵庫鎖に連結する部分は幅が0.9cm、厚みが0.5cmを測り、明瞭な関をもたない。舌状部分は幅が不安定で、中半部分に最大幅1.4cmをもち、厚みは0.2cmである。舌状部分の2か所の鍔は遺存部分が少ないが、頭の径が0.5cm、脚の径が0.3cmである。91は、90と比べてさらに遺存状態が悪いが、同様の構造をもつ。兵庫鎖との連結部分の幅0.6cm、厚み0.5cmを測り、やはり明瞭な関をもたない。舌状の部分は幅1.3cm、厚み0.3cmである。鍔は完全に欠損しているが、鍔穴の径は0.4cmである。94と95は90・91と比べると舌状の部分が短い形態である。94は兵庫鎖部分との連結部分から舌状部分が完存している唯一の例である。全長3.9cm、下端の幅2.2cmである。連結部分は幅1.8cm、厚み0.5cm、上端を貫通し上部構造へとつながる金具を有する。舌状部分の最大幅2.1cmで、厚みは0.3cmである。連結部分と舌状部分の厚みに差がみられるが、関はみられない。舌状部分には2か所の鍔が通っているが、頭の部分は4か所とも欠損している。脚は径4mmの断面円形である。鍔の脚に絡まるようにしてコの字状の金具が銹着している。鎖に伴うものであろう。95は構造上は90と類似しているが、全長6.5cm、下端の幅2.1cmとやや相違がある。連結部分の幅0.8cm、厚み0.5cm、舌状部分の幅2.1cm、厚み0.2cmで、関は不明瞭である。頭部は痕跡を残し欠損しているものの径0.5cmで、鍔脚は2か所とも完存しており径0.4cmである。

92・93は、他の破片との明確な共伴関係が確認できなかったため、本来の機能などは推定



第20図 SM1001出土鉄器 (3) 馬具 (3)

となるが、94に付属するコの字形を呈する金具と同様に、鏡に伴うものと考えられる。2点とも一辺4mm四方の断面方形で、ほぼ直角に折り曲げられている。

96・97・98は貝製雲珠飾金具⁽¹⁵⁾で、3点とも鐵地金銅張りである。有機質部分が欠失し金属部分のみの遺存であるために、別の用途も想定し得るが、他遺跡出土の類例からみて貝製雲珠とした。くびれによって弁を表現した六花弁の花形座と宝珠飾とかなる。宝珠飾は花弁座を貫通して下方へ鉢として伸びる。宝珠飾の各所及び花形座の上面には金箔が断片的に観察できる。最も遺存状況の良い96は、高さ53.5mm、幅28.35mm、保存処理後の重さ15.30gである。花形座は厚みが2.75mmで、花弁の幅は10mmから13mmとややばらつきがある。宝珠飾はこの部位だけの高さが13.3mmである。現状ではやや梢円形で、径が15.5～16.8mm、中央部のくびれが13.45mmである。鉢の径は4.0mmで、末端は二股に分かれている。97・98についても、96と構造などに大きな相違はない。97は花形座の六花弁のうち3弁の先端を欠損しており、高さ40.30mm、幅27.80mmで、保存処理後の現存部分の重さは11.37gである。花形座の厚みは2.0mm、花弁の幅は8mmから11mmと96と比べてやや小形である。宝珠飾はやはり現状では梢円形で、高さ13.3mm、径13.7～14.9mm、中央部のくびれは12.4～12.9mmである。鉢のは基部では一辺4.5×5mmの方形で先端はそのままの形状で尖り気味におさまる点が96とは異なる。98は花形座六花弁のうち4弁と鉢を欠損している。現存高15.25mm、復元幅31mmで、保存処理後の現存部分の重さは6.57gである。花形座の厚みは1.8mm、弁の幅は10.0mmである。宝珠飾の高さは12.30mmで、上部の径は14.25～14.5mm、基部の径は12.45～13.0mm、中央部のくびれは12.2～12.3mmである。

帯金具 (99～104)

99～104は鉢を伴う薄い金属板の金具で、いくつかの形態差がみられる。やや大きく端部を丸め、3個の鉢を伴うもの(99、100、101?)とやや細長く2個の鉢を伴う(102、103)、鉢の痕跡がみられないもの(104)がある。革などの帶あるいは貝製雲珠に伴うとみられる。

鞍具 (105)

径0.5cmの断面円形の鉄棒を瓢箪形に折り曲げている。遺存部位の長さが5.9cm、最大幅が3.8cm、基部の幅が3.4cmを測る。刺金は欠損している。

大刀 (106)

図化したもの以外にも数十点の破片が出土しているが、いずれも層状に剥落したり、原型をとどめていかないために本来の形態や個体数は不明である。106は大刀の切先に近い部分の断片である。刃幅2.8cm、厚み1.0cmで、現存する長さは6.8cmである。断面は偏平な倒卵形をなし、背部は丸みを帯びる。

刀装具 (107)

鉄刀の鍔金具片である。刃部側の一片を欠く。

鉄鎌 (108~111)

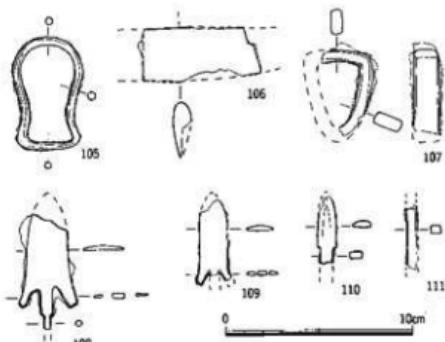
鉄鎌は頭部のみの遺存を含めて4点の出土で、そのうち形式の判明したものは3点である。上述した馬具の豊富さに比べると、鉄鎌については質量ともにやや物足りなさを感じられる。108は平造脇抜三角形鎌で、切先と茎部下半を欠く。逆刺は外反気味で関は両角関である。茎部は径0.3cmの断面円形である。109はやはり平造脇抜三角形鎌で、欠損部分が多い。108よりも鎌身が細身で、逆刺は外反している。110は両切刃造長頸鎌で、やはり欠損部分が多い。鎌身関は両角関である。推定鎌身長3.0cm、幅1.0cmで、鎌がある。頭部は断面が偏平な方形である。111は頭部のみの遺存で、断面は偏平な方形である。鎌身の形状は不明である。

装飾品 (第22~24図)

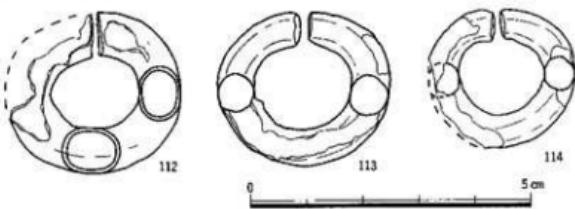
装飾品は耳環、切子玉、管玉、トンボ玉、勾玉、ガラス玉、土玉が出土した。徹底的な盗掘を受けておりや数量的に単発の種類も含まれているものの、本末副葬された種類は一通り含まれていると考えられる。出土した位置がほぼ玄室に集中していること、他の古墳での出土状況からみて欠落している種類があまりみられないことがその理由である。そのため、土器や鉄器と比較すると盗掘の際に石室外に持ち出されにくかったといえる。

耳環(112~114)

3点が出土した



第21図 SM1001出土鉄器 (4)



第22図 SM1001出土耳環

が、いずれも玄室内からのものである。112は銅地金張りで、銅芯は径7.5~10mm、厚さ0.9mmの中空の銅管を芯として用いている。中空造りであるために細片とはなっていたが、表面の金の遺存状況は極めてよく、往時の光沢をとどめている。113と114は銅地銀張りで、やや法量に大小はあるものの一对になっていたと想定される。いずれも、径5~6mmの中実の銅管を芯として使用しており、銅芯部分の腐食が著しいが、表面の銀の遺存状況はよい。

切子玉 (115)

六角形2面と長台形12面による水晶製の切子玉である。穂はいずれも鈍い。穿孔は主に上面からの一方向であるが、上下面いずれの孔の周辺にも細かい剝離が生じている。

管玉 (116)

濃緑色の色調をもつ碧玉製の管玉。上下面・側面いずれも丁寧な研磨が施されている。穿孔は二方向より行われている。

トンボ玉 (117~120)

トンボ玉は細片となっていたものもあるが、4個体が確認された。4点ともベースとなるガラス玉に黄色（ペールイエロー）の別のガラス素材を埋め込んでいるので、大形でベースが紺色に近いもの（118）と、小さ目でベースが明るい緑色のもの（117・119・120）に分かれる。孔の内壁には熱によって溶けた痕跡がある。

勾玉 (121)

ヒスイ製の勾玉で、湾曲が弱く、頂部がやや尖り気味となる。穿孔は主に図右側の側面より行われており、両側面に細かい剝離が生じている。研磨は全体に丁寧であり、滑らかな形状を有する。

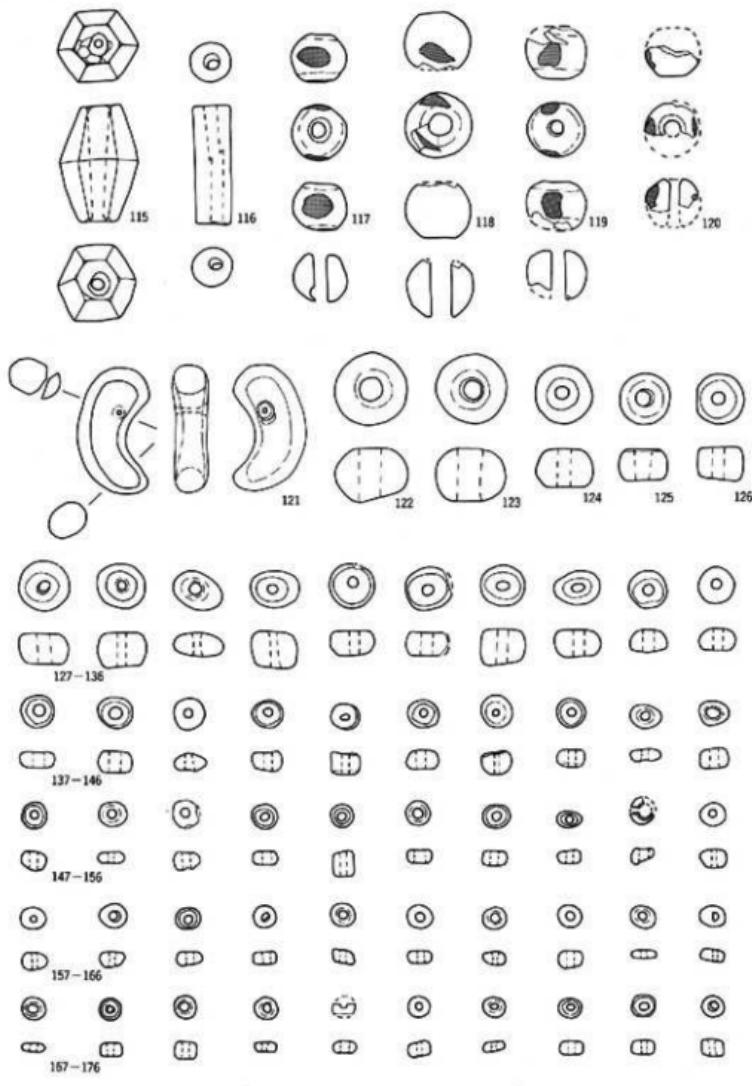
ガラス玉 (122~291)

173点について図示したが、この他に細片となっていたものも多いため、本来副葬されていた実数はこれをかなり上回るものと推定される。

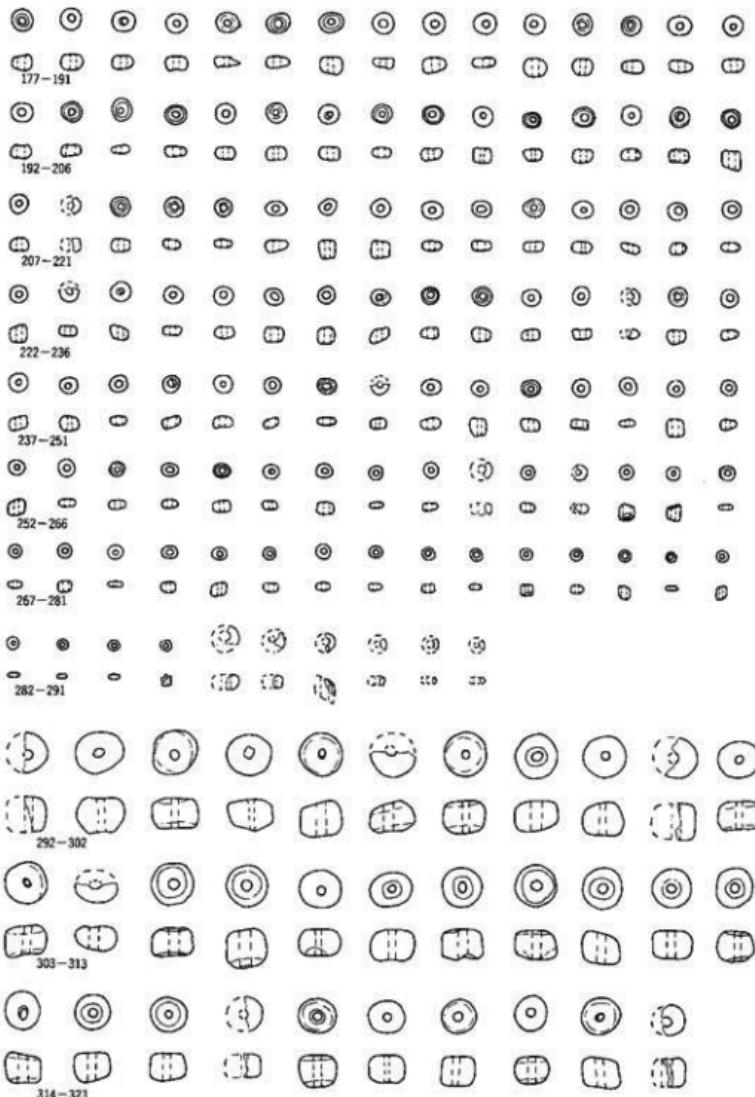
173点を法量の分布の集中度から3つのグループに分けると

- ①径が12mmを越える大きさをもつもの (122、123) 2点
- ②径が7.6~10.2mmまでの玉が含まれるやや大きいもの11点
- ③径が1.8~7mmの玉が含まれ最も大多数の資料 (160点) が含まれるグループとなる。①はいずれも明緑色系統で、重量的にも他よりも隔絶して重く、形態的にも類似している。ガラス玉の中でもやや違った用法が想定される。②③はさらに分類に検討の余地があり、径が3.5mm前後がその境界の候補としてあげられるだろう。

次に色調の面から整理すると、紺系統（オックスフォードブルー、ミッドナイトブルー、ウェストミンスター、ブラックウイング、パープリッシュブルー、ウルトラマリン、インキブルー、シアンブルー、コバルトブルー）が69点、濃緑（マーリングリーン、サファイアブルー、



第23図 SM1001出土玉類 (1)



第24図 SM1001出土玉類 (2)

ティールグリーン、ビーコックブルー、ブルシアンブルー、ブルシアングリーン、マートルグリーン）系統が59点と多く数量上のピークがある。黄色・青緑系統・緑系統も幾分みられるが、紺・濃緑系統と比較した場合その比率は低い。また、後述する1号墓・3号墳でみられるような、法量と色調の相関関係はみられず、色調ごとに分類した場合の各玉の法量にはばらつきがある。

土玉（292～323）

32点が出土した。径が5.9～8.5mm、厚みが4.6～6.85mmの範囲におさまる。形態・法量ともに範囲内でのばらつきが目立つ。

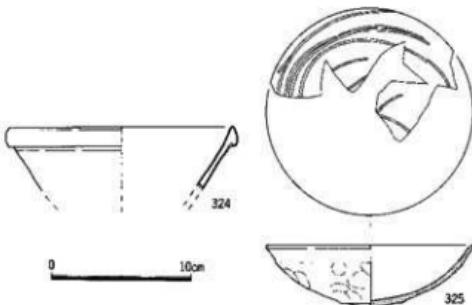
その他の遺物（第25図）

白磁（324）

口縁部のみの破片であるが、反転によって口径が16.0cmに復元された。幅広の玉縁の口縁をもつもので、削り出しの高台を伴っていたものと思われる。釉は厚めに施釉され、灰オリーブ色に発色する。口縁部から体部にかけて釉の垂下がみられる。横田賢次郎・森田勉両氏の分類⁽⁶⁾によるIV-2類に相当し、12世紀代の所産と考えられる。

瓦器（325）

緩やかなカーブをもつ浅い皿形の瓦器。底部中心をわずかにはずれた位置に、断面

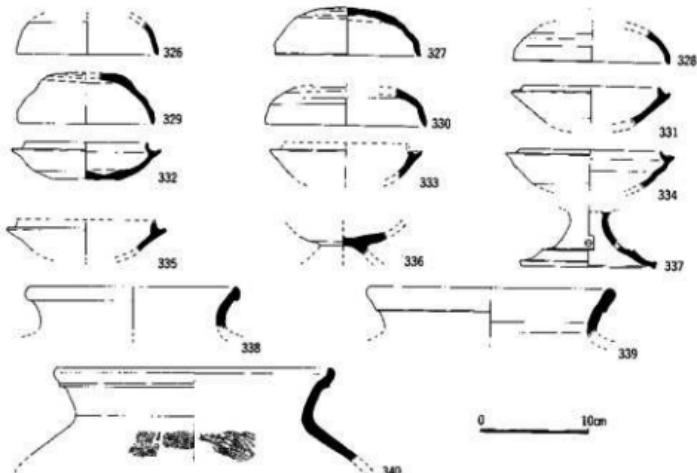


第25図 SM1001出土白磁碗・瓦器

三角形の低い貼付け高台が付く。口縁部はナデによって外側へ屈曲している。外面はユビオサエが顯著である。内面には幅2mm程度の原体による簡略化されたヘラミガキがみられ、見込みでは螺旋状となる。尾上分類⁽⁷⁾のIII-3～IV-1期に相当し、13世紀後半代の年代が考えられる。

1号墳周辺の須恵器（第26図）

1号墳周辺の表土中、堆積土あるいは擾乱土内より出土した須恵器は、どの遺構に本来伴うものであるか断定することができないものであるが、1号墳から遊離したものである可能性が最も高いものである。いずれも須恵器で、器種には蓋杯、高杯、甕が含まれている。



第26図 SM1001周辺出土須恵器

杯蓋（86～90）のうち、89はかなり器高が高い特徴を有するが、いずれも肩部の稜が退化し、口縁端部内面の稜もわずかな沈線の痕跡として残るのみであり、同時期のものとを考えることができる。杯身（91～95）は小破片のみで、全体の形状は捉えにくいが、立ち上がりが短いものが中心である。高杯96は杯部と脚部との接合部で、短脚高杯であろう。脚部97は三方向に円孔を有し、裾に鋭い突線を廻らせる。高杯または台付壺の可能性がある。甕は口縁部によって3個体が識別された。口縁部の形態・口径にバリエーションがあるが、いずれも体部最大径が40～50cm程度のものと思われる。1号墳に確實に伴うものと比較すると、甕の個体数が多いという特徴がみられ、本来の副葬位置の違いを反映している可能性がある。

まとめ

1号墳は山田古墳群Aを構成する古墳の中で外部施設・内部施設あるいは副葬品などに関する最もっとも豊富な内容をもつ。周濠を有する墳丘径10m、横穴式石室全長7.05mは規模としては決して大きな部類にはいるものではないが、1号墳に付随する小竪穴式石室5基や2号墳・3号墳の規模を考慮すると群内で存在が際だっている。

副葬品のうち須恵器は蓋杯を中心としており、その数において県内でももっとも多い部類に含まれる。甕は横穴式石室内の埋土中からは出土せず、墳丘の周辺から出土した。古墳での祭祀形態を示すものであろう。馬具については、轡・鎧・貝製雲珠の金具などが出土し注目される。県下では上板町柿谷2号墳、菖蒲谷西山B4号墳、山崎2号墳、板野町、蓮華谷

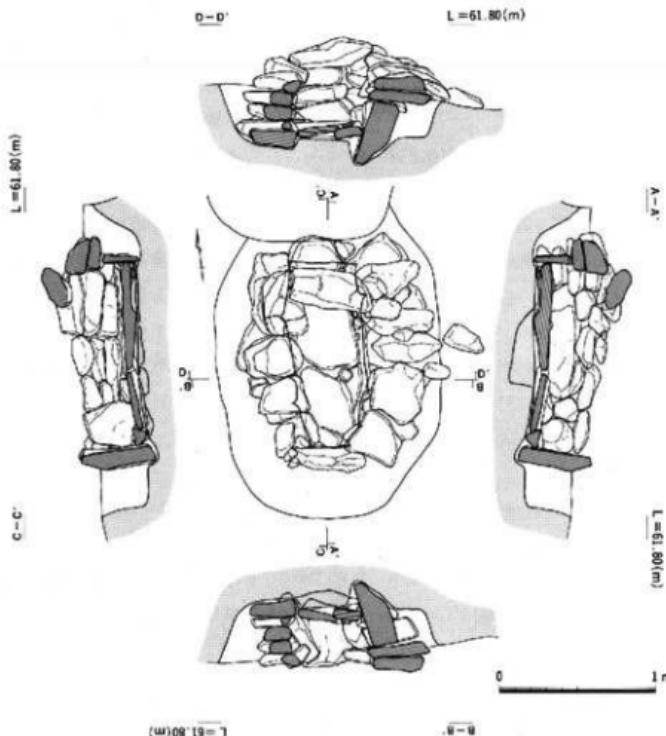
(II) 4号墳、美馬町段の塚穴太鼓塚古墳、徳島市ひびき岩16号墳などで馬具の出土が知られるが、出土古墳数・出土馬具数のいずれについても少なく、そうした中で貴重な資料ということができる。

築造時期は出土須恵器群の検討から6世紀の後葉におさえることができ、7世紀の中葉・後葉にそれぞれ追葬が行われている。また、断定はできないものの6世紀末から7世紀初頭にも追葬の可能性があり、一世代20~40年間隔の継続的な利用の状況を窺うことができる。

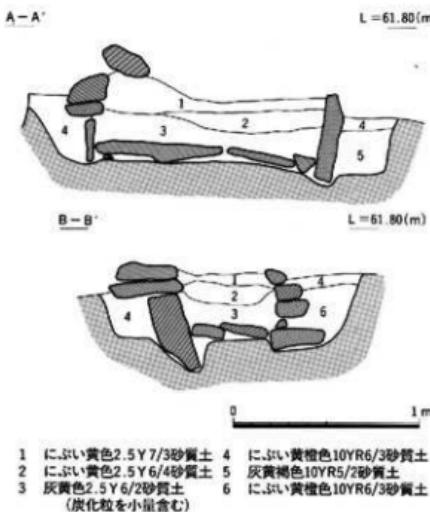
1号石室墓 (ST1001) (第27図)

位置と現状

1号墳の墳頂部、横穴式石室の東側のF-5グリッドに位置する。北側には2号石室墓が隣接して築かれている。1号墳の墳丘部の表土を除去中に検出された。検出時には、天井石



第27図 ST1001実測図



第28図 ST1001土層図

石室の構築状況

墓壙内に基底石を据えるための穴を5cmほど掘りくぼめ、壁体を積み上げる。その際、壁体と墓壙との間には数度に分けて土を入れ裏込めとしていた。石材は用いていない。両小口と側壁の大形の石については、平坦な面を壁体とするために豊積とし、墓壙との隙間を土で埋め裏込めとしている。側壁の残りと2段目以上は小口積みとしている。基底石を積んだ時点では平面プランは北半が広く、南側がすぼまっている。2段目以上では三角積とし緩やかに持ち送って、3段ないし4段を積んだ時点で天井石を置いている。現存する天井石は横面の上半に使用されたのとほぼ同形同大の砂岩の自然石である。

床面の形成

砂岩の平たい自然石を2枚敷き、南側の小口寄りに隙間を砂岩の凹縫などによって充填している。従って、北が広く南側が狭いプランはこの2枚の礎床の形状に則したためであろう。床面形成に際しては、床面の水平を保つために縫の下面の形状に合わせて、裏込めと同様の土（第28図 第5層）を敷いているが、土圧のためか結果としては南側へわずかに傾斜している。

法量・主軸・頭位

石室基の規模は内法で長さ1.2m、最大幅0.47mで、北側がやや幅広の平面プランをなす。主軸はN-8°-Eで、後述する遺物の出土状況からやや東よりの北側に頭を向けていたこと

は北側に架けられた一石を除いて原位置にはなかった。また、東側の側壁は土圧によって外側へわずかに倒れていた。石室墓内には二次的な堆積土が3層にわたって堆積していたが、平行な堆積であり盗掘や擾乱は受けていない。（第28図）

墓壙の規模・形態

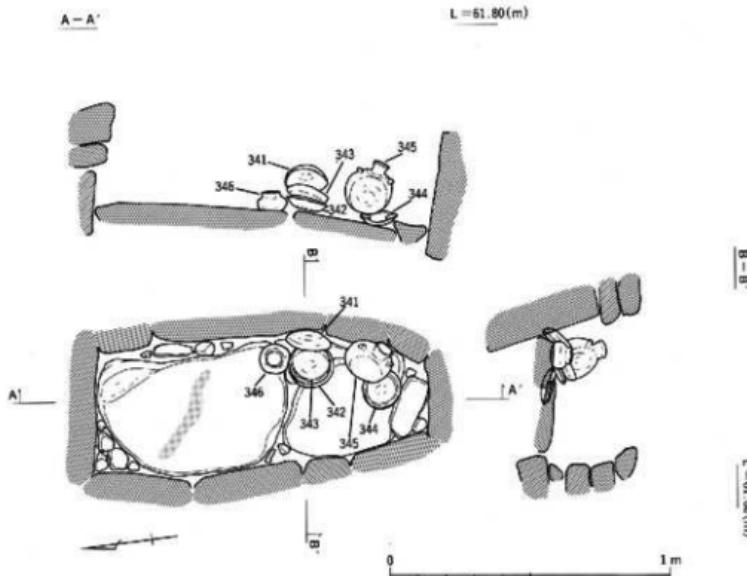
墓壙は1号墳の墳丘部の盛り土を終えた後に、墳丘を切り込んで、掘り込まれている。墓壙は、北端を2号石室墓の墓壙によって一部切られている部分を復元すると、長軸2m、短軸1.43mの小判形で、1号墳の墳丘検出面から0.35~0.4mの深さがある。

が推察される。

遺物の出土状況（第29図）

出土遺物は、須恵器が6点とガラス玉などの装飾品類が100点である。石室内に堆積した土は天井石の下面にまで3層の土が平行な堆積状況を示しており、盗掘などの改変を経なかつたことが分かる。従って、以下に述べる遺物の出土状況と組み合わせは本来の副葬状況をそのままとどめるものである。須恵器は石室内床面の南東隅に蓋杯2組と短頸壺、提瓶がそれぞれ1点の計6点がかためられた状態で出土した。蓋杯のうち341～343は杯蓋341・杯蓋343・杯身342の順で重なっていた。提瓶345は壁面にもたせかけるように立った状態で出土した。

また、ガラス玉99点と土玉1点の計100点がやや北よりに帶状に集中し、石室の疊床床面よりもわずかに浮いた状態で出土した。これらのガラス玉が首飾りとして用いられていたと仮定すると、頭の位置は北側ということになろう。また、この場合土器は足元側に集められていたことになる。

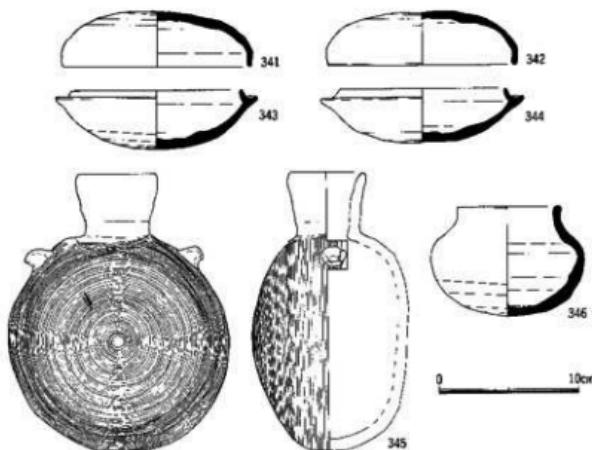


出土遺物（第30・31図）

須恵器

2組の蓋杯341～344は出土状況や焼成から、図のように341と342、343と344セットにあつ

たことが分かる。杯身はいずれも偏平な器形で立ち上がりの退化と内傾化が進行している。立ち上がり内面の屈曲は弱い。杯蓋も杯身同様に偏平で、口縁部はいずれも丸くおさめており、内面に沈線は巡らない。ただし、344の口縁



第30図 ST1001出土須恵器

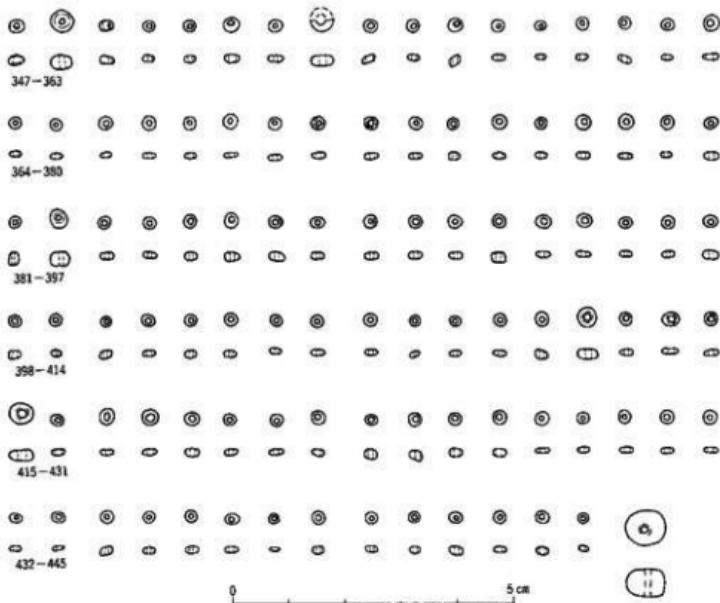
部外面にごくわずかな外への屈曲がみられる。提瓶345は吊り手部分が退化して機能しなくなり、単なる突起として表現されている。口縁部も単純に丸くおさめる形態である。偏球形の壺部の片面を回転カキメ調整で、もう一方の面を回転ヘラ削りで調整している。形態などから、提瓶の中でも新しい傾向をもつ。短壺蓋346は肩の張らない形態で口縁端部はやや平坦におさめられ、ごくわずかに外反している。焼成などからみて346に伴う蓋は元々なかったようである。これら6点の須恵器はTK209型式と共に特徴を有する。

玉類

ガラス玉99点と土玉1点の計100点が出土した。前述のような出土状況や石室自体の遺存状況から100点が一連のものであったと考えられ、その組み合わせを考える上でも貴重な資料といえる。

ガラス玉

総数で99点の出土をみた。いずれもが石室内北よりまとまって出土したものである。法量の面からみると径が1.9～2.8mmに、厚みが0.8～1.8mmにそのほとんどの個体が集中しており、ばらつきが少ないといえるであろう。1号墳のガラス玉と比較すると、小形のものが中心で



第31図 ST1001出土玉類

ある。そうした中で、348・355・415は径が4mm前後あり、大きめである。孔径は0.7mm～1.5mmまでのばらつきがあるが、1.1mm、0.9mm、0.7mmにそれぞれピークがあり、1号墳・3号墳のガラス玉に比べて全体に小さい傾向がある。

ガラスの色調の面からみると、濃緑（サファイアブルー）が最も多く、94点を数える。そのほかの色調としては明緑（オパールグリーン）1点（411）、緑（ディープグリーン）1点（354）、黄（シトロンイエロー、ペールイエロー）3点（348・382・415）がある。これを法量との比較という観点からみると、紺系統は法量的にほとんどばらつきがみられず、画一的ともいえる。紺系統と比較すると明緑・緑・黄の各系統は法量的にみても濃緑のグループよりも明らかに大きく、特に径における差が著しい。こうした点は3号墳出土のガラス玉とも共通する特徴である。製作技法・工人との関わりを追求するためにはさらに資料の蓄積が必要である。

土玉

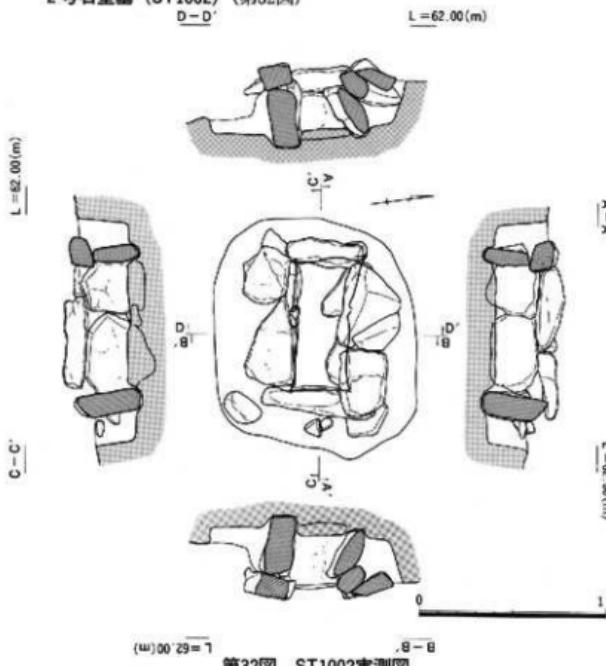
1点のみの出土である。1号墳でみられた土玉と比較すると、ほぼ平均的なサイズ・重量をもつ。装飾品總体としてみた場合、99点のガラス玉の中で1点の土玉がどのように用いられたかは不明である。

1号墳周囲で検出された小竪穴式石室5基の中で、もっとも遺存状況がよいものである。1号墳の墳丘を切り込んでいることから、1号墳に従属性の位置づけをする事が可能である。法量上からは、成人の伸展葬が困難なため再葬墓と考えられる。天井石の架構方法などについて、他の4基の構造を復元するに当たって貴重な資料である。

5基の中でも須恵器とガラス玉を副葬品としてもっていたことも注目される。須恵器は蓋杯と壺類による6点で、基本的な副葬パターンが分かることとしても重要である。

副葬土器の型式からは6世紀の後葉の年代が与えられる。1号墳の年代と同時期かまたは直後の段階に築かれており、その関係の強さを示唆している。

2号石室墓 (ST1002) (第32図)



第32図 ST1002実測図

わたって堆積していた(第33図)。

墓墳の規模・形態

墓墳は1号墳の墳丘と1号石室墓の墓墳を切って掘り込まれている。小判形を呈し、長軸1.23m・短軸1.08mの規模をもつ。

位置と現状

1号墳の墳頂部、横穴式石室の東側のF-5グリッドに1号石室墓に隣接して位置する。1号石室墓と同様1号墳の墳丘部の表土除去中に検出された。壁体は2段分しか残っておらず、天井石は原位置をとどめていなかった。また、北側の側壁は土圧によって内側に傾いていた。石室墓内には二次的な堆積土が3層に

A-A'

L=62.00(m)

石室の構築状況

石材はいずれも砂岩で、板石の平坦面を石室の内側に向けて立て基底石とし、墓壙との隙間を砂質土で充填し裏込めとしている。2段目は自然石のやや丸みをもつ石を基底石に載せ小口積みにしている。壁体は2段目まで、天井石を架構していたものと考えられる。

床面の形成

碌床や貼り床などの特別な施設を設けず、墓壙底をそのまま床面として利用している。

法量・主軸・頭位

石室墓の内法は長さ0.63m、中央部の幅が0.28mの長方形プランを呈し、西側はわずかに幅広くつく

られている。主軸はN-80°-Wである。頭位は遺物が出土しなかったために不明であるが、西側がやや幅広くつくられており西側に頭を向けていた可能性が強い。

遺物

石室墓内から検出された遺物はなかった。

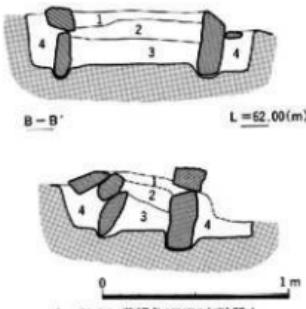
1号石室墓と同様、1号墳の墳丘に築かれている。碌床による床面をもたない点が特徴である。上部構造は1号石室墓に類似したものが復元される。法量からは1号石室墓同様、再葬墓とみられる。また、位置関係において1号石室墓と対となっているものの、法量・副葬遺物において劣っている点は、群構成上の重要な問題である。

出土遺物をもっていないため年代は推定となるが、1号石室墓の墓壙を切っていることから、6世紀後葉であるが、再葬墓としての性格からみて1号墳・1号石室墓に近い、6世紀後葉の新しい段階に位置づけうる。

3号石室墓(ST1003) (第34図)

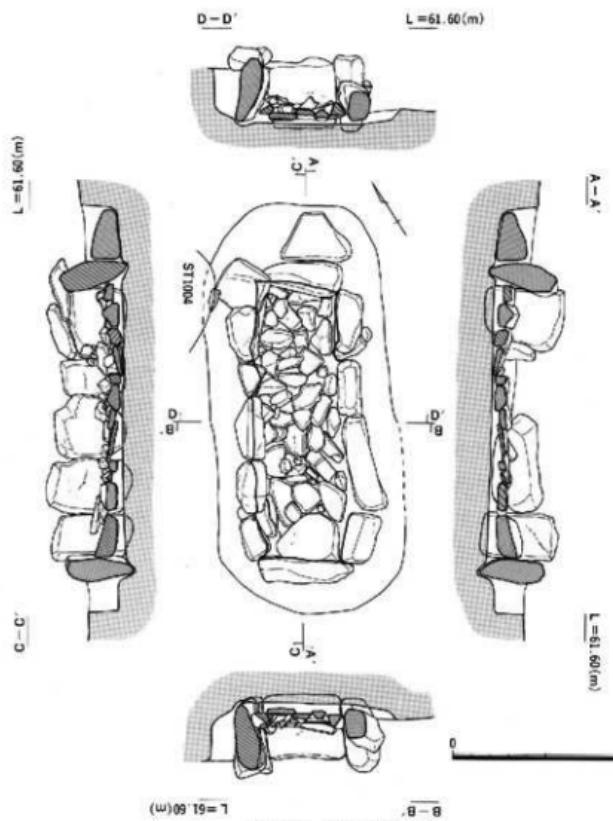
位置と現状

1号墳北東部、G-6グリッドより1号墳周濠の外縁に接するようにして検出された。3号石室墓の北西側には小口部分を接して、4号石室墓が築かれている。削平によって大部分が失われており、壁体の2段目はわずかに北側コーナーに残るのみで、遺存状況は良好とはいえない。南西側の側壁が外側へ倒れた状態で検出されたほか、壁体を形成していたと考えられる石材が碌床上面に崩落していた。また、原位置を保っていると考えられるその他の壁



1 にじい褐色10YR5/4砂質土
2 にじい黄色2.5Y6/4砂質土
3 にじい褐色2.5Y6/3砂質土
(炭化粒を小量含む)
4 にじい黄色2.5Y6/3砂質土

第33図 ST1002土層図



第34図 ST1003実測図

石室の構築状況（第35図）

東側側壁は一部倒壊した側壁の本来の位置が明らかであったため、抜取り穴に据えることによって形状を復元している。墓壙を掘った後、基底石を据え礫床を敷設する。北側の短側壁の小口の石材の外側には人頭大の砂岩を裏込めとして用いている。礫床下部と壁体の裏込めの砂質土とに差異は認められず、ここまで工程は一連のものと考えられる。壁体は短側壁では横長となるように、長側壁では縦長となるように板状の石材を使い分けている。北西部のコーナーでは2段目の壁体が遺存しており、基底石と同様の石材を小口積みにしている。

床面の形成

床面は砂岩のやや大きめの平たい礫と小形の円礫を用いて全面に敷き詰められている。平たい礫は南小口沿いに最も大きい石を用いているほか、床面の南側は全般に大きめの石材が

体についても、
土圧によってわ
ずかずつではあ
るが、内傾して
いる。

墓壙の規模・ 形態

墓壙は基盤層
を掘り込んで形
成されており、
その形状は隅丸
長方形を呈し、
長軸2.18m、短
軸1.01mをはかる。
基盤層への
掘り込みは現状
で最も深い部分
で約0.3mを測
る。その一部は
4号石室墓の墓
壙によって切ら
れている。

目立つ。この南小口の疎は枕石の可能性がある。円疎はこれらの平たい疎の間隙を埋めるように充填し、床面を平坦に整えているが、中央部分が5cm程度くぼんでおり、死屍安置のためあるいは有機質の骨蔵器がおかれている可能性があるが、類例が知られておらず、断定は困難である。

法量・主軸・頭位

石室墓の法量は内法で長軸1.46m、短軸0.45mを測る。疎床床面からの高さは最も残りの良い部分で約0.35mである。平面プランは基本的には長方形であるが、南側でわずかに膨らんでいる。主軸はN-30°-Eで、頭位は不明である。

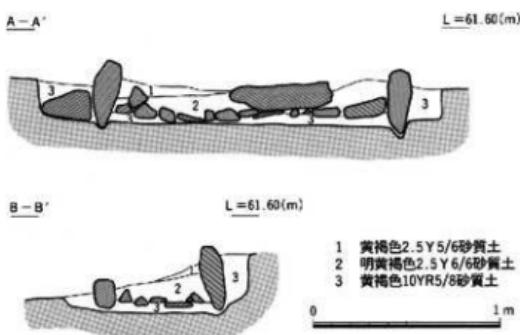
遺物の出土状況（第36図）

疎床中央部やや南より、西側の側壁と疎床の隙間からは鐵鎌が2点出土した。長頭鎌と方頭鎌が各1点づつで、いずれも先は北側に向いている。2点とも破損しており、良好な状況ではないものの、副葬時の状態をほぼそのまま残しているとみられる。

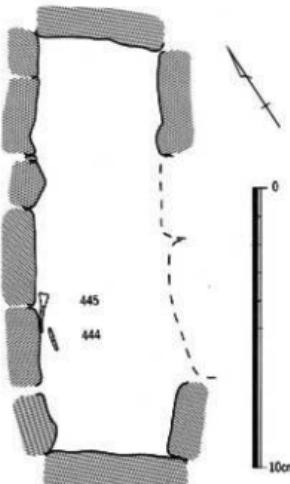
出土遺物（第37図）

鐵鎌

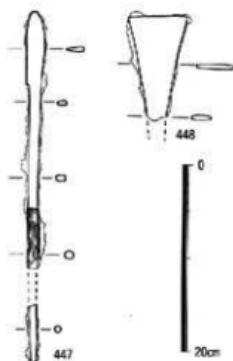
447は片刃造長頭鎌で、茎部中央を欠く。切先は鈍く、鎌身関は角関で、関部はわずかな台形関である。茎部には木質が遺存し、その上端は幅1mm未満の紐状纖維を左回りに巻き付けて留めている。448は平造方頭鎌で、鎌身関部から茎部を欠く。鎌身関部の形態が不明である。



第35図 ST1003土層図



第36図 ST1003遺物出土状況図



第37図 ST1003出土鉄鐘

1号墳の墳丘外に築かれた石室墓で、規模の面からは1号石室墓よりも大きく、県内におけるこの形態の石室墓の中でも大形の部類に含まれる。法量上は伸展葬を可能としているが、構造からみて、再葬墓とみておきたい。また、中央部がくぼむ構造も再葬方法についての問題を提起するものである。

副葬遺物として、鉄鏡2点が出土した。1号石室墓よりも質量ともに少ない点は位置関係も含めて、1号墳との関連の強さに因るものであろう。年代は鉄鏡の形式から1号石室墓などと同じ6世紀の後葉～末にかけてのものとみられるが、土器が出土しなかったため、細かい位置づけをすることはできない。

4号石室墓 (ST1004) (第38図)

位置と現状

1号墳の北東部、G-6グリッドで検出された。前述の3号石室墓と接している。検出された時点では上部構造のほとんどが削平を受けており、基底石についても東側・南側のすべての壁体が失われており、また東側の墓壙の肩も削平されていた。一方石室墓の北西部では2段目の壁体が遺存しており、部位により遺存状況に差異が認められる。

墓壙の規模・形態

墓壙は基盤層を掘り込んで形成されており、その形状は西側がやや幅広の圓丸の長方形を呈している。失われた東側の墓壙を復元すると長軸1.26m、短軸は幅広の西側で0.95m、東側で0.53mを測る。墓壙の掘り込みは現在の基盤層から約0.25mである。墓壙の一部は3号墓の墓壙を切っている。

石室の構築状況 (第39図)

墓壙を掘削後、基底石のための掘り方を掘りくぼめる。掘り方の深さは用いた石材の形態によってまちまちであるが、5～10cmにおさまる。基底石を据え、礎床面を形成するが、その際の裏込めは墓壙掘削時の土を用いている。壁体の基底石はいずれも砂岩の板石を用い、その平坦面を壁面として利用している。2段目の壁体は砂岩の平坦な自然石を用い、その小口の平坦部分を壁面としている。

床面の形成

長軸0.65mの砂岩の大形の平坦な石材をまず置き、西側小口には人頭大の平坦な石材を用いて、床面の平面形態を長方形に整えている。さらに拳大の砂岩砾によって隙間を充填して

いる。床面は標高61.60mでほぼ平坦である。

法量・主軸・頭位

石室墓の規模は内法で長軸0.8m、短軸0.36mの長方形プランをなす。主軸はN-70°-Eであるが、頭位方向は不明である。

遺物

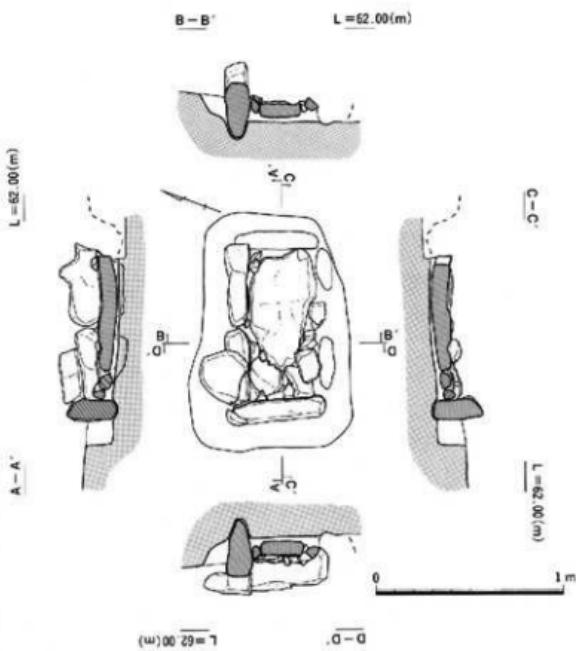
出土遺物は全くみられなかった。

3号石室墓に隣接する石室墓で、規模的には3号石室墓と比較してかなり小形である。ここでは砾床に大形の板石を1枚用い、その回りにもやや大形のものを使っている点が特徴である。法量からみて、再葬墓とみられる。したがって、副葬遺物はなかったものの、6世紀後葉～末の年代が想定される。

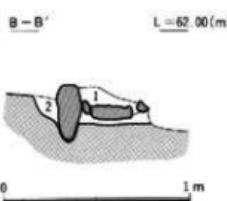
5号石室墓(ST1005) (第40図)

位置と現状

1号墳と2号墳の墳丘の外側、1-4グリッドより検出された。2基の横穴式石室の開口部からは、ほぼ等距離である。表土掘削の際に検出されたが、この時点ですでに天井石などは失われていた。しかし、北半では壁体がほぼ3段残っており、5つある石室墓の中では1号石室墓

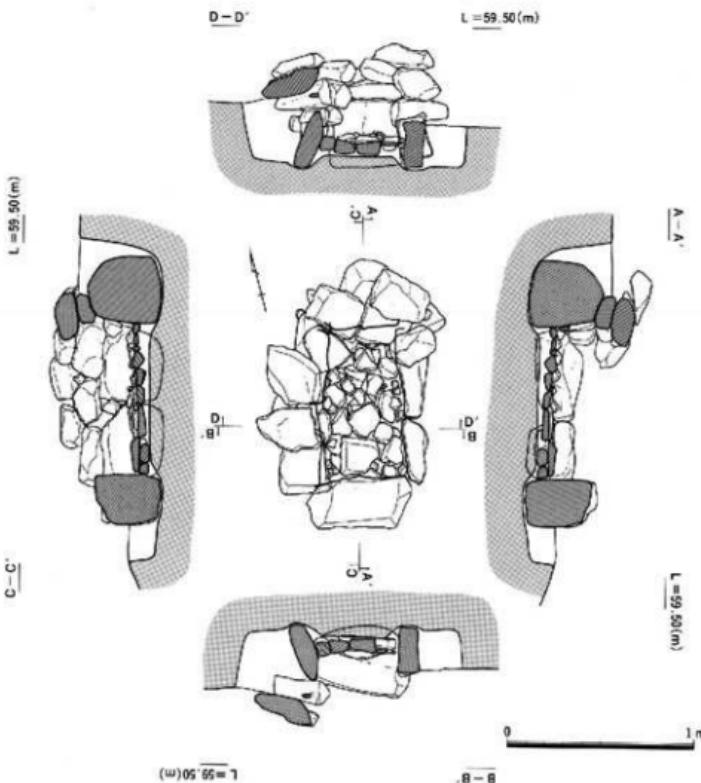


第38図 ST1004実測図



1 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
2 明黃褐色10YR6/6砂質土

第39図 ST1004土層図



第40図 ST1005実測図

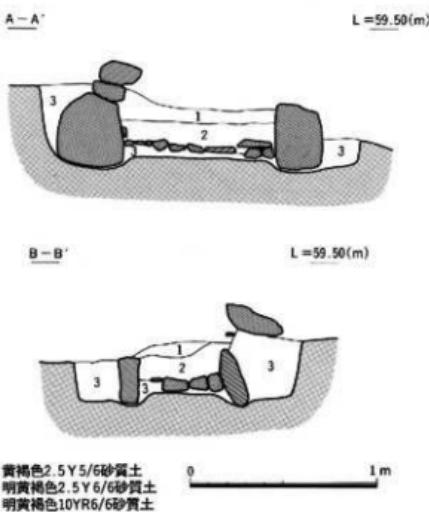
に次いで遺存状況がよい。南側では小口の壁体が外側へ崩落していたが本来の位置が復元された。なお、5号石室墓の西側に隣接して、石室墓に共通する石材が集中して出土する地点があり、石室墓（6号石室墓）の可能性が考えられていた。しかし、1～5号石室墓でみられるような壁体の構造や櫛床の施設をもっていないために、主体部ではないと判断した。

墓壙の規模・形態

墓壙は基盤層を掘り込んで形成されており、長軸1.73m、短軸1.20mの規模をもつ。特に遺存状況の良い北側では基盤層からの掘り込みは0.40mを越えるが、盛り土などは確認されていない。

石室の構築状況（第41図）

図上では、砕けて原位置を離れていた南側小口の壁体の石材の接合によって本来の位置に復元している。墓壙掘削後、基底石を据え礫床を敷設する。その際、基底石の裏側と礫床の下部には同様の土を用いて裏込めとしている。石材はすべて砂岩の自然石を用いているが、基底石には平坦面をもつ石を立てて利用している。基底石の短側壁では薄い石材を横長で用いているため背が低く、土圧によつて内傾している。長側壁では厚みのある石材を利用している。基底



石による平面プランは南側が広く、北側が狭い台形を呈している。しかし、北側小口では基底石の両側に、石材を小口を内側に向けて添えるように用いており、2段目以上のレベルではプランは丸みをもち、緩やかに持ち送っている。基底石と小口積み2段で、天井石の架構を行っているのであろう。

床面の形成

砂岩の自然石で、径10~15cm程度の平たいものを基本に用い、それらの隙間を径5cmほどの小砾で埋めて礫床としている。南側小口には1辺約20cm、厚さ5cmの平たい砾を礫床の上に置く。礫床レベルでの平面プランでは南側が北側に比べて幅広の台形状を呈していることからも、礫床上の石が枕石に用いられていた可能性が考えられる。

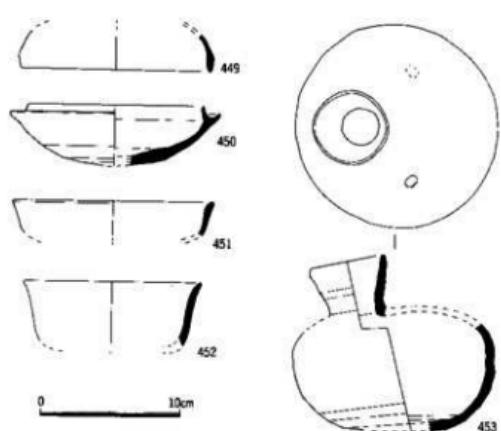
法量・主軸・頭位

石室墓の法量は内法で長軸0.85m、短軸0.45mを測る。最も遺存状況の良い北東隅部分の礫床床面からの高さが約50cmである。主軸は南北よりやや右廻りに振った状態(N-14°E)であるが、枕石らしい石を用いることや平面プランから南側に頭を向けていた可能性が高い。

遺物の出土状況

石室墓外側の北西角の部分、及び石室墓上面において数点の須恵器の出土をみた。調査時に棺外副葬の可能性も考えたが、他の遺跡を含めた石室墓の例や時期的にばらつきがみられることを考慮すると本米の副葬土器ではないとみられるが、埋葬後の祭祀に伴う可能性も考

えられ、参考のために図を付した。



第42図 ST1005周辺出土須恵器

出土遺物(第42図)

須恵器

蓋杯が1組、杯身形態逆転後の杯が2点、平瓶が1点出土した。蓋杯(449・450)は蓋・身のいずれもがやや径が大きく偏平である特徴をもつ。450の口縁部のつくりは薄く、立ち上がりは短く、内傾化が進行しており、TK209型式に属す

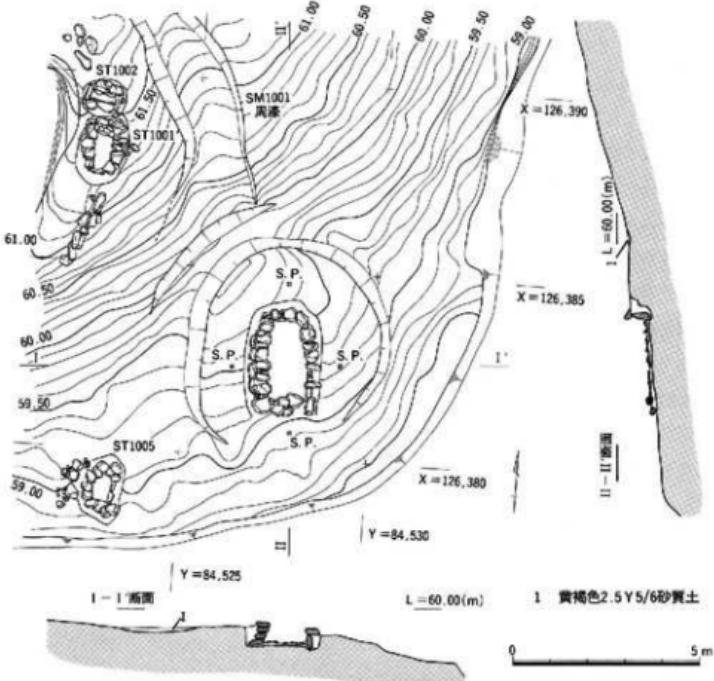
る。451・452は杯身形態の逆転後もので、法量がやや異なるが口縁端部がナデによって外反するものである。TK48型式・飛鳥IV式である。平瓶は偏球形の体部に単純な形態の口縁部をもつ。体部上面の円形浮文は吊手の痕跡器官である。調整は全般に行き届かず、器底は粗い。口縁の形態などから蓋杯と同じ時期かその次の型式に位置づけられる。

5号石室墓は墳丘の前面部に築かれていたが、遺存状況はよい。1号石室墓と基本的に同じ構造をもっているが、規模的には大形の1号・3号の各石室墓、小形の2号・4号の各石室墓のちょうど中間である。法量から再葬墓とみられるが、人骨は出土していない。遺物は石室墓の外で出土したものであり、年代を決める精密な資料とはならない。築造の年代は他の4基同様の6世紀後葉～末とみるべきであろう。

2号墳 (SM1002)

位置と現状

1号墳が位置する尾根の中心部より南東寄り、J・K-4～6グリッドにまたがって位置する。盛り土部分が完全に流失しているために、調査前の地形測量時点では墳丘としての認識ができなかった。逆に古墳としての認識を受けていなかったために、横穴式石室や副葬遺物が保護されたということもできよう。また、横穴式石室内には石室に用いられているのと同形同大の石材が十数点落ち込んでいた。石室内の堆積は平行堆積であることから、石材を



第43図 SM1002墳丘図

盗るための上面の破壊以外には、盗掘も行われていないとみてよいだろう。

墳丘

墳丘・周濠および横穴式石室のための墓壙は地山削り出しによって形成されているが、盛り土部分は流失しており、その盛り土の工程については墓壙の裏込めから若干復元できる程度である(石室の構築の項)。現存する墳丘は周濠を含めた径が5.2m、高さ0.5mであった(第43図)。本米の高さは2.2m前後、盛り土部分は約1.2~2.1mはあったと推定することができる。

周濠

周濠は、墳丘が流失している石室前面部を除く全周に巡っていた。1号墳周濠との境界にあたる北西側では幅2.2m、深さ0.1mを測り、1号墳の墳丘を一部切り込んでいた。堆積は黄褐色の砂質土で、しまりが悪い。

横穴式石室（第44図）

石室の構築

地山を長径3.08m、短径2.05mに掘りくぼめて墓壙としている。壁体の構築と同時に裏込め部分の土を何層にも分けて充填している（第45図）。その堆積は西側壁においてもっとも遺存状況がよく残っており、基底石の裏込めも含めて6層が確認できた。6層はいずれも黄褐色の砂質土で、炭化物を含む層があり（4層）、しまりが良好な層（7・8層）と不良な層（6・9層）がみられる。このことから1号墳同様に、盛り土が行われている部分に関しても連続的な工程が行われていることが想定される。

横穴式石室は無袖式で、玄室の平面形態は開口部寄りが丸く膨らむ胴張り形態をとっている。墳丘径からみてもこれ以上大きく伸びる形態となることはないであろう。奥壁は主として板石2枚を立てて用い、その横にももう1石添えるような小形の石材を立てている。これらの奥壁及び壁体の最下段については、やや偏平な石材の平坦面を内側に向けて据えるいわゆる腰石で、2段目以上の石材は小口積みとしている。腰石は右側壁よりも左側壁に、開口部寄りと比較して奥壁近くに大形の石材が使われている。右側壁中央部では腰石も小口積みが行われている。奥壁コーナーでは、2段目は側壁にもまたがる三角積みを行っており、丸みを作り出している。側壁に関しても緩やかに持ち込んでいる。

横穴式石室各部の計測値は、全長2.52m、奥壁から閉塞石までを玄室とみると玄室長2.02m、奥壁部での幅0.86m、中央部の幅1.17m、開口部での幅1.04m、残存高0.68mである。

閉塞石

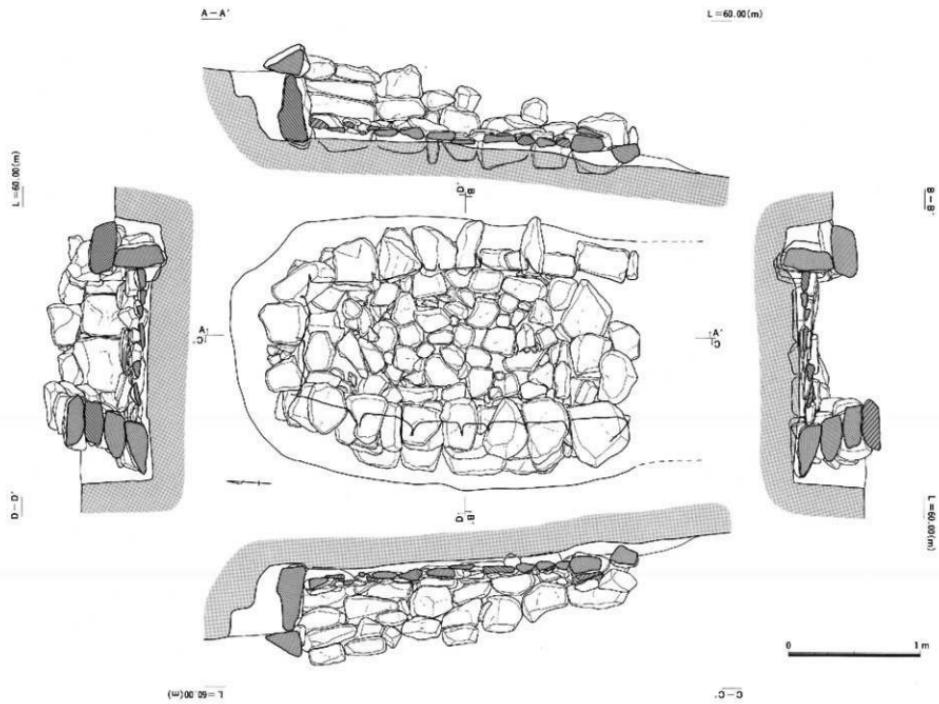
検出段階の開口部分に砂岩の自然礫が小口積みにして2段分据えられていた。積み重なりや須恵器の状況からみて閉塞石であろう。特に土を多く詰めた痕跡ではなく、石のみによるものとみられる。遺存する石材が2段しかなく、追葬による積み替えについては不明である。

床面

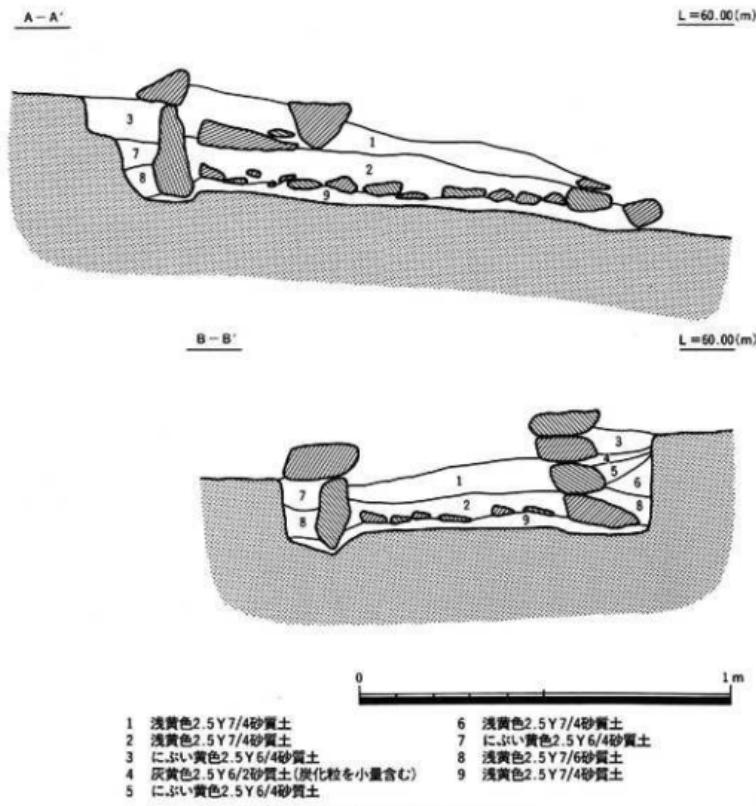
砂岩の平たい川原石を敷いた礫床による床面が1面形成されていた。敷き詰め方は、奥壁沿いの4石をまず置き、その後壁体に沿うように行っている。したがって、中央部付近では整然と配列していない。奥壁部分は標高59.25m、開口部付近で59.10mと向かって緩やかに傾斜している。人骨や原位置での装飾品の出土がなかったために、埋葬の状況については不明であるが、規模や礫床の構築からみて主軸に平行な中央部への一体の埋葬を基本として作られていることが分かる。

遺物の出土状況（第46図）

閉塞石の内側に須恵器の杯身2点、杯蓋1点の計3個体が原位置で出土した。鉄製品は鉄錠と刀子が石室内の各所に散乱している状態で、切先の方向にも規則性はなく原位置から遊



第44図 SM1002横穴式石室実測図



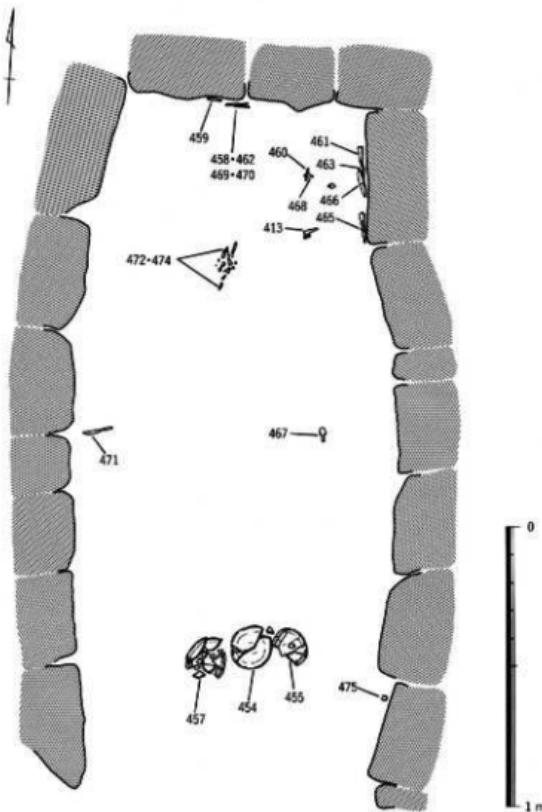
第45図 SM1002横穴式石室土層図

離している。

玄室内の遺物の出土の状況は大きく4つに分けることができる。壁面に沿うように出土した鉄器は切先が削い、種類もまとまっており、原位置を保っているか側壁と櫛床の隙間に転落したと考えられるグループである。このグループはさらに奥壁に沿い切先を西へ向ける一群と、東側の側壁に沿い切先を奥壁側（北側）へ向ける一群とに分かれる。奥壁の一群には長頭片刃鎌・主頭鎌・柳葉鎌が、東側壁のグループには方頭鎌・椿葉鎌・主頭鎌が含まれ、鉄鎌の形式ごとのまとめはみられない。

玄室内床面上の閉塞石沿いから出土した須恵器3点は土圧などの力によって細片となつてはいたものの、その場で破碎したものでいずれも復元することによって完形となるもので、

やはり原位置を保っているグループである。このうち454の杯蓋と455の杯身は出土状況からもセット関係になる蓋杯である。また、457の杯身とセッタとなる蓋456は床面から浮いた状態で破片となって出土した。閉塞石に接するように置かれていたことや後述する耳環の出土位置を考え合わせると、初葬時の状態ではなく追葬時にこの位置へ



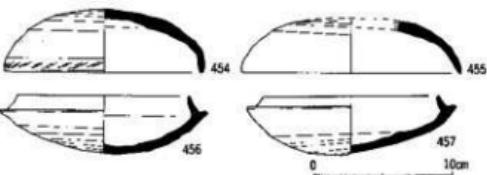
第46図 SM1002遺物出土状況図

据えられたものと考えられる。

玄室内床面上中央部から出土した鉄器は切先も揃わず、破片となっているものも多い。床面よりも数cm浮いた状態で出土した。刀子、鐵鎌が含まれる。原位置を保っていた壁沿いのいずれのグループにも刀子が含まれていないことから、上記の3つとは異なるグループを形成していた可能性がある。

閉塞石と側壁の隙間から出土した耳環は、その出土位置から意図的にその場所へ置かれたものではない可能性が高い。追葬時に閉塞石をはずして、前の遺体・副葬品の移動を行った

際に、何かの要因で転落したと想定するのが妥当であろう。追葬時の片付けなどによると考えれば、最終葬に伴うものではないことになる。



出土遺物（第47・48図）

須恵器（454～457）

閉塞石の内側部分からまとまって出土した杯身2点、杯蓋1点の3点、さらに床面から浮いた状態で出土しており、原位置から遊離していた杯蓋1点の計4点が出土した。4点の須恵器は色調などからみて、454と455・456と457という組み合わせが考えられ、蓋身とも扁平化が進み、やや小形である。蓋杯の立ち上がりはほぼ直線的に内傾し、端部はやや尖り気味におさまる。454の口縁端部外面には刀子などの先端の鋭利な工具による斜行する文様がみられる。これらの須恵器はいずれも、TK43型式の範疇におさまるものである。

鉄器

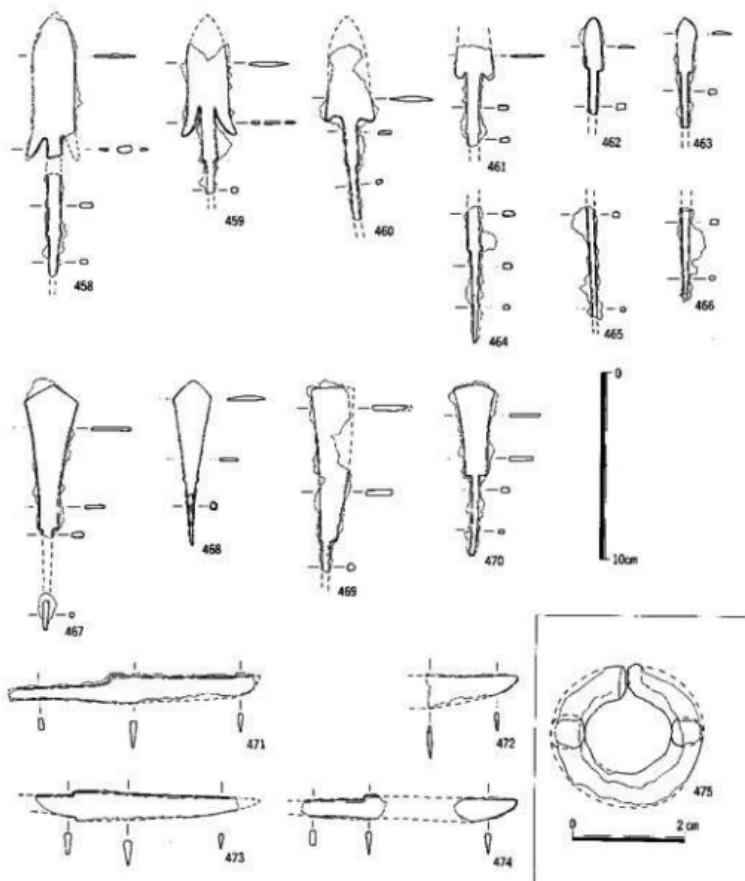
鉄鎌（458～470）

458・459・460・461は兩丸造脛抉三角形鎌である。458は棘状関を、459・461は台形関を、460は両角関を有する。これら4点には逆刺の形態・反りに差異が認められる。460・461の逆刺の反り・抉は弱い。462・463は片丸造長頸鎌である。462の鎌身関は角関と斜め関で左右が異なり、頭部長などは不明である。463は刃部右側がやや膨らみ氣味で、鎌身関は両角関である。464・465・466はいずれも長頸鎌の頭部から茎部にかけての破片であるが、460・461には直接接合しない。464は頭部・茎部とともに断面長方形で棘状関を有する。465・466は断面長方形を呈する。467・468は半造主頭鎌である。467の鎌身の関は両角関で、刃部は拡大氣味で、関部にかけて内側に反りがみられる。468は完形品で、鎌身の関は棘状関で、刃部は467よりも鋭い。茎部に木質が遺存する。469・470は平造方頭鎌である。469の鎌身の関は両角関で、茎部は断面不整円形を呈する。470は完形品で、刃部はやや円頭状を呈し、関部から刃部に向かってやや開き氣味である。

鎌身部の観察から、脛抉三角形鎌で逆刺が外反するもの2点、逆刺の短いもの2点、主頭鎌2点、方頭鎌2点、片丸造三角形長頸鎌2点という組成である。全体で10本と決して豊富ではないものの、多種にわたっている点で興味深い。

刀子（471～474）

いずれも玄室中央部分から出土したもので、図化した4個体以外にも別個体となる可能性



第48図 SM1002出土鐵器・耳環

のある破片があった。471は刃部などを欠く。刃は無闇で、背は角闇を有する。茎は細身である。472は切先・茎尻を欠く。研ぎ減りのためか刃部が鋭い。刃は角闇で、背にも角闇を有する。473は切先のみの残片である。背は明瞭な段をなさない。474もやはり欠損が多い。

刃は無闇で、背には角闇を有する。

耳環 (475)

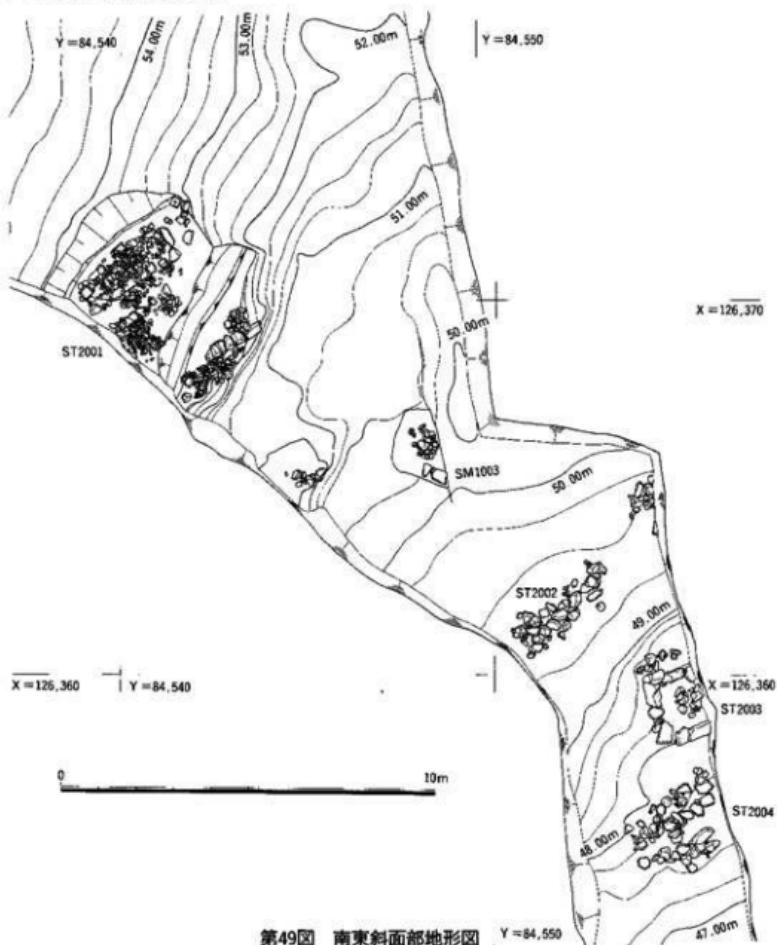
銅芯銀張りで、径4.2~4.8mmの中実の銅管を芯として用いている。表面の銀が剥落し、また銅芯も腐食が著しく、遺存状況は良くない。

まとめ

2号墳は墳丘径・高さとも小さく、目立ちにくいために残された古墳である。西側に隣接する1号墳との強い関連性を窺わせる古墳である。墳丘や横穴式石室の規模では1号墳を下回っているが、墳裾を接するように築造され、横穴式石室のやや胴が張る形態が1号墳の玄室と共通する点は注目される。

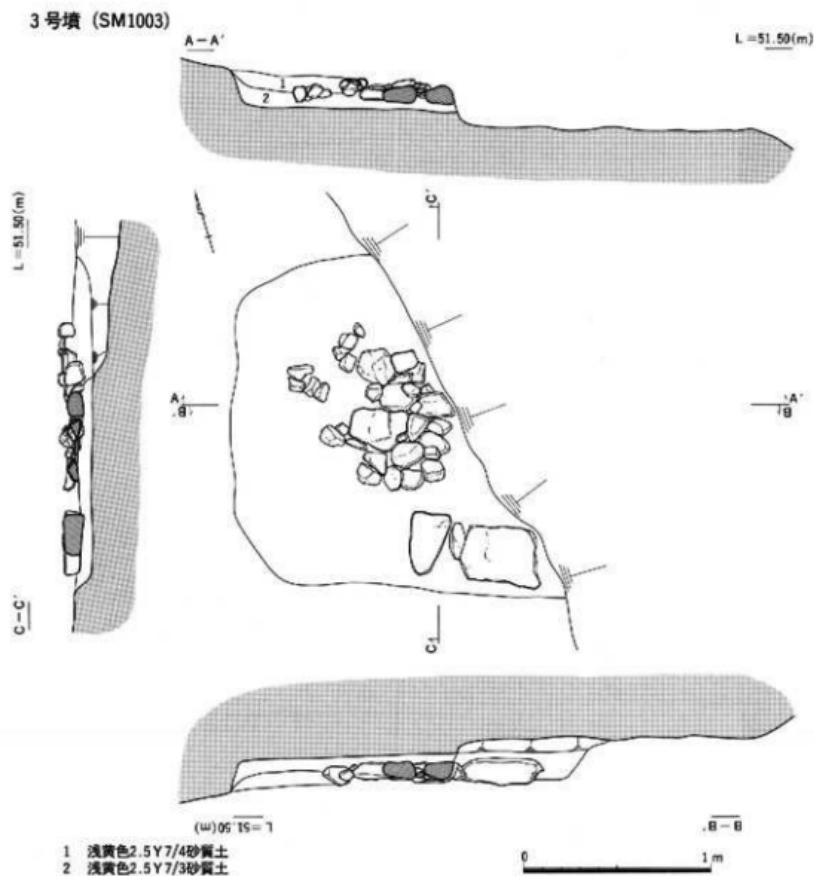
遺物については、須恵器の副葬は4点と貧弱であったが、鉄鎌・刀子が床面よりまとまと出土し、その形式も多岐にわたっている。須恵器の型式からは1号墳と同様の6世紀の後葉の築造が考えられるが、周濠の切合い関係からは2号墳がより新しく位置づけられ、6世紀後葉の中でもやや新しい段階のものであろう。

B 斜面部の遺構（第49図）



第49図 南東斜面部地形図 Y=84,550

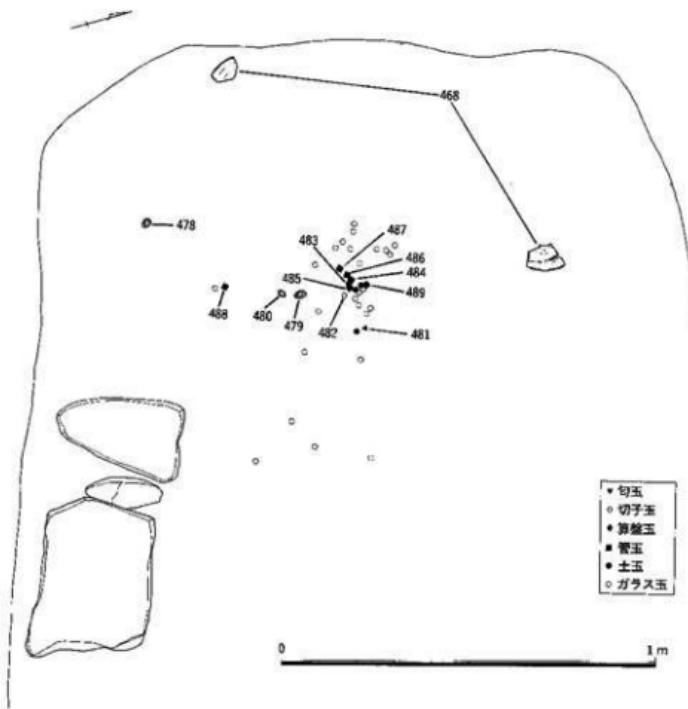
斜面部における遺構は、調査区が尾根上部分から幅を狭める地点に集中している。古墳時代の遺構は標高50.5m前後の斜面で検出された3号墳のみである。中世墓は斜面の上位よりにおいて1～4号墓が検出された。



第50図 SM1003横穴式石室実測図・土層図

位置と現状

1号墳・2号墳の位置する尾根の稜線からみて南東側の斜面、G・F-9グリッドに位置する(第49図)。横穴式石室を主体とする古墳であるが、上面及び玄室の前面を大きく削平されており墳丘及び石室の大部分が失われていた。周囲の等高線の若干の乱れが3号墳築造の時点の地形を少しでもとどめていると仮定すれば、墳丘径が6~7.5m程度に復元できる。削平を受けている横穴式石室の前面では基底石に用いられているのと同形同大の石材が点在しているが、レベル的に一致しておらず原位置を保ってはいない。横穴式石室の奥壁よりの基



第51図 SM1003遺物出土状況図

底石と礫床床面の一部が遺存しており、床面上のわずかな堆積土内から玉類・耳環・須恵器が出土した。

横穴式石室（第50図）

全体に遺存状態が悪く、玄室奥壁側にのみ石材が原位置を保っていた。主軸をN-73°-Wとし、東南東に開口する。墓壙は幅が180cmで、深さ15cm以上に掘りくぼめ2層の砂質土（第49図1層、2層）で墓壙の底面形状を整えた後、砂岩の自然縫による基底石と礫床を敷いている。基底石は3石が原位置にあり、平たい面を上下とし小口を内側に向くように据えられている。玄室のプランは墓壙の平面形から胴張りになっていたと想定される。墓壙の形態から復元される玄室幅は最大で1.15m、奥壁部で0.85mである。

礫床は砂岩の一辺10~30cmの平たい砾を敷き詰めている。検出された範囲ではほぼ平坦で、そのレベルは標高51.30mである。人骨の出土はなかったものの、装飾品類の出土状況から1体の中央部への埋葬状態が明らかとなった。玄室幅からみると主軸に平行な埋葬が行われていたようである。

遺物の出土状況（第51図）

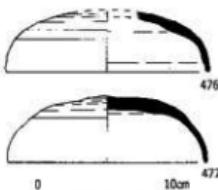
須恵器は墓壙の上面の、やや床面より浮いた状態で破片となって出土した。したがって、これらは原位置から遊離しているとみることができる。また、玄室前面の削平箇所の浮いた位置から出土した須恵器片が数点出土しており、3号墳に伴うものとみられるため、後に一括して実測図を掲載した（第54図）。

一方耳環を含む装飾品類は、その集中の度合いや出土レベルが床面直上であることからみて、原位置を保っているものとみられる。耳環479の出土位置を中心とする中央部付近には勾玉・切子玉・算盤玉・管玉・土玉・ガラス玉の3号墳出土のすべての種類が40cm×25cmの狭い範囲に集中し、被葬者の上半身の位置に比定できる。1点遊離していた耳環478は479とのセット関係が確実であり、若干の移動も考慮する必要がある。

横穴式石室出土遺物（第52~53図）

須恵器（476・477）

3号墳に確実に伴う須恵器は蓋杯の2点のみで、476はほぼ完形品である。476・477はいずれも天井部が丸みを帯びる器形で、肩部の稜は退化している。476の口縁部内面には緩やかな沈線が巡る。これらに伴う杯身は出土していないが、周辺で出土したものに年代的に近い須恵器がみられ、3号墳との関係が考えられる。これらについては別項で紹介する。TK43型式に相当する。



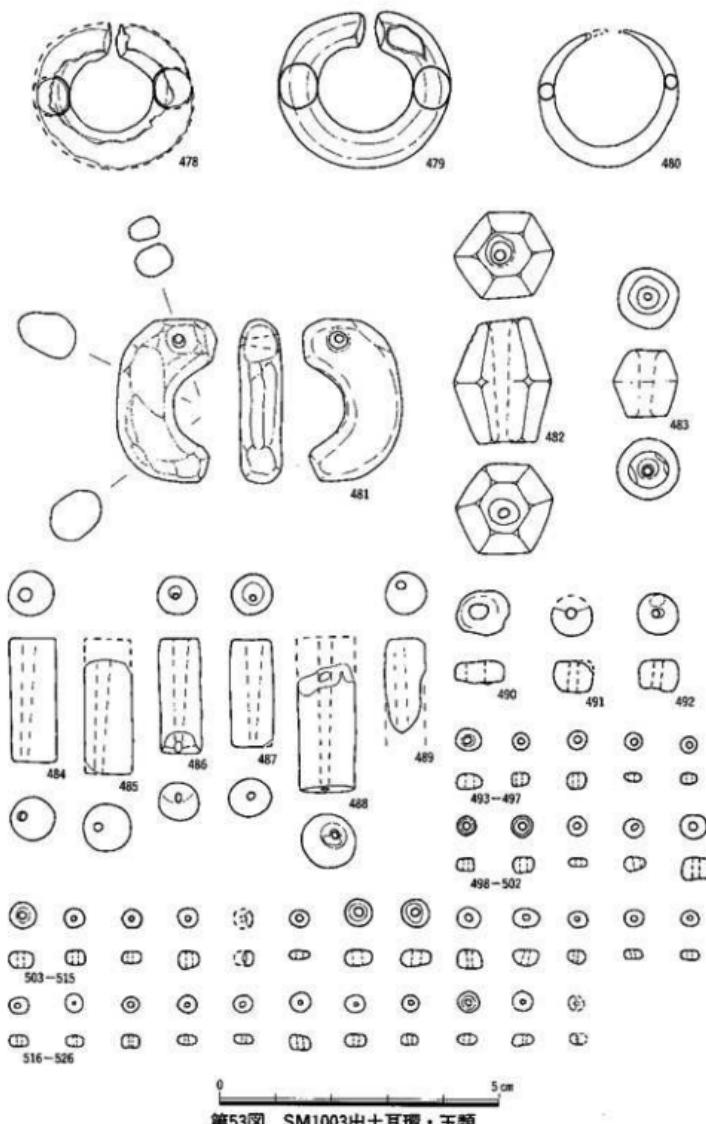
装身具（478~526）

第52図 SM1003出土須恵器

石室の遺存状態の悪さから見れば、玉類については意外ともいえるほどの種類と点数が出土した。

耳環（478~480）

法量・遺存状況とも異なる3点が出土している。478は銅地銀張りで、径6~7mmの中実の銅管を芯として使用しているが、芯の太さは一定ではない。環の内側の銀張り部分が本来の形状をよくとどめているのに対して、環の外側は表面の銀の剥落が著しい。479は478よりやや大形の耳環で、銅地銀張りである。径7~8mmの中実の銅管を芯として使用している。表



第53図 SM1003出土耳環・玉類

面の銀張りは非常に遺存状況がよく光沢をとどめているが、部分的に亀裂が生じている。以上の2点はセットをなすものであろう。480は最も遺存状況の悪い耳環で、太さが1.7~4.25mmと一定しない銅管を使用している。

勾玉 (481)

C字状を呈するもので、瑪瑙製である。中间部分の腹や背の部分が長く、頭や尾の部分はやや角ぼっている。穿孔は主に國右側の側面より行われ、左側側面では孔周辺に細かい剝離がみられる。表面はすべて研磨の対象となっており、研磨の単位は明瞭に観察できるが、そのことは全体の形状が滑らかではないことを示す。また、各所に粗い面がみられ、研磨がその部位に及んでおらず研磨の前段階の表面の状態をとどめている。

切子玉 (482)

六角形2面と長台形12面で構成される切子玉で、半透明の水晶製である。内側には原石のわずかな亀裂が観察できる。側面部中央の稜は不明瞭である。穿孔は基本的には上面からの片面穿孔であるが、下面にも剝離がみられる。穿孔後、剝離の生じた部分は再び研磨が施されている。

算盤玉 (483)

切子玉を小形にして、台形の面を簡略化した形態である。材質的にも482と肉眼観察では類似しており、半透明である。片面穿孔で、側面中央の稜は波打っており研磨の状況をとどめる。

管玉 (484~489)

管玉は材質によって2種類が認められる。484・486・487・488は碧玉製で硬質であり、濃緑色（ボトルグリーン）の色調をもつ。485・489は緑色凝灰岩製で軟質であり、淡緑色（フレンチグリーン）の色調をもち、481については細片となっている。いずれのグループも片面穿孔で、面径の大きい側より生たる穿孔を行っており（487を除く）、研磨の際に穿孔の方向が関係していたと考えることができる。また、碧玉製の486・487には成形時の破損を丁寧に研磨し、補修した痕跡があり、形態に乱れが生じている。488の破損部には研磨はみられないものの、ローリングが観察でき、破損後もかなりの使用期間があったことを窺わせる。

土玉 (490~492)

3点の出土があり、色調にもわずかな違いはあるものの、同工の手によるものであろう。1号墳出土の土玉と比較すると、ほぼ平均的な法量である。破損している個体の断面を観察すると、胎土は精良でごく細かい粒子の混入物をわずかに含む。

ガラス玉 (493~526)

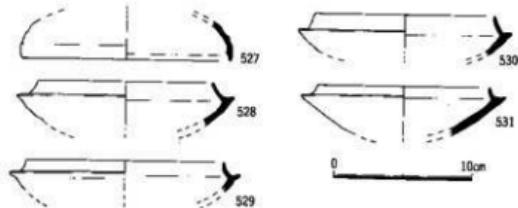
34点の出土があったが、1号石室墓出土のガラス玉と比較すると、法量・色調いずれの面でもバリエーションの幅が広く、これらの玉類が本来のセットであったか否かに関わらず、豊かな組合せをもっていたことが分かる。

法量の面からは径が2.65～3.8mm、厚みが1.5～3.2mmに集中しており、このグループの範囲を大きい側へはずれるものと、小さい側へはずれるものとの主に3つのグループに分けることができる。孔径は0.9mm～1.4mmまでの幅がある。ピークは1.2mmと1.0mmとにある。傾向としては1号墳のものにやや近い。色調の面からみると、黄（シトロンイエロー）2点、紺系統（ブックウイング、コバルトブルー、バーブリッジブルー、オックスフォードブルー、シアノブルー）6点、青緑系統（シーグリーン）8点、濃緑系統（マートルグリーン、ビーコックブルー、ブルシアンブルー）3点、明緑系統（フレンチターキオーズ、オパールグリーン）13点、緑（ターキオーズグリーン）1点、橙（マンダリンオレンジ）1点と数量的に豊富な1号墳・1号墓を上回っている。これを法量との関係でみると、紺・青緑両系統は最も集中する範囲にほぼ含まれ、明緑・黄両系統には大きい法量をもつものが含まれており(493・494・495・501・502・503・504)、1号墓と同様の傾向がある。

3号墳周辺出土の須恵器（第54図）

3号墳の周辺において出土した須恵器は、この古墳に伴っていた可能性が高い。3号墳の横穴式石室で出土した須恵器が非常に少なかったため、年代などを検討するのに重要な資料

となる。



第54図 SM1003周辺出土須恵器

杯蓋527は口縁部のみの破片であり、全形は不明であるが、口縁部内面の緩やかな沈線に特徴がある。杯身は528・530に代表されるようにいずれも小片で、立ち上がりが

やや長く、体部の器壁が薄くつくられている傾向がある。こうした点からは、当遺跡内でもやや古い特徴を示すものともいえるが、TK43型式の範囲にはおさまるもので、横穴式石室出土のものと年代的な矛盾はない。

まとめ

3号墳は斜面上に築かれた、東南東に開口する横穴式石室を主体とする古墳である。横穴式石室の一部を残してそのほとんどが破壊されていた。墓壙から復元される弱い胴張りの玄室形態は2号墳のそれと共にものであり、同様の小形の石室であったと想定できる。耳環が3点出土していることから最低1度の追葬が行われている。

副葬品では全体の内容は推定にとどまるが、須恵器が少なく装飾品類が豊富であったこと

は注目される。装飾品は集中した出土状態からみて、追葬による若干の混入の可能性も否定できないが、追葬による一体の埋葬次のものと考えられる。同様の小規模な横穴式石室である2号墳が装飾品が少なく、鉄器類を比較的多く副葬していたとの対照的である。

築造年代は周囲で出土した須恵器を含めてみても、6世紀の後葉で問題はないと考えられる。しかし、1号墳や2号墳の占地条件を考慮すると、2号墳同様に1号墳よりは新しく築かれたものとみることが妥当であり、6世紀後葉の中でも新しい段階に築かれたのであろう。

1号中世墓（ST2001）（第55図）

位置と現状

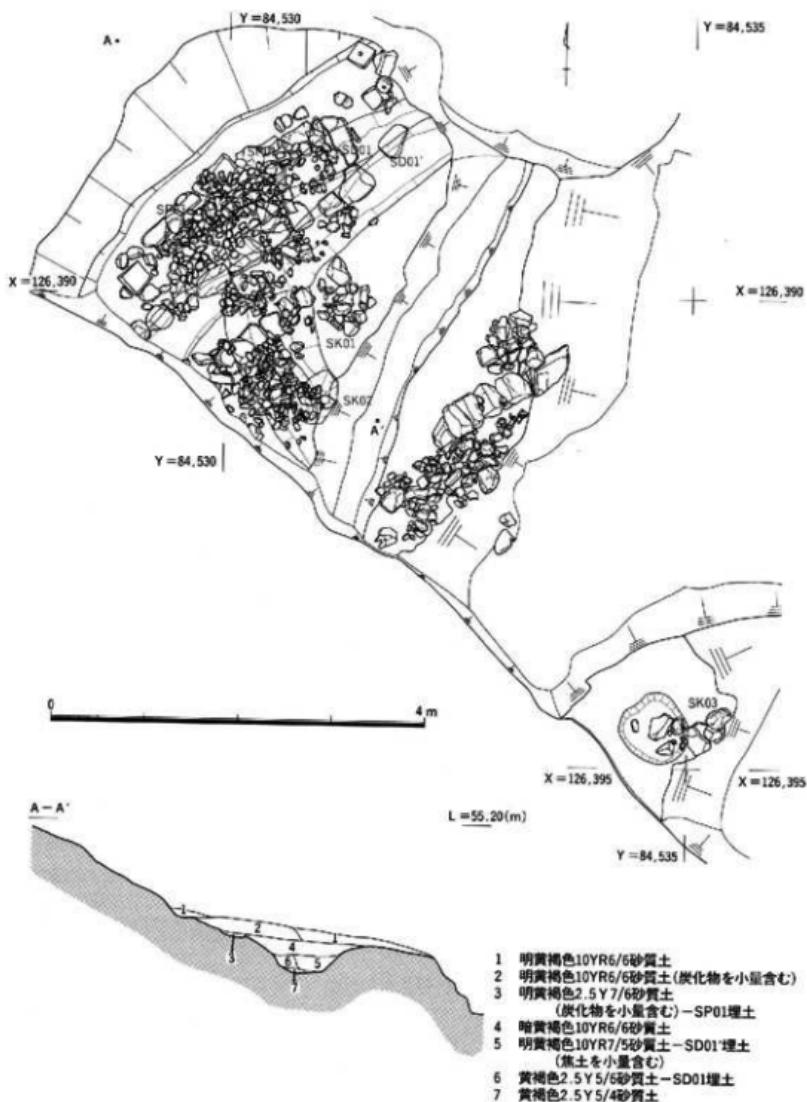
2号墳と3号墳の中間地点となる尾根の南東斜面、F～G－7～9グリッドに構築されている。標高にして51.0m～53.0mにまたがり、前後の地形と比較すると傾斜がかなり急な地点である点は以下で述べるこの遺構の性格と関係があるものとみられる。この遺構については、最初に斜面を段階上に整形した段階から石組による基壇をもつ中世墓を構築し、埋没する段階まで各段階を経ている。そこで、検出状況を概観し、構築の段階を順を逐ってみてゆくこととする。

また、基壇状遺構はほぼ全形を確認することができたが、下部の遺構の一部については調査区外へ延びており、中世墓の各施設を全体で捉えようとする場合には慎重に扱わねばならない。

第1段階（第57図）

尾根の南東側の斜面をの一部を段階状にカットすることにより、数段からなる平坦面に整形し、土坑SK01を築く段階である。ただし、平坦面は厳密に言えば平坦とはなっておらず緩やかな傾斜をもつが、後に基壇状遺構が築かれる上位の箇所は下位に比べてより傾斜の度合いが弱くなるよう整形されている。中央部を帯状に、また斜面下位よりの部分、北東部分のいずれもが攪乱を受けているが、平坦面の規模は長さが南西側の大部分で4.55m、北東部分で2.60m、幅が3.80mの規模を測り、面積は13.5m²以上ということとなる。SK01は平坦面の調査区壁に近い南西よりに築かれている。

SK01 下位よりの部分が削平されているが細長い長楕円形の平面プランをもつ土坑である。主軸方向はN-20°-Wで、長さ2.35m、最大幅0.97mを測る。底面には6～15cmのレベル差をもつ一段低い掘り込みがみられる。この掘り込みをのぞくと底面のレベルはほぼ平坦である。土坑内はほとんどがしまりをもたない砂質土で埋められている。北西側の断面（A-A'）では底面全面に2cm～10cmの厚みをもって焦土ブロック（第2層）が混入している。両側の壁面はいずれも赤変しており、坑内において火葬が行われたことを示している。さらに



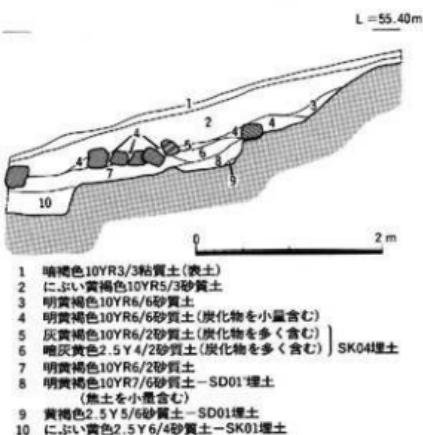
第55図 ST2001検出状況図・土層図

SK01上面には細長く焦土が広がっている部分がみられ、土坑埋没後にも火葬を行っていたことになる。この焦土面は第2段階・第3段階において築かれる溝(SD01・SD01')によって、切り込まれている。

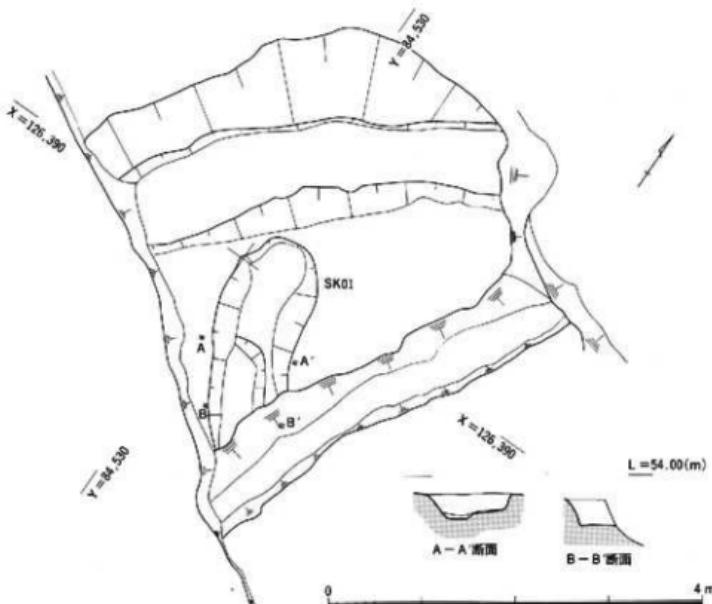
第2段階(第58図上)・第3段階(第58図下)

この二つの段階では、等高線に平行する同様の規模の2条の溝が築かれる。

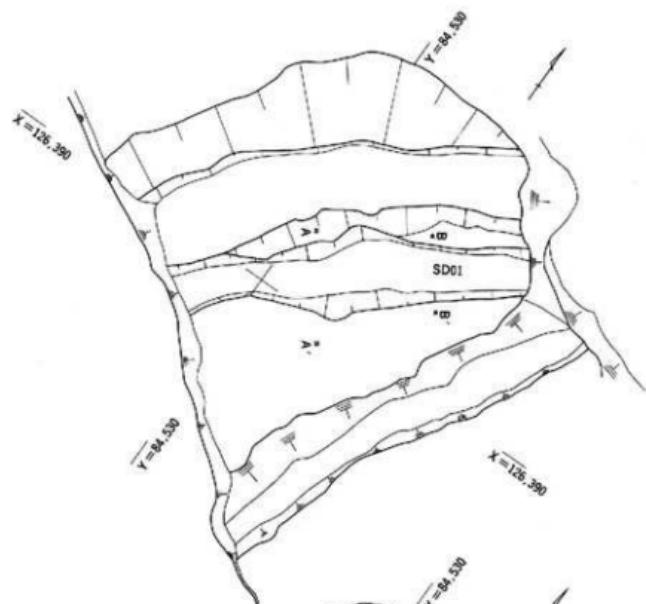
SD01・SD01' いずれも上からみて2段目となる平坦面の落ち際に掘り込まれている。切り合ひから SD01、SD01'の順で築かれたことが分かる。SD01は SD01'



第56図 ST2001南西壁面土層図



第57図 ST2001第1段階



- 1 明黄褐色10YR7/5砂質土—SD01埋土
(焦土を小量含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/6砂質土—SD01埋土
- 3 黄褐色2.5Y5/4砂質土

第58図 ST2001第2段階（上）・第3段階（下）

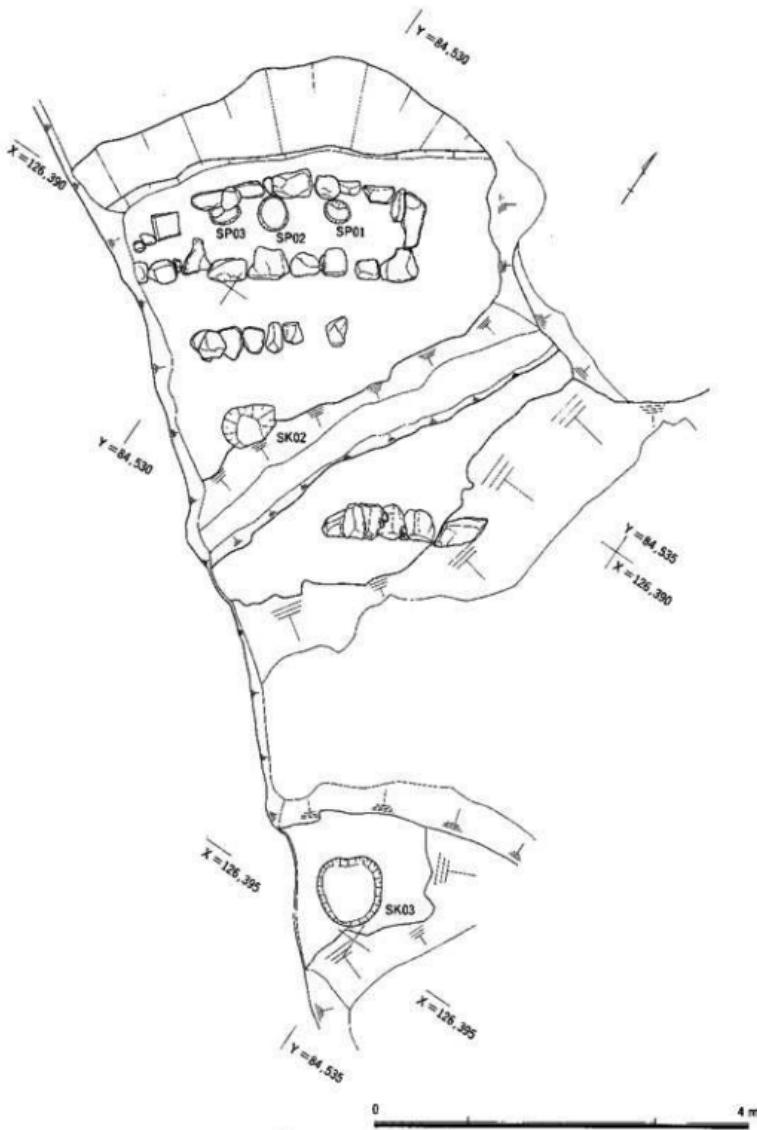
のわずかに北側に位置しているが、SD01'によって切られておりその規模は明かではない。方位や流れの方向はSD01'と同様であろう。溝内にはしまりの弱い砂質土が堆積している。深さは20~25cmである。SD01'を切っているSD01'は直線的にN-55°-Eに延びる溝で、検出延長3.87m、幅0.50~0.55mを測る。深さは20~30cmである。底面のレベルは南西から北東へ約3°傾斜しており、流れがあったとすればこの方向となる。溝にはやや粘質のある砂質土が堆積しており、焦土のブロックが断片的に混入していた。SK01に伴う焦土面を切っているためである。2条の溝はほとんどが重なるように延びており、同様の役割をもって掘削されたものが埋没したため再掘削されたと推定できる。調査区外に広がる関連遺構に伴う可能性も残されているため、その機能は不明である。

第4段階（第59図）

この段階には1段目から2段目にかけて其壇状造構の基礎となる方形の石組を築き3基のピット、2段目に火葬施設SK02を、4段目にSK03を築く。長方形の石組は砂岩の自然礫からなり、25cm~40cm四方のものを基本に小形の礫で隙間を埋めている。石組に際しては、盛り土は基盤層と同様の砂質土（第55図第2層、第56図第4層）を用いて平坦な形状に整えている。SK01、SD01・01'の埋没状態に20cm程度の盛り土（第56図第7層）によって整地を行った上に築かれている。また、調査区外に広がっているために、土層観察のみによってその存在が認識され、内容を明らかにすることができなかった遺構としてSK04がある。SK04は土層観察によって（第56図第5・6層）、整地層と石組との間に築かれていることが明かである。

この時点で1段目と2段目の段差は解消されて、一つの面として使われる。石組の主軸はN-55°-Eで、長さ3.03m（内法2.43m）、幅1.17m（内法0.50~0.65m）を測る。2段目、3段目においても同様の右列が検出されており、其壇状かまたはそれに類する遺構が築かれていた可能性があるが、SP01などのような下部遺構は見られない。

SK02（第60図） 2段目のやや下位に築かれた土坑で、南東側が擾乱を受けており全形はつかめないものの、長径51cm、短径43cmを測る不整円形を呈する。坑は直線的な傾斜で平坦な底面に達する。溝内の堆積は3つに分かれる。第1層は適度なしまり具合をもつ砂質土で、炭化物を少量含む。第2層は砂質土であるが、炭化物よりも多く含みさらに灰を含むことも認識された。第3層は炭化物と灰の単純層である。埋土中からは、土師質土器小皿・鉄釘・人骨が出土した。土師質土器532はほぼ完形での出土であるが、他2点は小片での出土でありこれらは本来この施設への副葬品として納められたものではないとみられる。鉄釘（538・539）は頭部の形態が異なっており、複数の埋葬であった可能性も残されている。堆積及び出土遺物から有機質の蔵骨器を用いた埋葬施設であったと考えられる。



第59図 ST2001第4段階

SK03(第61図) 4段目に築かれた土坑で、上面にはやはり砂岩自然礫による集石を伴っている。自然礫は拳大の円礫から30cm四方以上のやや大形のものまでが用いられている。どのような形態であつたかは出土時の状況からは不明である。長径74cm、短径69cmの不整円形を呈する。埋土は砂質土でありが弱く、炭化物や人骨片は含まれず、焦土面も認められない。

坑内からは堆積の上位部分で土師
器片が数点出土した。以下でも触れるよ
うに、土師質円筒形土器が葬骨器であると考えられることから、火葬は行われず埋葬のみを行う施設であったと考えられる。

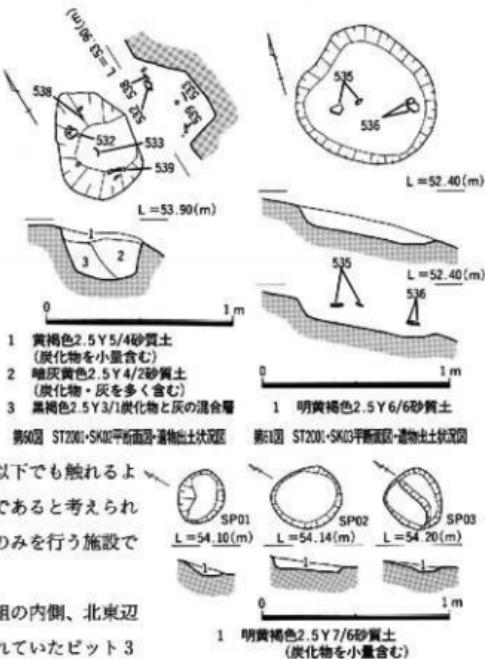
SP01・SP02・SP03(第62図) 石組の内側、北東辺の石列に接するように並んで築かれていたピット3

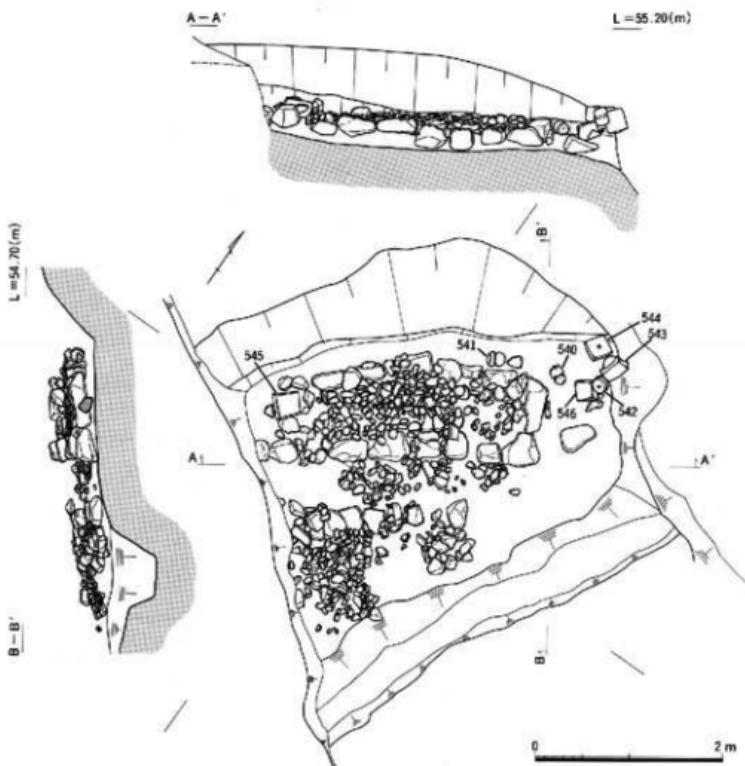
基である。北東からSP01・02・03とした。SP01は径25~30cmの不整円形で、深さは16cmである。SP02はSP01と39cm、SP03と19cmの間隔をもつ。長軸38cm、短軸32cmの橢円形で、深さは16cmである。SP03は径33cmの不整円形で、深さは11cmである。埋土はいずれも炭化物をわずかに含む砂質土で、内部に葬骨器・人骨は認められなかった。

第5段階(第63図)

第4段階で築かれた長方形の石組に礫を充填して基壇状の施設とする段階である。充填される礫は径約10cmの円礫を用いている。円礫は長方形の基壇状施設内だけではなく、下位の石列との隙間やその南側にも同様にみられる。特に第4段階に築かれたSK02についても、基壇またはそれに類する形態の石組をもっていたことが想定される。

基壇状施設の構築と並行して、墓の上表施設としての五輪塔の設置が行われた。五輪塔の各部位は倒壊または破壊によって原位置を離れていたが、凝灰岩製地輪545は基壇状施設の南西側の一角に位置し、原位置またはそれに近い状況にあるものとみられる。基壇状施設の北東部分には、空風火水地のうち水輪を除く各部位が出土した。出土した7個体の内、3個





第63図 ST2001第5段階

体が凝灰岩製、4個体が砂岩製であるが、いずれにしても本来の組合せは復元できない。

出土遺物（第64・65図）

土器

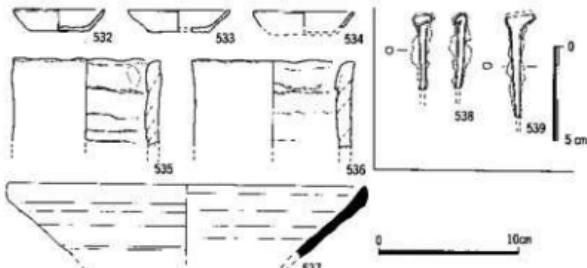
土師質土器小皿（532～534）

3点とも口径6～7cmで、口縁の形態などに若干の相違がある。底部の遺存している572・573は、いずれも底部に回転ヘラギリ技法を用いている。3点ともくすんだ淡黄色で、胎土はやや粗い。底部の形態や口縁端部のおさめ方にわずかな違いがみられる。回転ヘラ切り技法の使用から14～16世紀にかけての時期を当てることができるが、県内資料の整備が進んでいないため、より細かい時期の比定は現状では困難である。

土師質円筒形土器 (535・536)

数点の出土がみ

られたが2点だけ
が図化可能であっ
た。いずれも円筒
形の器形をもち端
部では外面に弱く
屈曲している。口
径は535が10.4cm、
536が11.5cmであ
る。外面には板ナ



第64図 ST2001出土土器・鉄釘

デまたは板押圧後にナデ調整をしている。内面は粘土紐接合時の痕跡を明瞭にとどめ、口縁端部内面には指オサエを施している。底部の形態は不明であるが、名西郡石井町浦庄遺跡⁽⁸⁾・阿波郡市場町上喜来遺跡⁽⁹⁾などから同様の口縁形態の円筒形土器が出土している。火葬墓あるいは再葬墓として利用された造構からの出土ということを考えれば、藏骨器として利用されていた可能性がある。

東播系須恵器 (537)

基壇状造構内より体部中半以上の破片1点が出土した。外側へ直線的に開き、やや外面に肥厚し口縁端部を丸くおさめるものである。調整はおおむね回転ナデによっているが、内面は回転ナデ後の斜め上方へのナデが著しい。森田稔氏の編年⁽¹⁰⁾の第II期第2段階に相当し、12世紀末葉から13世紀初頭に位置づけられる。

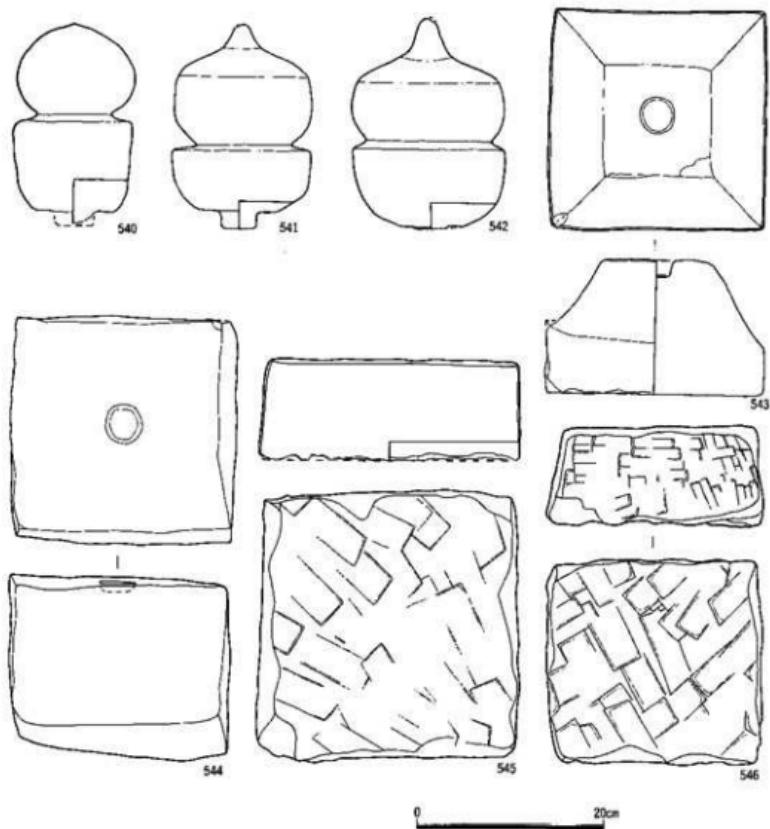
鉄釘 (538・539)

頭部を平たく伸ばして折り曲げたものと方形のものが各1点ずつ出土した。いずれも欠損しているために正確な寸法は不明であるが、538は頭部幅0.9cmで、全長が5~6cm、539は頭部幅1.5cmで、全長は6.5~7cmとなる。身部の断面形態はいずれも方形である。

五輪塔 (540~546)

1号中世墓に伴う五輪塔は空風輪3点、火輪1点、地輪3点の計7点である。出土時には点在しており、水輪が欠落していることから五輪塔としてのセットは復元できず、個別に所見を記すこととする。

空風輪3点のうち541は凝灰岩製、542・543は砂岩製でいずれもほぼ完形品である。石材によって形態上はそれぞれが異なっている。540は空輪部分、風輪部分のいずれもが細長い形態をもち、空輪の頂部はわずかに突出するのみである。また、風輪の下部の突起は欠損しているものの、2cm程度の安定した突出度をもつ。541・542はやや幅広の形態で空輪には明瞭



第65図 ST2001出土五輪塔

な突出をもつ。下部の突起の形態や空輪と風輪のバランスが異なる。

砂岩製の火輪543は上面に径3.7cm、深さ1.8cmの断面矩形のほぞ穴をもつ。傘部にはわずかな反りがある。下面是平坦で、鑿による加工痕がみられる。

地輪(544～546)は石材によって形態がまったく異なる。砂岩製の544はほぼ立方体の形態をもち、上面には径3.85cm、深さ0.85cmの断面じ字形のほぞ穴を穿つ。凝灰岩製の545・546は幅・奥行きに対して高さが1/2以下と低く、上面下面とも平坦である。側面と下面には鑿による整形の痕跡を非常に明瞭に残し、側面では整形時の左右方向へ、下面では外から内側

への整形が行われている。整形に使用された塗のうち刃幅の明かなものは545が3.6cm、546の側面が1.2cm、下部が3.5cmである。

こうした五輪塔のうち、空風輪の形態、砂岩製火輪の傘部の反りからみて、凝灰岩製のもとのより古い傾向がみられる。しかし、石材の違いが形態に制約を与える可能性があり、ここで中世末というような幅のある年代の位置づけにとどめておきたい。

以上のように、1号中世墓は2基の火葬施設（SK01・SK04）と2基の埋葬施設（SK02・SK03）、それに覆う基壇状施設またはそれに類する集石、基壇状施設の上表施設としての五輪塔、という3つの中世墓としての要素をもっていた。そして、それらが築かれていく状況は以下の通りである。

第1段階→第2段階→第3段階→第4段階→第5段階

整地	SD01	SD01'	SK02	基壇状施設
SK01			SK03	五輪塔設置
			SK04	
			SP01	
			SP02	
			SP03	
			長方形石組	

これによると、火葬施設・埋葬施設の2組が異なる段階で形成されていながら、最終的に基壇状施設へと結びついている点が興味深い。築造された年代は出土した土器からだけでは、厳密におさえることができないが、五輪塔の型式からみると近世のものも含まれており、築造から五輪塔による継続的な供養にいたる年代幅を数十年を基本としていると見積もれば、中世末の15世紀頃とみることも可能であろう。類似した造構として県内では、阿波郡市場町上喜来遺跡⁽¹¹⁾が知られているが、築造の諸段階が明確に逐えるという点で本遺跡例は注目される。今後、中世土器と遺構出土の五輪塔の資料の蓄積と編年が期待される。

2号中世墓 (ST2002) (第66図)

南東部斜面の

標高49.3m、

F・G-9・10

グリッドにおいて

て検出された。

調査区がくびれ

る部分で、砂岩

の石材などが帶

状に連なって出

土したことから

存在が確認され

た。砂岩の自然

石に混じって、

砂岩製・凝灰岩

製の五輪塔や五

輪板碑が散見さ

れる。検出時点

で砂岩の石材に

凝灰岩製の五輪

塔の水輪・地輪

が混入していた

ことから、下部

遺構があること

が予想された。

| Y = 84.550

X = 116.370

X = 116.360

| Y = 84.550

| Y = 84.555

X = 116.370

X = 116.360

| Y = 84.555

第66図 ST2002検出状況

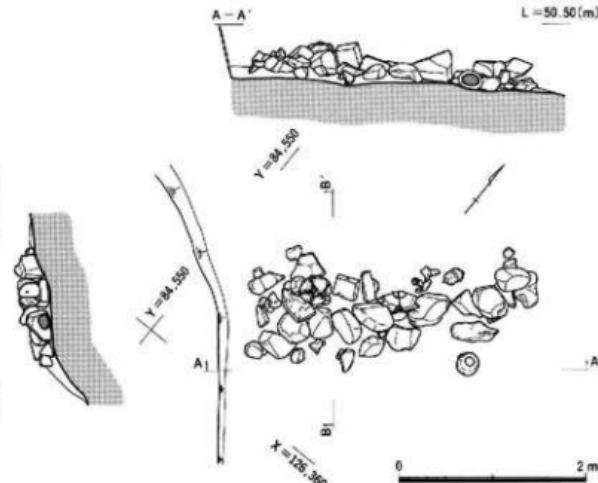
上位の浮いた石材や五輪塔などを除去すると、土坑 (SK01) の上面に火輪・水輪・地輪が重なって出土した。また、SK01は溝 SD01を切って形成されるほか、SK02も SD01の延長上より検出された。調査区東壁において検出された一群の石材については、下部遺構が伴っていなかったが、調査区外にその中心となる別遺構があったと考えることができる。

SK01(第68図) 火葬を経た人骨を埋納した土坑である。ややいびつな円形で、長軸0.88m、短軸0.70m、深さ0.30mを測る。土坑の上面には凝灰岩製の地輪と水輪が本来の位置関係の状態で重なって出土し、その北側には火輪が幾つかの断片となって出土していたため、倒壊した状態が非常によく分かる。空風輪こそ失われていたもの本来は一組が揃って基標として

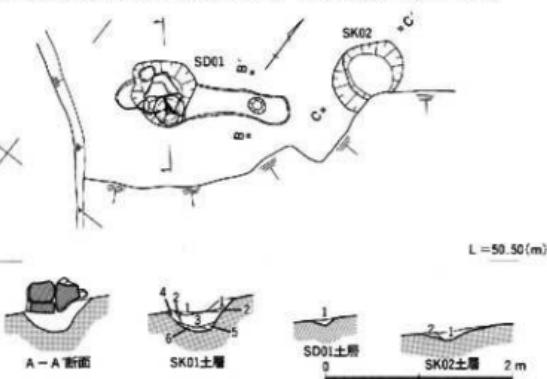
用いられていたことが想定できる。土坑内の堆積には焦土が含まれていないことからこの遺構内では火葬が行われていなかつたが、第3層は炭化物と灰の混合した堆積であり、火葬人骨はこの層と共にSK01に持ち込まれたことが想定される。その後

基盤層と似た性質の第2層、さらに第1層が五輪塔の地輪を据えた後に堆積したと考えられるため、火葬人骨を埋納した後に第2層によって整地し、五輪塔を据えるという一連の行為が復元できる。

SK02 (第68図) やや変形した円形で、長軸0.85m、短軸0.67m、深さ0.09mを測る。上部に砂岩製の五輪塔が散見されたものの、SK01の様な五輪塔の集中した出土はみられなかった。鉄釘が1点第1層中より出土している。第1層には多量の炭化物を含んでいることから、SK01と同様の築造過程が復元できる。これのことより、SK01の様な五輪塔による表象施設を供えていたかについては



第67図 ST2002平面図・断面見通し図



	SK01	SK01土層	SK02	SK02土層
1	に、よい黄色2.5Y6/4砂質土	1	5	5
2	透黄色2.5Y7/4砂質土	2	6	灰黄色2.5Y7/2砂質土 (4層より炭化物多く含む)
3	黒色2.5Y2/1炭化物・灰の混合層	3	7	6
4	灰黄色2.5Y7/2砂質土	4	8	黄灰色2.5Y5/1砂質土
SD01	暗灰黄色2.5Y5/2砂質土	SD01土層		
SK02	1 灰黃褐色10YR4/2砂質土 (炭化物を多く含む)	2	9	9
				灰黃褐色砂質土10YR6/2砂質土

第68図 ST2002下部遺構平面図

不明であるが、有機質の骨蔵器におさめた火葬人骨を埋納した土坑として機能していたことを想定しておきたい。

SD01 (第68図) 長細く伸びており、その規模は全長1.10m、最大幅0.36mを測る。主軸方向はN-58°-Eである。底面のレベルは北東側へ緩やかに傾斜している。溝は全般に浅い落ち込み上を呈しており、深さは最も深い部分で0.06mである。溝内の北東部寄りには径0.17~0.20mの浅い落ち込みがある。出土遺物や、溝内の堆積状況からは性格を特定することは困難であり、SK01・SK02との位置関係を考慮して火葬に伴う可能性を指摘するにとどめておく。

出土遺物 (第69~72図)

鉄釘 (564)

頭部を平たく伸ばして折り曲げたものがSK02より1点出土している。頭部幅0.85cmで、全長6~7cmとなるものである。藏骨器などに伴うものであろうか。

五輪塔 (547~563)

SK01に伴うもの (第69図)

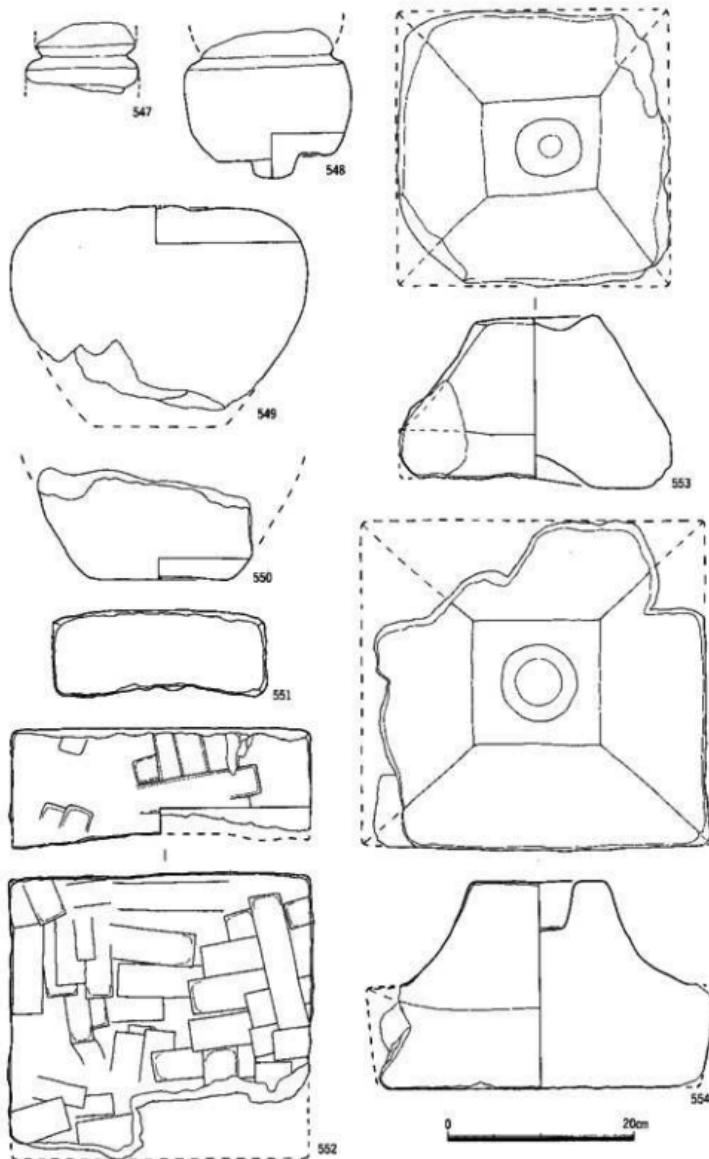
出土した五輪塔の各部位はいずれも凝灰岩製であり、セット関係を復元するのに良好な状況であった。

出土状況から火輪554・水輪549・地輪552のセット関係が明かである。火輪554は石材が脆いために細かい破片となっていた。上面に径8.2cm、深さ5.1cmの矩形のはぞ穴を穿つ。傘部には緩やかな反りがある。水輪549は554同様十数片に割れて一部を欠損していたが、接合によって図のように復元できる。胴体部分の最大径を上位寄りにもつ。上面には高さが1.1cmの偏平なはぞがある。552は幅・奥行きに対して高さが1/3に近く偏平である。下面には特に鑿による整形痕が著しく、3cm以上が端面より削り込まれている。盤の刃幅は3.2cmである。

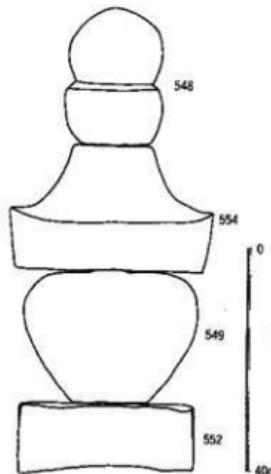
空風輪547は空輪と風輪のくびれのみの残存状態はきわめて悪い。火輪553は全体の形状はとどめているものの、各端部が摩耗している。上面には径7.0cmのはぞ穴を穿つが、深さが1.4cmではぞ穴として機能していたかは疑問である。水輪550は上半を欠損している。下面是ほぼ平坦である。地輪551は小型で偏平である。法量・石材からみれば空風輪547・火輪553とセットとなることが想定される(第70図)。552のように明瞭な鑿による整形痕は残さない。

その他 (第71図・第72図)

空風輪2点はいずれも砂岩製で、砂岩製のものの中ではやや細身の特徴をもつ。555は下面に明確な平坦面をもつ。火輪557は凝灰岩製で、一部を欠損しているもののシャープな造りであり、上面のはぞ穴には明確な下端がある。水輪559は凝灰岩製で磨滅が著しく、本来の形状



第69図 ST2002・SK01出土五輪塔

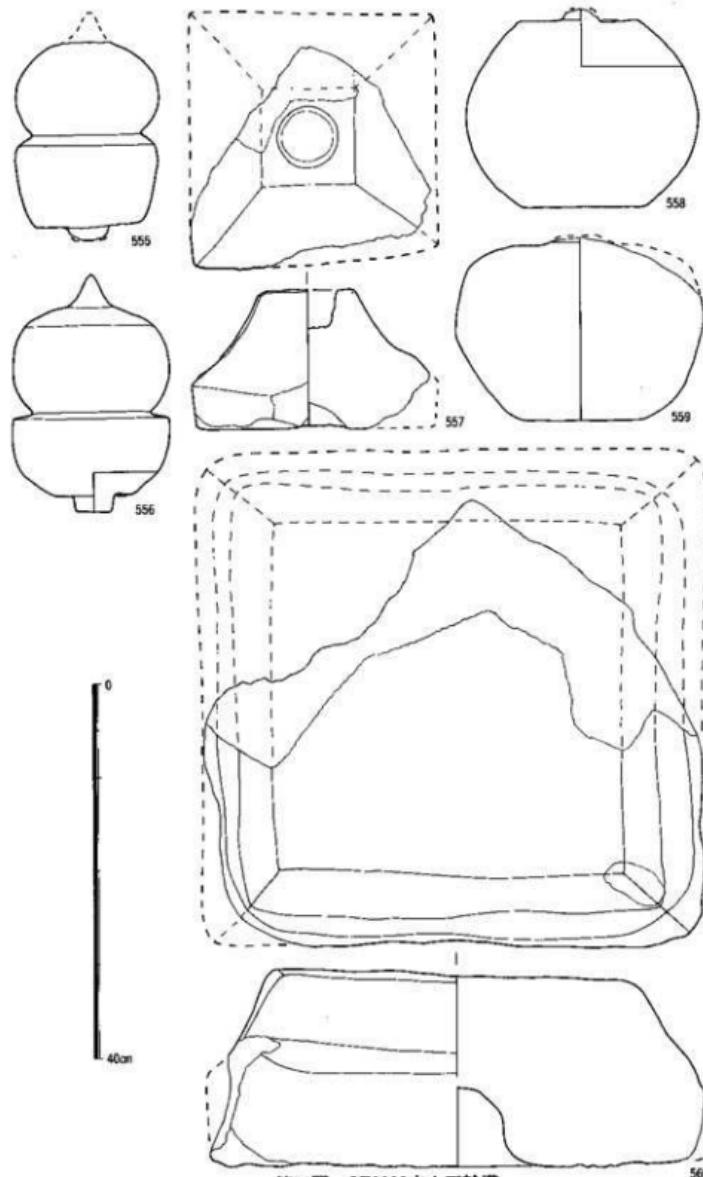


第70図 ST2002・SK01出土五輪塔復元図
2号中世墓の状況を整理しておくと、SK01・SK02の二つのほぼ同一の規模を有する2基の埋葬施設とその上表施設からなるものであった。いずれの遺構にも、強い焼成の痕跡は認められなかったため、火葬は別の施設で行われている。周辺にみられる砂岩製の石材についても後述する3号中世墓や4号中世墓同様に基壇状の施設を有していたとみることが可能であるSK01では、上表施設として掘えられた五輪塔が現位置で出土した。五輪塔のセットがおさえられたことと共に、中世墓における上表施設の状況が窺える貴重な資料である。出土した土器がないため、築造年代は明確にしがたいが、SK01の上面に掘えられた五輪塔の型式が1号中世墓のものよりも古い要素をもっている。ただし、五輪塔の材質が型式差に関与している可能性も現段階では否定できず、2号中世墓自体に火葬施設をもたないことや供養の年代幅を考慮すれば1号中世墓と同様中世末と考えておきたい。また、周辺で点在していた五輪板碑などは統続的な供養によるものとみられ、近世まで供養の対象となっていたことが想定される。

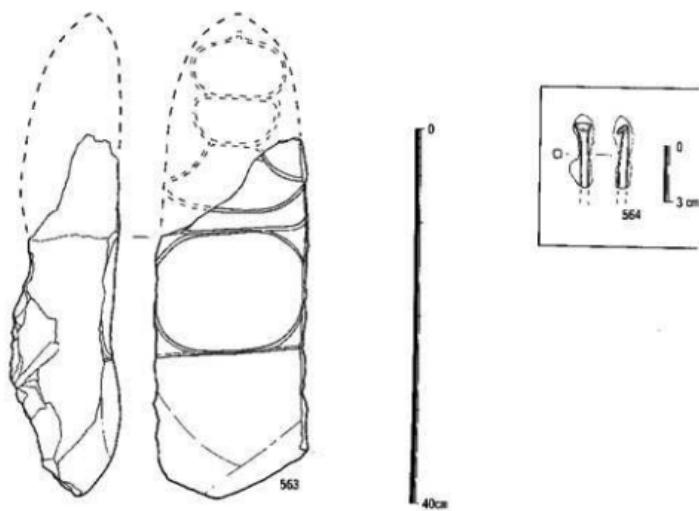
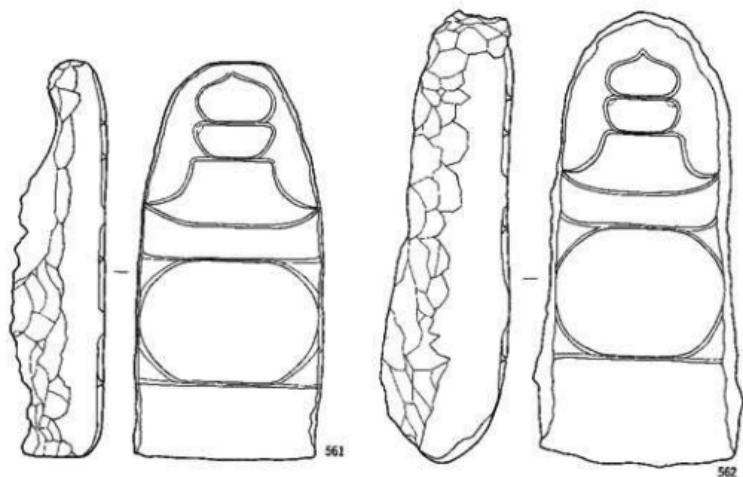
をとどめている部分は少ない。

台座560は広い範囲に破片が広がっており、船底する遺構が不明であるが、2号中世墓周辺からもっとも多くの破片が出土した。凝灰岩製である。上面には一辺38cmに復元される平滑に整形された平坦面を有し、下面には径12.85cm、高さ8.5cmの大形の穴をもつ。

五輪板碑は砂岩の自然石を利用し、その平坦な自然面を利用して五輪塔の各部位を浮き彫りに刻み、背面は舟底形に盤によって加工が施されている。561はやや全体に幅広で、当遺跡出土のものとしては寸詰まりの感を受ける。自然面を側面の一部に生かし、背面には盤による大きな加工痕がある。火輪の傘の部分は反り上がりしているが、全体の形に制約を受けるためか水輪・地輪は偏平な形に刻まれている。562は561に比べるとやや細身ではあるが、刻まれた五輪塔各部位の形態はやはり偏平なものとなっており、そのためか空輪頂部にはやや間隙を残す。盤による加工は背面から頂部にまでゆきわたり、一度の加工によって削り落とす量はやや少な目である。563は2号中世墓の中でも最も細身のもので、頂部を欠損している。根部分の形態は利用した石材の形態に制約され、丸くなっているため、地輪本来の形態が描写されていない。盤による加工は大きな単位で行われている。



第71図 ST2002出土五輪塔



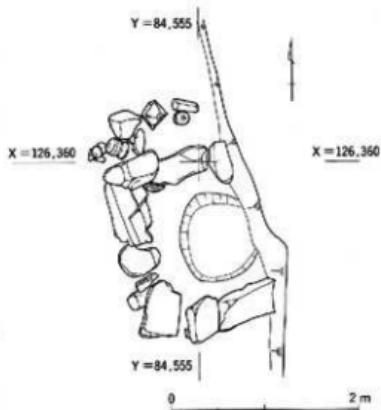
第72図 ST2002出土五輪塔・SK02出土鐵釘

3号中世墓 (ST2003) (第73図)

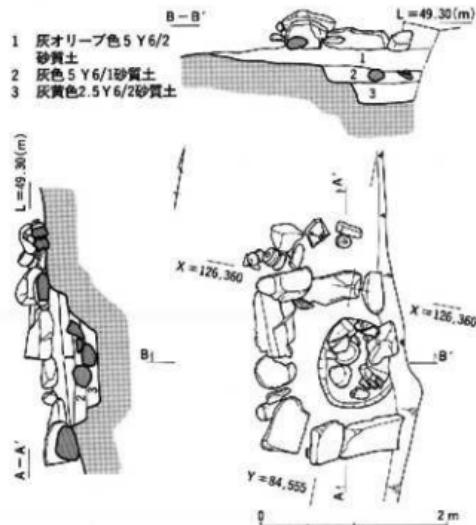
南東部斜面、緩やかな傾斜地のE・F～10・11において検出された。標高は48.2mにあたる。北西側のST2002、南側のST2004とはそれぞれ約2m離れている。検出時において石材が「匁」字形に組まれていることが明かとなつたが、調査区外に一連の構造が広がっているものとみられ、本来は「匁」字形であったと想定される。「匁」字形石組の北側には空風輪3点、火輪1点が散乱していた。

「匁」字形石組は南北の長さが2.34mで、北辺では1.39m・南辺では1.52mが検出された。いざれも砂岩製の自然砾で、形態・大きさにはばらつきがみられ、特に規則性は窺えない。北西コーナーでは2段目が残っている。この部分の高さは下部の土坑検出面から0.41mである。下部の土坑を埋めた段階で砂質土による若干の盛り土を行い(第74図1層)、石組を築き始めている。

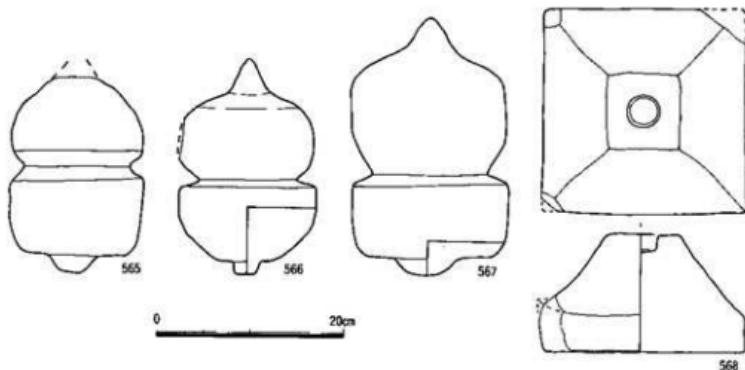
石組内中央部より、やや歪んだ円形の土坑が1基検出された(第74図)。この土坑も調査範囲の関係で全形は不明であるが、長径0.88mで、短径は0.80mに復元される。深さは0.25～0.41cmである。ほぼ半分の高さに段が巡る。底面は平らに整えられている。坑内にはマンガンを少量含む2層の砂質土が平行に堆積していた。炭化物や人骨、その他の遺物は認められなかった。土坑の壁には焼けた状況は観察されなかった。しかし、土坑の規模・形状や石組施設、散乱する五輪塔の状況から埋葬施設とみられる。



第73図 ST2003検出状況



第74図 ST2003平面図断面見通し図



第75図 ST2003出土五輪塔

出土遺物（第75図）

五輪塔（565～568）

凝灰岩製の空風輪1点（565）、砂岩製の空風輪（566・567）・火輪（568）の計4点が出土した。本来の組合せは復元できない。565は軟質であるために、空輪部分が摩滅してやや細身となっている。566は頂部は尖り気味である。下方への突出もしっかりしている。567は他の2点と比較して大形であるが、同じ砂岩製の566と比較すると頂部や下方への突出にシャープさが欠けている。568は下面にくり込みをもたない。稜線がシャープで566との組合が想定できる。

3号中世墓について若干のまとめを行っておくと、調査範囲の関係上全体を調査することができなかつたが、□（口）字形の石組を伴う埋葬施設である。しかしながら、埋葬施設である土坑内では火を焚いた痕跡は認められず炭化物も出土しないことから、埋葬が行われた1号中世墓SK02、2号中世墓SK01と比較すると、火葬を経ないで埋葬に至っている点が異なる。石組の上部の構造は破壊されているため不明であるが、石組によって基壇状の施設とし五輪塔を上表施設として設けていたことが想定されるが、地輪など五輪塔の下位の部材が付近から出土していない。築造された年代は土器の出土が出土していないことから決めがたいが、五輪塔の形態が1号中世墓・2号中世墓出土のものと同様の傾向を有することから、これらに近い中世末の年代を想定しておきたい。

4号中世墓 (ST2004) (第76図)

D・E-10・11において検出された中世墓で、本遺跡において最も南で検出された遺構である。

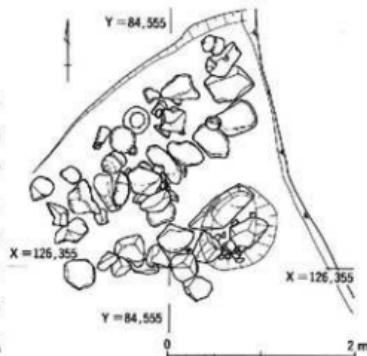
3号中世墓とは隣接する位置にある。標高47.75mの等高線に沿うように帶状に石材が広がって検出された。検出状態において石材は、「」字形の部分とこれにつけ加わる西側の部分とからなるとみられた。一部は調査区外へ伸びており、「」字形になっていたものと想定される。「」字形石組の北西コーナーでは2~3段分の石組が残る。これらの「」字形石組の北側にはさらに石材や五輪塔が散乱していることからみて、上部構造を伴っていたことがわかる。「」字形の石組の西側からは、下部遺構が検出されなかつた。

「」字形の内側では、不整円形の土坑が検出された(第77図)。土坑は長軸0.93cm、短軸0.79cmの規模をもつ。浅い皿形の掘り込みで、深さは20~30cmである。埋土には少量のマンガンを含む砂質土が平行に堆積しており、焦土・炭化物・人骨などは認められなかった。他の中世墓の状況からみて火葬を経ていない埋葬施設であると考えられる。

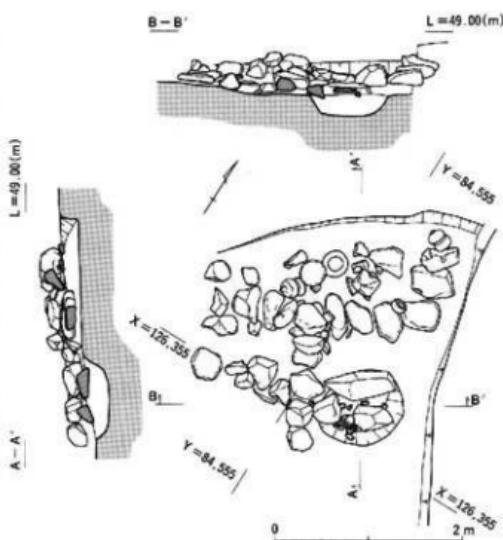
出土遺物 (第78図)

五輪塔 (569~572)

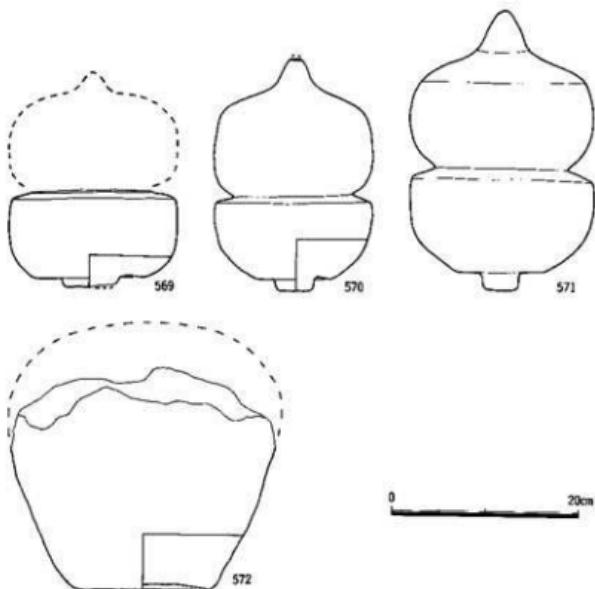
砂岩製空風輪3点、凝灰岩製水輪1点が出土した。空風輪は、1~3号中世墓のものと比較すると、大形の傾向がある。砂岩製のやや寸胴となる特徴はここでもみられる。特に569は風輪部のみの破片であるが、下半が強く張る傾向をもつ。570は重量12.8kgで特に大形のもの



第76図 ST2004検出状況



第77図 ST2004平面図・断面見通し図



第78図 ST2004出土五輪塔

である。水輪571は頭頂部が欠損しており、全体の形状は不明であるが、やや胴長の傾向をもつ。これは五輪塔の形態変遷の中では、やや古い特徴である。

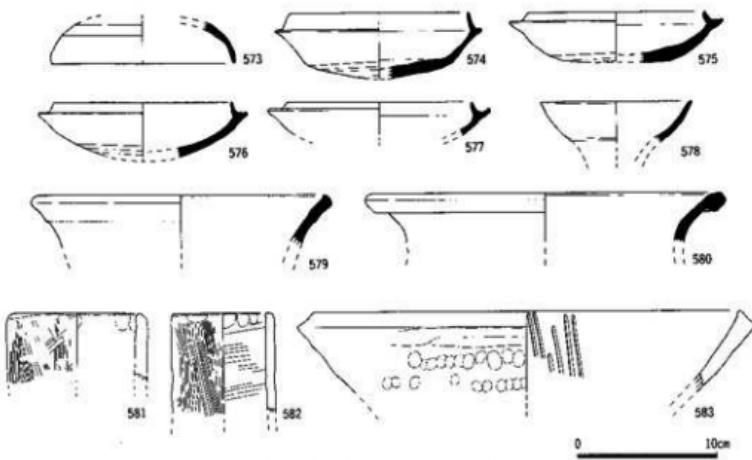
4号中世墓では、「丁字形または匁字の石組を伴う埋葬施設を有していた。斜面の下位側が切れていることになるが、破壊のため失われていたとすれば匁字形

の石組であったとも考えられる。上部の構造は不明であるが、某墳状の施設とし五輪塔を上表施設としていたとみられ、3号中世墓と類似した構造が指摘できる。方形の石組を伴う中世墓ではその一辺を共有した石組を連続して築くことがしばしばみられるが、西側のやや崩れた石組については当てはまらなかった。築造年代は出土土器がなかったために不明であるが、出土した五輪塔の形態の特徴が他の中世墓出土のものと類似しており、それらとの近い中世末年代を想定するにとどめておきたい。

中世墓周辺出土の土器（第79図）

中世墓周辺からは、古墳時代に属する須恵器と中世に属する土師質土器の2種がみられた。それらの帰属する遺構は不明ではあるが、3号墳や中世墓群との関わりから重要と思われるものもあり、図示を行った。

須恵器の蓋杯にはやや形態差が認められる。574は口径・器高・立ち上がりについて他の3点と異なる特徴をもち、古い型式の特徴をもつ。これらについては、TK43型式～TK209型式にかけてのものであり、本来古墳に副葬されたものであろう。



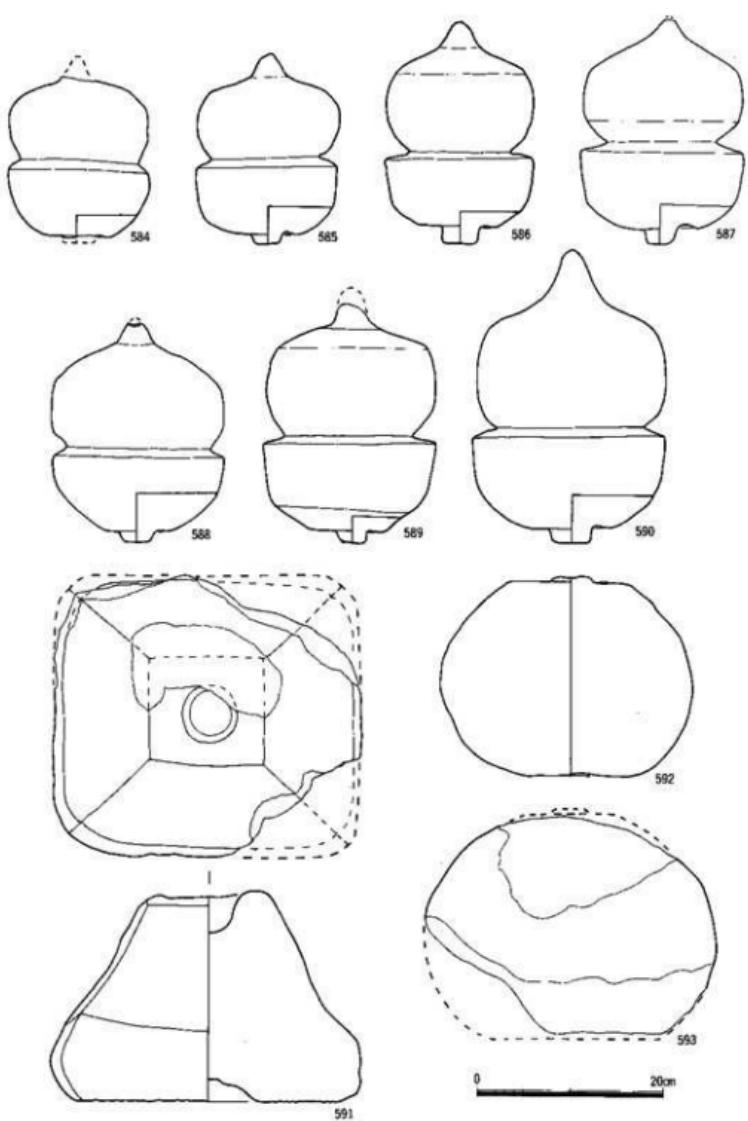
第79図 中世墓周辺出土土器

581・582は同様の形態をもつが別個体の口縁部で、1号中世墓で出土した円筒形の土師質土器と形態的に類似している。581は直立する器形で口縁端部が内側への折り曲げがやや強いものである。内面には縦方向のハケ（6条/cm）が端部付近まで施され、口縁部内外面には指頭圧痕が頗著である。582も円筒状に直立する器形であるが、581と比較して端部の折り曲げが弱い。外面のハケは斜め方向（5～6条/cm）にもみられ、内面にはやや粗い原体（3～4条/cm）による横方向のハケが施される。2点とも調整の不十分な内面の器壁が粗く、砂粒の浮き出しが著しい。遺構に伴っていないものの、調査区外にさらに中近世墓の分布が広がっていることから、1号中世墓出土土器と同様蔵骨器の用途を考えられる。

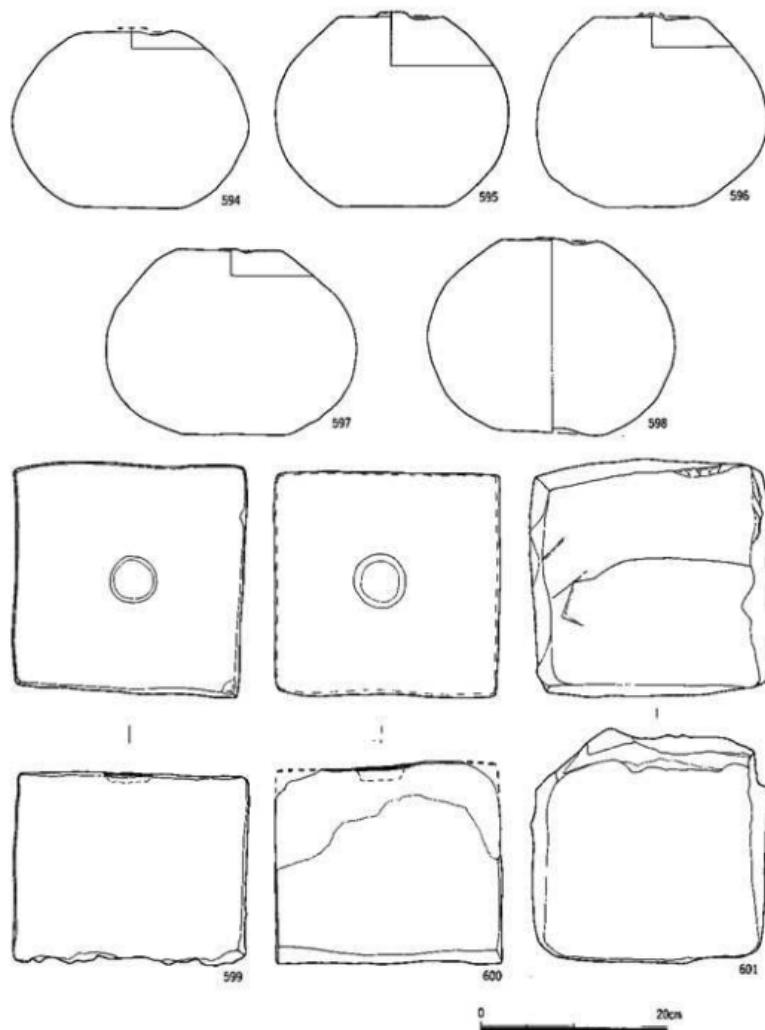
遺構に伴わない五輪塔（第80～83図）

本来の位置を離れて出土したもののうち、遺存状況の比較的良好のものから28点選び図化を行った。以下では、これらをST2001周辺で出土しST2001に伴う可能性が高いもの（第80図・第81図）と、ST2002以南で出土しST2002～2004または調査区外に広がる別遺構に伴うもの（第82・83図）に大きく分けて記述する。

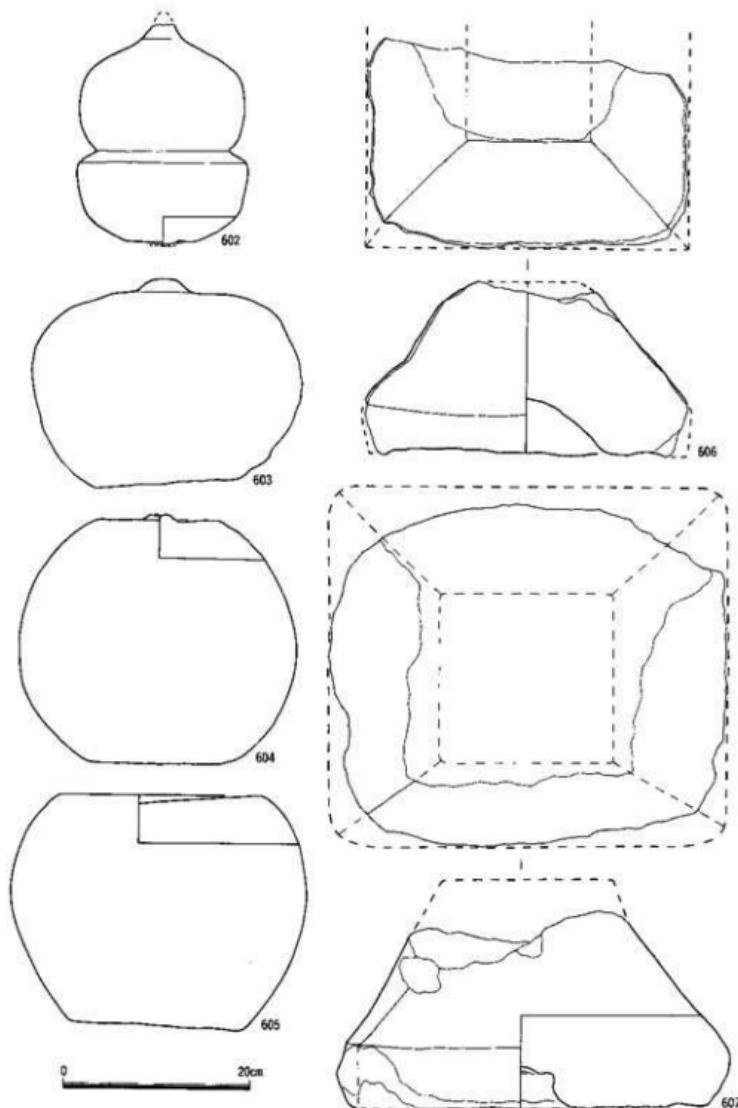
ST2001周辺で出土した五輪塔は砂岩製のものが中心である。空風輪は7点でいずれも砂岩製である。部分的に欠損しているものも含まれるが、遺存状況はおおむね良好である。高さ20～30cm、幅が風輪の上端で15～20cmの範囲におさまるものである。各部位の形態などに若干の違いがみられる。その中でも590はもっとも大形で、空輪頭頂部の突出や下部の突起は明瞭である。火輪591は凝灰岩製で各所が破損して欠損している。幅・奥行きに対してやや高い。



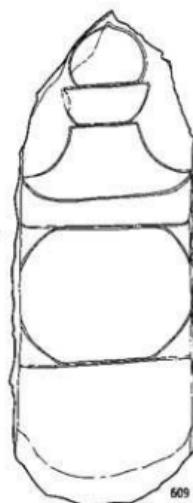
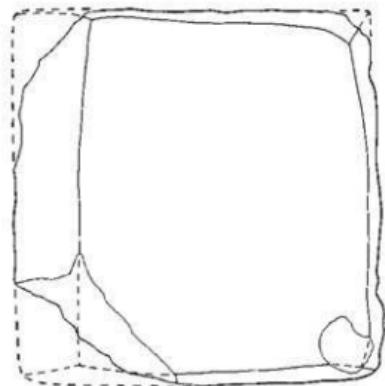
第80図 遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (1)



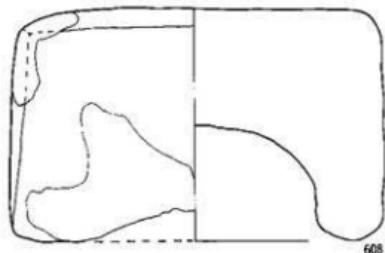
第81図 遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (2)



第82図 遺構に伴わない五輪塔 ST2002~2004周辺 (1)



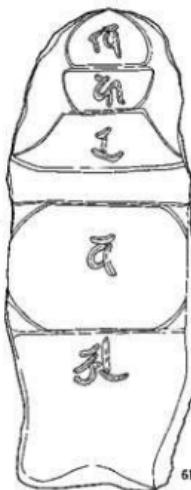
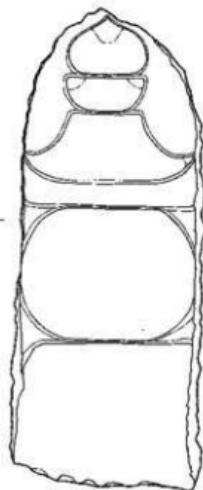
609



608



610



611

0
40cm

第83図 遺構に伴わない五輪塔 ST2002～2004周辺 (2)

上面には径6.15cm、深さ3.65cm、下面には径10.3cm、深さ2.5cmの円孔をそれぞれ穿つ。水輪は592、594～598が砂岩製、593が凝灰岩製である。592、594～598は火輪の下面にはぼぞ穴を穿つものがあることから上下を正確に特定できなかった。最大径が中央部にこない偏球形で、片面に弱いぼぞをつく。593は表面の剥落が著しく、原形はほとんどとどめていない。地輪599～601は砂岩製で、立方体に近い形態を呈する。599・600は上面に浅い円孔を穿つ。599の下面は平坦に仕上げられていない。601は上面も平坦ではなく、未製品であろうか。

ST2002以南の五輪塔は砂岩製と凝灰岩製が半ば半ばしている。602は凝灰岩製の空風輪で、凝灰岩製としてはやや高さに比して幅広の形態である。606・607はいずれも凝灰岩製の火輪で欠損部分が大きい。いずれも下面にはぼぞ穴をち、傘部の反りはほとんどない。603～605は水輪である。605は上下とも明確な平坦面をもち、ぼぞをもたない。608は凝灰岩製の地輪で、他の地輪と比較すると、幅・奥行きに対する高さが著しい。五輪板碑はD-4グリッドを中心にして3点が出土した。いずれも砂岩製で、自然石を利用し、自然面に五輪塔を浮き彫りとなるように線刻したもので、背面の成形は輪によって舟底形に加工を加えたものである。611は五輪塔の各部位にさらに梵字を刻んだもので、空輪より下へ向かって「キヤ・カ・ラ・バ・ア」で、「空風火水地」を表したもので、五輪塔に刻まれる文字としては最も一般的なものである。

注

- (1) 「山田古墳B」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(徳島県埋蔵文化財センター 1992)
- (2) 西弘壽「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1987
「古代の土器 I 都城の土器集成」古代の土器研究会 1992
- (3) 田辺昭三「南邑古窯址群」平安学園考古クラブ 1966
田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- (4) 帽についての用語は、岡安光彦「いわゆる『素環の巻』について—環状板付帽の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号(古墳文化研究会 1984)による。
- (5) 宮代栄一「いわゆる貝製雲珠について」『鞍馬史学』76 1989
- (6) 横田賛次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- (7) 尾上実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器概一」『中近世土器の基礎研究』1985
尾上実「南河内の瓦器概一」「藤沢一夫先生古希記念 古文化論叢」1983
- (8) 『石井町史 上巻』1981
- (9) 「上喜来遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(徳島県埋蔵文化財セン

ター 1992

(10) 森田稔「東播磨」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」大戸窯検討のための「会津シン

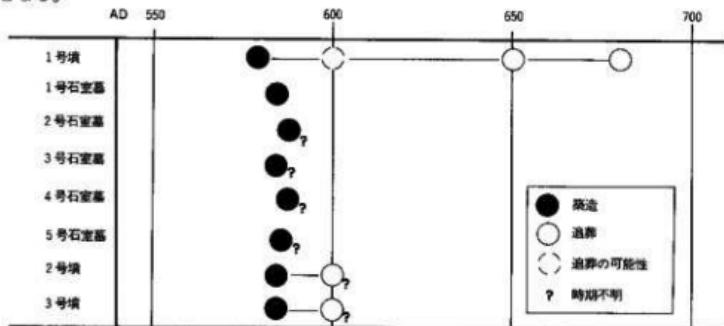
ポジュウム」資料 1992

(11) 注(9)文献に同じ

3 まとめ

1 古墳群の築造課程

今回の調査では、尾根上において横穴式石室を主体とする2基の円墳（1号墳・2号墳）と5基の小堅穴式石室（1～5号石室墓）が、南東斜面部では1基の横穴式石室（3号墳）が検出された。それぞれの築造と追葬の過程を副葬された須恵器の年代から示すと次の通りとなる。



第84図 各遺構の造営過程

1号墳は出土状況が安定していなかったものの、排水溝内と前庭部にかけて100個体近くの須恵器が出土した。須恵器は複数型式にまたがるもの、もっとも古いグループである6世紀後葉のものが大部分を占め、この年代の築造であることになる。2号墳はその周壁が1号墳の墳丘を一部切り込んでいることが確認され、1号墳より後出することが確実である。出土した須恵器は蓋杯2組と多くはなかったが、年代を決め得る資料である。1号墳築造段階のものと型式差はなく、6世紀後葉の段階でもわずかに新しい年代を想定した。3号墳は横穴式石室から出土した須恵器は杯蓋2個体分で年代決定にはやや弱いが、周囲で出土した須恵器についても同型式である。6世紀後葉の築造とみられるが、3号墳が築かれた南東斜面部分に尾根に先行して古墳を築造することは考えにくいため、1号墳の直後の年代を与えた。したがって、古墳の築造は6世紀の後葉～末にかけてすべて終了していることになる。

追葬については、1号墳と2号墳・3号墳の各古墳で行われている。2号墳は耳環の移動を、3号墳は耳環の点数（3点の出土）を根拠としており、それぞれの年代は不明であるが、1号墳での場合のように長期間にわたる追葬ではなかったものと想定できる。1号墳では出土須恵器から7世紀中葉と後葉にそれぞれ追葬が行われていることが確実である。その他に須恵器の形態が2段階程度に型式分類が可能であること、7世紀中葉までの追葬までの間隔

が長すぎることから西暦600年頃の追葬を想定している。耳環が3点出土しており、金銅製の1点(112)を初葬に伴うと仮定した場合、残りの2点(113・114)は早い段階での追葬に伴うとみられる。

1号墳周囲の5基の石室墓のうち、年代決定の根拠となる副葬須恵器をもつものは1号石室墓のみである。5号石室墓の場合は数点の須恵器が上面などから出土しているものの、これらの須恵器に年代幅がみられることを考慮すれば、埋葬後の祭祀などの可能性は否定できないが、むしろ1号墳の横穴式石室より撒き出されたとみなしうる。1号石室墓出土の須恵器は1号墳出土の須恵器のうち古いグループと同じ特徴を有するもので、1号墳と同年代である。墳丘を切り込んでいるため、墳丘の盛り土よりも新しい段階に築かれている。3号石室墓には、須恵器の出土はなかったものの、鉄鏃が2点出土し、その形式からほぼ6世紀後葉～末におさまるものとみられる。2号石室墓・4号石室墓はそれぞれの墓壙が1号石室墓・3号石室墓の一部を切り込んでいるが、副葬土器がなかった。厳密な年代は決めがたいが、5基がともに再葬墓とする見方に基づけば、築造の年代幅はなく、まず同時期とみてよいであろう。1・2号、3・4号の2基一単位となる2組の小豊穴式石室は規模的にも大小の組合せとなっており、隣接して築かれており、群構成上の特徴の一つである。

1号墳を嚆矢とする古墳群の築造は、6世紀末までにそのピークを迎え、新しい古墳の築造は行われない。各横穴式石室に追葬が行われ、1号墳では100年間にわたる継続的な利用が行われる。この後、中世墓が南東斜面部に築かれるまでの期間の遺構は検出されていない。しかし、8世紀後半～9世紀前半の須恵器藏骨器⁽¹⁾、12世紀の白磁(324)、13世紀の瓦器(325)などによって、なにがしかの活動(火葬墓などの再利用・盗掘)は想定されるが、明確な痕跡は残していない。

以上のような築造状況を整理すると、1号墳の築造を契機として周辺に横穴式石室や小豊穴式石室が築かれている。墳丘規模や後述する横穴式石室の構造・副葬品の組成などからみると、1号墳の群内における優位は揺るぎないものである。古墳群の群構成については、県内において明かな事例は少ない段階であるが、1号墳にみるような群における「主墳」の位置づけを得る古墳はきわめて稀である。県内にはこの年代に前方後円墳は知られておらず⁽²⁾、墳形の上からの階層性は窺うことができないものの、さほど墳丘規模においても大きい部類でもなく⁽³⁾、横穴式石室の規模についても同様である。つまりは全県的な広い規模での比較では、注目される度合いは低いが、群内における相対的な位置は非常に高いということになるのである。そうした場合、2・3号墳や1～5号石室墓については從属するような主体部であり、被葬者についても同様の関係にあるとみてよい。後期古墳は同族墓としての性格を与えられる場合が多いが、山田古墳群Aの各古墳についての関わりの強さは特殊な例として注目される。

横穴式石室の構造

3基の横穴式石室の調査を通じて構造が細部まで明確になったのは2号墳のみである。1号墳は床面直上にまで擾乱が及んでおり、一部の基底石と掘り方によってその形態を判断せざるを得なかった。玄室は基本的に長方形のプランで、わずかに中央部が膨らむ胴張りの傾向も併せもつ。玄室の規模は全長が2.7ないし3.2m、幅が最大幅1.55mとさほど大規模ではない。奥壁は2石で構成されているらしい。基底石は小口積みで、いわゆる腰石は用いない。排水溝を有する。

2号墳は小型の横穴式石室を有する。無袖式で、羨道部が省略されているか、きわめて短い形態である平面形は長方形プランで、中央部で大きく膨らんでいる。側壁は一部腰石を用い、2段目以上で徐々に持ち送っている。偏平な砂岩礫床を持つ。

3号墳はごく一部のみの遺存で、墓壇の形態により辛うじて玄室がわずかな胴張りを有することがわかる。その他の構造は不明であるが、復元される法量が2号墳の計測値とほぼ一致しており、年代が近いことも考慮すれば同様の形態を持っていたことが推定される。

小豎穴式石室の構造

5基の小豎穴式石室は、壁体の構造に関する限り共通している。すなわち、長側壁において基底石は板石を立てて横穴式石室と同様の腰石として用いている。ただし、1号石室墓については西側の側壁のほとんどを小口積みとしている。短側壁部分はすべて1石の立石により構成され（5号石室墓はやや異なる。）、3号石室墓では裏込めを用いている。2段目以上はやはり小口積みである。高さは1号・5号石室墓で0.45mであり、この数値は平面形の規模に関わらずほぼ変わらないものとみられる。1号石室墓で1石が架構状態で検出された。こうした小豎穴式石室において天井石までを含めた構造が明らかな例として県内では麻植郡鶴島町吐氣山2号墳第2・第3石室しかない⁽²⁾。吐氣山2号墳の小豎穴式石室は用いている石材が結晶片岩であり、短側壁も小口積みにするなどやや違いもみられるが、おおむね法量などにおいては近似しており、同様の構造とみてよいであろう。

床面は主体部ごとに状況がやや異なる。板石を主に用い、隙間を小円礫で補うもの（1号・4号石室墓）、平たい円礫を用いるもの（3号・5号石室墓）、特別な施設を設けないもの（2号石室墓）がある。法量や次項でみる副葬遺物の面においても規則性は見いだせず、床面の構造については、どのような選択が行われたかは不明である。

2 出土遺物について

副葬品組成

1～3号墳・1～5号石室墓の副葬遺物を一覧表にすると以下のようになる（次頁表）。

遺物	須 恵 器					装 飾 品					武 具			馬 具		工 具						
	蓋	高	平	提	短	耳	勾	管	切	算	ト	管	ガ	土	三	方	圭	長	大	雲	刀	
遺構名	高	杯	瓶	瓶	甕	子	盤	ボ	ス	玉	玉	玉	玉	玉	形	頭	頭	頭	刀	梯	珠	子
1号墳	○	○	○	○	○	?	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
1号墓	○			○	○							○	○									
2号墓																						
3号墓															○	○						
4号墓																						
5号墓	?	?																				
2号墳	○					○									○	○	○	○				
3号墳	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

1号墳では、須恵器・装身具・鉄鎌・大刀・馬具を含む。須恵器には蓋杯・高杯・甕・平瓶・甕などの各器種で構成され、副葬土器として一般的なものがすべてみられる。装身具については、実数ももっとも多く、構成する種類もほぼ出そろっている。馬具は山田古墳群Aでは唯一の出土で、轡・鏡が2組みられた。農工具類はみらないことと鉄鎌の点数も少なく、本来の組合せからはかなり欠けている可能性があるが、副葬遺物の組成としてはもっとも充実しているということができる。2号墳は須恵器・鉄鎌・刀子が出土し、装身具は耳環1点のみであった。須恵器は蓋杯が2組で、きわめて少なく最低限の単位であった可能性がある。鉄製品の副葬遺物の中に占める位置が高いところに特徴がある。鉄鎌については1号墳出土のものよりも、実数・形式数で上回っている。反面装身具の比率の低さが強調される。3号墳では須恵器・装身具が出土した。須恵器は杯甕2点できわめて少なかったが、横穴式石室の依存状況を考えればやむを得ない。装身具類は山田古墳群Aでみられるすべての種類を備えており、その位置づけが高い。武具・馬具類の出土は全くなかった点は好対照である。

石室墓においては、1号石室墓には須恵器6点と玉類100点が、3号石室墓には鉄鎌2点が副葬されていた。群構成でみたように、2基一組の小野穴式石室のうちの規模の大きなものに伴っており、ここにランク付けが働いていることが明瞭である。また、1号石室墓と3号石室墓とを比較すると、規模的には3号石室墓が大型である。このことは、築造された位置と不可分の関係とみておきたい。

総合すると、立地的にも規模的にも中心となる1号墳が、須恵器・武具・馬具・装身具を副葬品としてももっとも豊富である。2号墳では鉄製品中心、3号墳では装身具のみの副葬となっており、1号墳とは対照的である。副葬遺物に現れたこうした違いは、被葬者集団内の関係をも表しているものとみられる。1号墳が群構成において軸となっていることは、遺物の組合せの上からも説得力をもつ。

馬具

馬具は素環鏡板付轡と鎧がそれぞれ2組出土しており、2セットの馬具の副葬が想定される。7世紀以降の追葬段階の土器の副葬量がきわめて少なものであることから、新しい段階での副葬は行われていないものとみられる。したがって、初葬あるいは初葬から時間を感じてないで行われた可能性のある追葬に伴うもので、本来の組合せからは大きくなっていると考えられる。

馬具の中には県下初の出土である貝製雲珠の飾り金具が含まれていた。四国においては香川県高松市南山浦11号墳においてその出土が確認されている⁽⁴⁾が、その出土数はきわめて少ない。全般的には関東地方と北部九州に集中しており、集成を行った宮代氏はイモガイの生息範囲との比較から大和朝廷による配布と地方生産の二つの可能性を想定している⁽⁵⁾。山田古墳群Aにおいては、横穴式石室の構造が今一つ明瞭でないため、どのような要因で貝製雲珠がもたらされたかは判断しかねるが、ここでは前者の可能性を重視しておきたい。

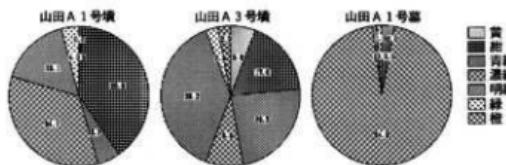
装身具

出土遺物総数600点余りのうち半数以上を占める。ガラス玉・土玉がそのほとんどではあるが、耳環・勾玉・切子玉・管玉・トンボ玉などを含み、多様な種類をもつ。1号墳で玄室奥壁付近から排水溝にかけてと出土範囲が広く、遺体への装着状況などは明らかにし得ない。ガラス玉・土玉が、圧倒的な数を占める。1号石室墓からはガラス玉99点と土玉1点が出土した。追葬がなく帶状に集中していたことから、原位置にありかつ本来の組み合わせを示す例として注目される。2号墳では耳環が1点出土したが、追葬された遺体には伴っておらず、またガラス玉などはどちらの遺体にも装着されていない。3号墳は横穴式石室の遺存する範囲が狭かったが、玄室の奥壁に近い箇所に集中していた。耳環が3点含まれていることから1体分ではなく、2体目も含めた装身具が集中していた可能性がある。算盤玉が含まれており、1号墳よりも豊富な組み合わせをもつことになる。土玉が3点のみの出土で、実数は不明ながら全体に占める割合が低い。この点は1号石室墓の状況と共通する。

そのうち、出土数のもっとも多かったガラス玉についてみると、サイズ・色調の点で出土古墳それぞれの傾向をもつ。1号墳では径が3~4mmのサイズにピークが集まり、2~3mm・3~4mmのものが続いている。また、5mm以上のものも少なからずみられる。12mmを越える2点は他のガラス玉とは異なる装着方法が想定できる。3号墳では、1号墳のものと近いサイズをもつものが多いが、径6mm以上のものは含まれない。1号石室墓では2~3mmにピークがあり、このサイズに当てはまらないものは非常に少ない。重量は径にほぼ比例しており、同様の傾向がある。色調は「色名帳」によって細別したものを、色の系統ごとに再度まとめた(第85図)。1号墳では、紺系統が半数を占め、その残りを濃緑・明緑の緑

色系統が約半数づつを占める。緑黄・青緑・緑などの系統はごく少數しか含まれない。3号墳では、明緑系統が3分の1以上を占めもっとも多く、濃緑・紺系統の割合が少ない。黄・橙の比率が高いのは、絶対数が少ない(34点)ためであろうか。1号石室墓では濃緑系統が大多数を占め、それ以外のものはきわめて少ない。サイズ・色調からみると主体部ごとに状況が異なっている。一体への装着かどうか

疑問を残しているが、本来の組合せを残す1号石室墓のガラス玉のサイズが横穴式石室出土のものよりも小さいであることから、主体部構造と同様にガラス玉にもランク付けが行われているとみることができる。類例をさらに整えて検討すべき課題である。



第85図 山田古墳群A出土ガラス玉の色調構成

3 中世墓の構造と群の構成

4基の構造と年代について

4基の中世墓は南北に伸びる尾根の南東斜面部に築かれていた。調査区外には、次項でみるようにさらに中世墓が広がる。ここでは、4基の構造とその位置づけについて簡単に整理しておきたい。

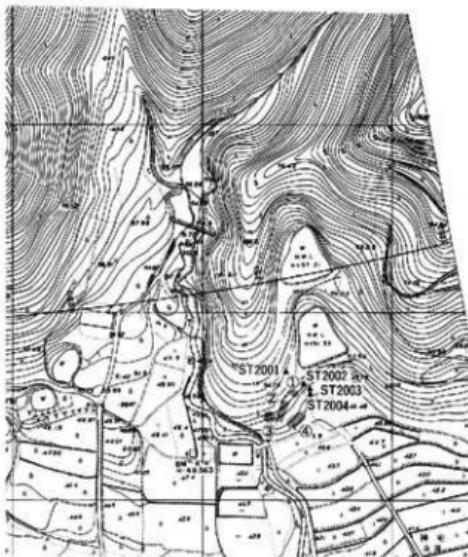
もっとも高い位置に築かれた1号中世墓は斜面を階段状にカットして平坦面を作り出して、火葬施設を築いた後に、埋葬施設を設け(一部は火葬施設を利用)、墓壇状の石組を築き、上表となる五輪塔を置く。埋葬施設のうちSK02は、骨蔵器として円筒形の土師質土器を用いている。火葬施設には經道を設けていない。その他の3基について、火葬骨の埋葬施設を覆う石組を築く2号中世墓では、五輪塔の一部が埋葬施設(SK01)の上面で原位置をとどめていた。3号・4号中世墓でもそれぞれ若干の五輪塔が出土していることから、すべての中世墓に五輪塔が伴っている。骨蔵器が検出されなかった多くの埋葬施設では、有機質の骨蔵器の存在が想定される。

4基の中世墓の年代は、紀年銘のある遺物がみられなかったことから、土器や五輪塔の形態などに拠るが、それらの資料の編年は確立しておらず、幅のある推定の域を出ない。1号中世墓や2~4号中世墓周辺で出土した土師質の円筒形土器は、類例が増えつつある段階で年代をおさえうる状況ではない。浦庄遺跡の年代の根拠が正しければ(文永7【1270】年銘の板碑)、存続期間がかなり長いようである。五輪塔の型式は火輪の傘部分の反りや水輪の大径の位置などについて、凝灰岩製のものが砂岩製のものよりも古くなる傾向がある。造墓の方法として、中心地から外へ向かって、高い位置から低い位置へ継続して築く傾向が認め

られている⁽⁶⁾。また、火葬墓としての機能からも、1号中世墓を築いた後に2~4号中世墓が築かれた可能性が高い。しかしながら、五輪塔の先述の型式上の特徴からは1号中世墓のものは新しい傾向がある。このことは継続的な供養にも起因するとも考えられるが、五輪塔の形態が石材による規制を受け、凝灰岩製のものに古い形態を残していることも考えうる。近世初期に位置づけられる五輪板碑⁽⁷⁾は、ややまとまって出土した2号中世墓周辺のものでも中世墓築造段階のものとは考えにくく、築造時から若干の時間を隔てた時点での供養によるものとみられる。したがって、2号中世墓を含めた3基の火葬施設をもたない火葬墓については、1号中世墓において、各段階で認められた時間差は2~4号中世墓築造の年代差との対応の可能性がある。築造時以降の供養についても石造物を根拠とする他はないが、五輪板碑よりも新しい形態のもの（一石五輪塔）などがみられず、江戸時代の初期段階で終了しているようである。

調査区周辺の中近世墓群

調査が行われた尾根の南東斜面の里道に沿うように、現在も五輪塔などが散乱し中近世墓が広がっている様子が観察される(第86図)。調査された4基の中世墓の位置づけにも関わる部分であり、地点ごとの状況を整理しておきたい。



第86図 中近世墓の広がり

第①地点は2・3・4号中世墓にもっとも近い位置にある。径7~8 mの壇状の土盛りがある。五輪塔や積み石などは現況ではみられない。

第②地点は里道東側に沿い約10 mにわたって、五輪塔などがみられる。わずかに集石らしいものもみられるが、特別な施設はみられず別の中近世墓などから集められてきた可能性が高い。いずれも砂岩を素材としており、空風輪3点、火輪3点、水輪8点、地輪4点が認められた。

第③地点は里道の西側に隣接する地点で、南北5~6 m、東西3.5 mの不整円形を呈する壇状の高ま

りがある。現状での高さは1mを上回る。盛り土の隙間に結晶片岩などの円礫による積み石の状況がみられる。墓標の施設はない。

第④地点はもっとも下位の水田近い位置にある。7~10m四方の範囲に五輪塔類が集中する。意図的に砂岩礫を積み上げた感のある集石箇所や基壇状の施設があり、そうした中に五輪塔などが散見される状況である。五輪塔には空風輪2点、火輪5点(うち1点に梵字)、木輪13点、地輪1点、五輪板碑5点があり、ほかに仏像類の墓標が5点ある。これらは集積される状態に不自然な状態であり、他の中近世墓から集められたものであろう。

以上の4地点の状況を整理すると、2地点に塚状の盛り土が注目される。1~4号中世墓において上部構造が築造当初の形態を保っているものがなかったが、1号中世墓のような基壇状の石組を築く場合と第①・④地点の塚状に盛り土を行う二つの形態が並存しているようである。盛り土の行われた中世墓の詳細は不明であるが、上表としての五輪塔が確認できないことから下部構造なども異なっている可能性がある。五輪塔や仏像類はすべて砂岩製で凝灰岩製のものはみられなかった。五輪塔の各形式においても、1~4号中世墓出土のものよりも古い特徴を有するものはなかった。仏像類の型式からは、室町時代の終わりから江戸時代の初頭と考えられる⁽⁸⁾。五輪塔などの特徴からみると、1~4号中世墓と同年代かやや新しい可能性が想定される。したがって、これらの4地点に展開する中近世墓も1~4号中世墓と一連の流れの中で築造され、継続した供養が行われたものとみられる。現在も中近世墓の間を縫うように残っている里道は、この形態がどの段階までさかのぼるかは不明であるが、以上みてきたような造墓活動の名残である可能性が非常に高い。

また、調査地点のすぐ南側の水田面には寺院があったとの古者の伝承がある。

中世墓群の類例との比較

山田古墳群Aの4基の中世墓に関して、これまでの限られた県内の調査例⁽⁹⁾から類似するものを見つけるのは困難である。

奈良県宇陀地域の中世墓群は群単位の調査が數ヶ所で行われており、群構成を検討する上でモデルケースとなりうる地域であり、楠元哲夫氏⁽¹⁰⁾と白石太一郎氏⁽¹¹⁾によって考察がなされている。宇陀郡櫛原町野山遺跡群⁽¹²⁾・同町所在能峰遺跡群⁽¹³⁾などの6遺跡の中世墓群について調査が行われ、その意義が整理されている。楠元・白石両氏の論を参考にしながら、その位置づけを検討してみよう。立地条件においては、尾根の稜線状を用いる例が一般的であり、古墳の立地条件と重なる場合が多いとされている。野山遺跡群野山支群では尾根の稜線上に5世紀を中心とする古墳群の頂部や裾部に中世墓が8基築かれるのとは別に、北西側の斜面ではテラス状に平坦面を削り出し34基の中世墓を築いている。(以下の文中では野山支群北斜面)。年代的には同時期であり、副葬遺物に差異がみられるところから、階

層差を表現しているものとみられる。山田古墳群Aでは、尾根上では古墳が築かれたのみで、中(近)世墓は南東斜面に集中しており、古墳の墳丘や主体部を利用した痕跡はみられない。斜面部を中心に展開する中世墓群としては、福岡県北九州市白岩西遺跡⁽¹⁾があるが、墓群の規模が格段に大きく(13群230基以上)、隣接する寺院や特定氏族との関係で捉えうるなど、実態の解明の度合いに優る。

構造の面で比較すると、墓の上部構造に石組をもつものはきわめて普遍的で、多くの例が知られている。野山支群北斜面の場合、中世墓のほとんどに石組を伴っており、その形状にもばらつきがみられ、山田古墳群Aにおける2~4号中世墓の状況に類似している。3・4号中世墓のように、石組を□または□字形とする方法もまた一般的である。こうした中で側辺を共有して連続的に築く例も頻繁にみられ、宇陀地域に関すれば野山支群北斜面ST03~05や奈良県宇陀郡株原町大土山遺跡東尾根地区⁽²⁾、その他の地域に目を移せば三重県松坂市横尾塚墓群A区の南西斜面⁽³⁾などでみられる。4号中世墓において連続した造墓を想定したのもこうした例をふまえたからである。火葬施設を伴う場合と伴わない場合とがあり、宇陀地域においても遺跡ごとに異なる様相をもつ。こうした点は、火葬墓に用いる蔵骨器の材質や五輪塔の保有状況にも現れている。

以上諸点について比較検討を加えてきたが、尾根全体を覆うような大規模な中世墓群と数基程度で構成される中世墓群とでは、墓に現れる以前に造営主体そのものに大きな差異があることが当然予想される。造営主体たる集落遺跡の考古学的資料や文字史料の研究の蓄積が望まれ、その基本的な条件をまず満たしうる遺跡の一つになり得たことが大きな成果といえよう。

注

- (1) 美馬郡穴吹町三島1号墳は前方部・後円部にそれぞれ横穴式石室をもつての前方後円墳とする見方があるが(A)、墳丘の形態からの批判的な見方もあり(B)、一墳丘二石室の構造とみた方が妥当性が高いように思われる。
A 岡山真知子「三島古墳群の研究」『徳島考古』創刊号 徳島考古学研究グループ 1983
B 音原康夫「日本の古代遺跡 39 徳島」保育社 1988
- (2) 音原康夫「徳島県」(『古代学研究』第120号・円墳特集 1990)の一覧による。
- (3) 『吐氣山古墳発掘調査概報』鳴島町教育委員会 1982
- (4) 『南山浦古墳群調査報告書』(高松市教育委員会 1985)掲載の第26図414。
- (5) 宮代栄一「いわゆる貝製盤珠について」『鞍台史学』76号 1989
- (6) 楠元哲夫「中世後半期における集団墓地ーとくにその生成と展開をめぐってー」『未永先生
米壽記念 献呈論文集 坤』明新印刷 1985

- (7) 坪井良平「山城木津惣墓標の研究」『考古学』第10巻第6号 1939
- (8) 注(5)文献
- (9) 徳島県下における中世墓の調査例については、辻住伸氏の以下の成果にまとめられている。
辻住伸「徳島県の中世墓－火葬墓の展開に関する予察－」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第2号 1993
- (10) 注(4)文献
- (11) 白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗資料館研究報告』第49集 1993
- (12) 「野山遺跡群Ⅰ」奈良県立橿原考古学研究所 1988
「野山遺跡群Ⅱ」奈良県立橿原考古学研究所 1989
- (13) 「能峯遺跡群Ⅰ（南山編）」奈良県立橿原考古学研究所 1986
- (14) 「白岩西遺跡」北九州市教育文化事業団 1984
- (15) 「奈良県宇陀郡大王山遺跡」株原町教育委員会 1977
- (16) A 「近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」三重県教育委員会 1986
B 「三重県の中世墓」三重県埋蔵文化財センター 1992

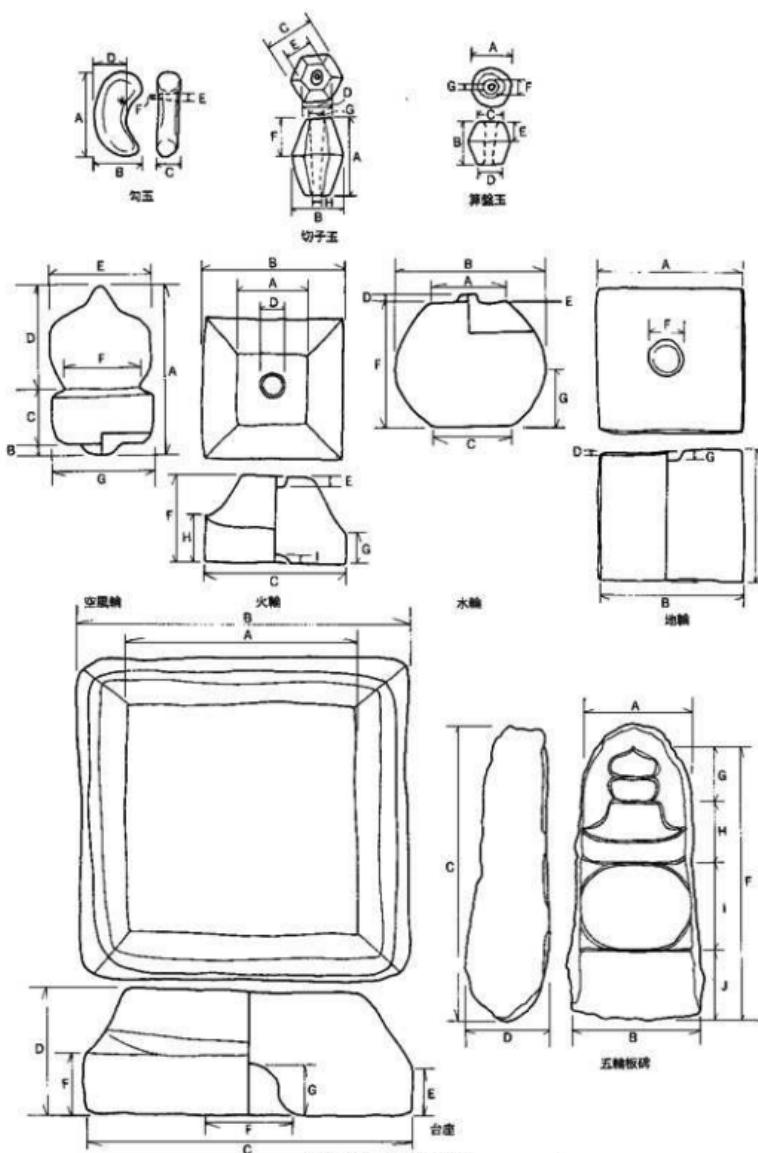
以上の注に挙げた文献のうち、原典資料に接することのできなかった遺跡があり、それらについては注4・16Bの他に以下の文献を参考にした。

参考文献

- 『佛教芸術』第182号 特集・中世の墳墓 1989



遺物觀察表



第87図 計測値凡例

第1表 Q-5・6グリッド須恵器観察表

番号 横版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	窓の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
1	Q -	蓋	口徑 16.0	丸みをもつ上半よりに唇 大澤をもつ腹部。短く 立ち上がる腹部と脚部 をもつ。口部は上方で 最も広い。	体部は下から3分の1以下 の部分に刃部へと引け が施された後は、四輪ナ ゲ窓である。脚部内面 はナゲ窓により削りの 痕跡はほとんど無くな る。脚部外側に指印出 現。	(外)黒褐色 (内)暗灰褐色	密、径0.5mm の砂粒多く わずかに含む	良好	時計回 り	
3	4 + 5									
11										

第2表 SM1001出土須恵器観察表

番号 横版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	窓の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
2	前庭部	杯蓋	口徑 12.4	天井部は丸みをもつ。唇 やかなカーブで口縁につ ながる。(口縁は細部でわ ずかに外反する。傾きが 全体にない。)	天井部前面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。 天井部内面は刃部ナゲ窓 後、一定方向ナゲ。	灰色	密、径3mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	時計回り	天井部 外端に 「！」 字のヘ ラ記号
14										
8										
3	玄関部	杯蓋	口徑 13.0	口縁に比して扁平な体部 で、全体に胎膜は薄い。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。 天井部内面は刃部ナゲ 窓後、一定方向ナゲ。	暗灰褐色	密、径1mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り	「！」 字のヘ ラ記号
14	前庭部									
8										
4	後退部	杯蓋	口徑 11.6	手形のプロボーション をもつ。口縁部内面にご くわずかなくぼみがあ る。	天井部前面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。 天井部内面は刃部ナゲ 窓後、一定方向ナゲ。	灰色	密、径3mm未 満の砂粒含む	良好	時計回り	天井部 外端に 「×」 字のヘ ラ記号
14										
8										
5	前庭部	杯蓋	口徑 13.2	脇が全く丸い天井部をも つ。口縁は丸くおさめる。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。	(外)灰色 (内)灰白色	精良	やや灰質	時計回り	
14	周壁									
8										
6	後退部	杯蓋	口徑 12.95	丸みをもつ天井部と脚部 が丸くおさまるU脚部と からなる。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。	灰色	精良	良好	時計回り	
14	前庭部									
8										
7	後退部	杯蓋	口徑 14.6	口縁に比してやや扁平な 器形で、口縁部はやや内 側丸味であり。U脚部は やや仄角い。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。	オリーブ灰色	密、2mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	時計回り	内面に 鉄錆付 着
14										
8										
8	後退部	杯蓋	口徑 13.5	丸みをもつ天井部と薄い つくりの口縁部とからな る。口縁部は丸くおさ められている。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。	灰色	密	良好	時計回り	
14	前庭部									
8										
9	後退部	杯蓋	口徑 13.5	中背が高く、丸い天井 部と脇やかなカーブをも つ。口縁部は丸くおさ められている。	天井部外面は刃部へと引 り、その他のナゲ窓。	(外)黄灰 (内)灰白色	密、径2mm未 満の砂粒少し 含む	良好	時計回り	遺物 あり
14										
8										
10	後退部	杯蓋	口徑 14.5	脇やかなカーブの器形と 丸くおさめる口縁部を もつ。口縁部は	複数部位は刃部ナゲ。胎 土肥厚含む所は鋸歯状。	(外)灰色 (内)灰白色	密、径0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
14										
8										

番号	位置	編番	法長 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
11 14 8	前邊部 左下	右直 13.3 高 4.4	全体に丸い曲面で、口縁 も内側に。口縁底部は 丸くおさめられている。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他は四輪ナダ調 整。	(外)灰褐色 (内)オーラーブ 灰色	素、径1mm 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り		
12 14	後邊部 右直	右直 13.8 高 4.3	丸みをもつ天井部にやや 内側する口縁部をもつ。 口縁底部は丸くおさ める。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他の四輪ナダ調 整。	(外)灰褐色 (内)灰白色	精良	良好	時計回り		
13 14	後邊部 右直	右直 14.6 高 3.9	天井部は平底で、緩やか なカーブの底をもつ。口 縁底部は丸くおさめて いる。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他の四輪ナダ調 整。削り方に粘土混入 の生痕あり。	(外)灰黄色 (内)淡黄色	やや粗 やや細	良好	時計回り	39に類似	
14 14	後邊部 右直	右直 13.63	緩やかな算葉をもち、口 縁底部は丸くおさめる。	底存部は凹版ナダ調 整。	(外)灰褐色 (内)灰白色	精良	良好	不明		
15 14	後邊部 右直	右直 13.0	緩やかなカーブで口縁部 にいたり、やや尖り気味 におさまる。	底存部は凹版ナダ調 整。	(外)灰褐色 (内)灰白色	やや粗、径1 mm溝の砂粒 やや多く含む	良好	不明		
16 14	後邊部 右直	右直 15.0	丸みをもつ天井部と、先端 をやや細く上げる二段階 型となる。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他は四輪ナダ調 整。	灰褐色	精良	良好	反時計回 り		
17 14	後邊部 右直	右直 13.9	横をもたない天井部と先端 をやや細く上げて、丸く おさめる口縁とからなる。 口縁底部には非常 に弱い後がある。	底存部は凹版ナダ。	(外)灰褐色 (内)灰白色	精良	やや軟質	不明		
18 14	後邊部 右直	右直 14.5 高 3.2	緩やかなカーブをもつ口 縁部の底で、口縁底部 は厚く仕上げられてい る。	底存部は凹版ナダ。	(外)灰褐色 (内)灰白色	素	良好	不明		
19 14 8	後邊部 右直	右直 11.1 高 4.0	全体に丸みをもち、口縁 底部はやや厚く丸くおさ めている。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他の四輪ナダ調 整。粘土混入の砂粒が 亀裂として断続でできる。 ヘラ削り工具の丸まった 底面から工具の側面6.7 cm以上であることが分か る。	灰色	精良	良好	時計回り		
20 14	後邊部 右直	右直 13.0 高 4.1	丸みをもつ天井部から、 直立する口縁部へとつな がる。口縁底部は丸くお さめる。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他の四輪ナダ調 整。天井部内面は凹版 ナダ後、一定方舟ナダ。	灰色	素、径0.5mm 溝の砂粒やや 多く含む。	良好	反時計回 り		
21 14 8	後邊部 右直	右直 13.4 高 4.2	天井部にへたり切時の平 底を残す。口縁部は大き く開き、底部は丸くお さめる。	天井部外面は凹版へテ削 りがなく、へたり切無 調整。その他は四輪ナダ 調整。	灰褐色	精良	良好	時計回り	36.27, 29と類似	
22 14	後邊部 右直	右直 13.3	周辺は緩やかなカーブを もち、口縁底部は丸くお さめる。	底存部は凹版ナダ。	(外)黄灰色 (内)灰白色	精良	良好	不明		
23 14 8	右直	右直 12.6 高 4.3	丸い天井部に、直立する 口縁部をもつ。口縁部 前面には複数めぐら。	天井部外面は凹版へテ削 り、その他は四輪ナダによ る凹凸差し。	灰色	素、径1mm 溝の砂粒含む。	良好	反時計回 り		

番号	位置	樹種	法量(cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
24 14 8	後退部 前進部	杆高	11径 13.0 4.1	天井部は細やかな丸みをもつて、口縫部は底面またわざかに内傾である。口縫部内側にはナゲによる凹部がある。	天井部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り。	灰白色	やや暗、径1mm未満の砂粒をわずかに含む	良好	時計回り	
25 14	後退部	杆高	10径 13.2 3.65	半円状な外側に外側へ深く口縫部が付く。口縫部内側にはごくわずかな沈没感がある。	天井部外側には回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り。	緑灰色	青、径1mm未満の砂粒を含む	良好	反時計回り	
26 14 8	後退部	杆高	11径 11.0 基高 4.1	天井部に比してやや口縫部が小さい。口縫部外側には深い埋没感があり、底部は丸くおさめる。	天井部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り、回転ヘラ削りは程よく、ヘラ切りの凹部を明確に残す。天井部内側には回転ナゲ削り後、一定方向ナゲ。	灰色	青、径1mm未満の砂粒を含む	やや軟質	時計回り	ハケ状工具の仕事。 29と類似
27 14 8	後退部	杆高	10径 11.35 基高 4.1	全体は全体に丸く、底部には口縫感とその他のなるごく弱い埋没感ある。口縫部内側には外側へ凹出し、丸くおさめる。	天井部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り、天井部内側には回転ナゲ削り後、一定方向ナゲ。	灰色	青、径0.5mm未満の砂粒を含む	やや軟質	反時計回り	ヘラ式工具の仕事。
28 14 8	後退部	杆高	11径 12.5 基高 3.5	半円状な天井部をもち、そのままのカーブで口縫部につながる。横幅が非常に厚い。	天井部外側には回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後、回転ナゲ。その他の部分は回転ナゲ削り。	(外)赤灰色 (内)灰白色	青、径5mm未満の砂粒を含む	良好	時計回り	56,37、 60と類似
29 14 8	後退部	杆高	10径 11.4 基高 3.4	やや平坦な天井部をもち、口縫部が強いために口縫部によってわざかに外側している。壁部は全体に薄く仕上げられている。	天井部外側は回転ヘラ削りがなく、ヘラ切り後の調整がない。その他の部分は回転ナゲ削り、天井部内側には回転ナゲ削り後、一定方向ナゲが施されている。	灰色	青	良好	時計回り	ハケ状工具の仕事
30 14 8	後退部	杆高	10径 11.4 基高 3.6	天井部はやや扁平で、肩部に凹出やカーブがある。口縫部は丸くおさめる。	天井部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削りによる形態を残す。天井部内側には回転ナゲ削り後、一定方向ナゲを施す。	灰色	青	良好	時計回り	
31 14 8	後退部・杆高	口径	11.8 基高 3.7	口縫部が丸く、全体に厚く仕上げられている。口縫部は半丸に丸くおさめられている。	天井部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り。天井部内側には回転ナゲ削り後、一定方向ナゲ。	(外)褐色 (内)灰色	青、表面砂粒が多い。	良好	時計回り	
32 15	前進部	杆	11径 12.0 安部 12.8 立上 9.8	やや瘦い形部に下方へまづく立ち上がりの口縫部をもつ、立ち上がり内側の屈曲はない。	横部部位は回転ナゲ。	灰色	青	良好	不明	
33 15	後退部	杆	10径 11.75 基高 3.8 受部 14.35 立上 8.9	瘦い四角形の外側に、内側に口縫部が付く。口縫部は細く仕上げられている。	底部外側は回転ヘラ削り、その他の部分は回転ナゲ削り。底部は細く仕上げられている。回転ヘラ削りの割合は他のものに比べ広い。	(外)灰色・黒 (内)灰色	青、径2mm未満の砂粒を多く含む	良好	反時計回り	底面外側に「×」印の記号

番号 回数	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
34 15	後退部	杯	口徑 12.7 受部 14.8 立上 0.75	底の大きな凹部であるが、二絞りが独立する形態をとる。I(隕頭部)はわずかに外反し、立ち上がり内面の屈曲はほとんど見られない。	底部外周は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ調整。	オリーブ灰色	青、径1mm木製の砂粒少しあむ	半干焼成	不明	
35 15	前進部	杯	口徑 12.0 受部 14.2 立上 0.8	やや深い体部に上方へ入り上がりをもつ。立ち上がり部分はやや厚手。	底部外周は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ調整。	緑色	良好	良好	定期計回り	
36 15 9	後退部 前進部	杯	11径 12.1 高さ 4.7 受部 15.0 立上 1.0	やや深い体部に内縮する立ち上がりをもつ。立ち上がりは本體部の頂點部で最も高く、立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外周は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ調整。底部内面は回転ナダ削り、一定方向ナダ。	(外)灰色 (内)オリーブ灰色	緑色	半干焼成	定期計回り	
37 15	前進部	杯	口徑 13.4 受部 15.8 立上 0.7	やや深い体部に強く大きい立ち上がりをもつ。立ち上がり内面の斜度は弱い。	焼成部位は回転ナダ。	灰白色	青、径1mm木製の砂粒少しあむ	良好	不明	
38 15	後退部	杯	口徑 13.0 受部 15.0 立上 0.9	浅い皿形の体部に直立する高い立ち上がりをもつ。	残存部位は回転ナダ。	灰白色	緑色	乾窯	不明	
39 15 9	後退部	杯	11径 14.2 高さ 3.8 受部 16.6 立上 0.8	浅い皿形の脚部と、上方へ立ち上がる口縁部とかなる。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外周は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナダを施す。	灰白色	青、径0.3mm木製の砂粒わずかに含む	乾窯	定期計回り	
40 15	後退部	杯	口徑 12.6 高さ 3.7 受部 15.0 立上 0.8	浅い皿形の口唇に内傾して立ち上がるI(隕頭部)をもつ。全体に薄く仕上げられている。	底部外周は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ調整。	灰白色	緑色	乾窯	定期計回り	
41 15 9	後退部 前進部	杯	口徑 12.6 高さ 4.3 受部 15.3 立上 0.7	丸い体部に強い立ち上がりが強く、立ち上がりは内側して脚部近くでごくわずかに外反している。立ち上がり内面にはやや強い屈曲がある。	底部外周は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ調整。	灰色	青、径2mm木製の砂粒少しあむ	良好	定期計回り	

番号 抽査版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴		色調	胎土	焼成	回転台	備考
					熟成部位は回転ナゲ。	後黄色					
42 15	側面部	杵	口径 13.6 受部 16.0 立上 0.7	短く内傾して立ち上がる 口締部をもつ。立ち上がり部分は薄く仕上げられて いる。							
43 15 9	側面部	杵	口径 11.9 器高 3.9 受部 13.5 立上 0.7	底部に堅厚な平坦部を残す。 立ち上がりは斜くわざかに内傾している。口 締部にはやや強い輪があり、底部はやや尖って いる。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。底部内面は回転ナゲ 後、一定方向ナゲ。	褐色	精良	良好	反時計回 り		
44 15 9	側面部	杵	口径 12.9 器高 3.3 受部 15.1 立上 0.7	浅い底部の秆部に内傾す る立ち上がりをもつ。立 ち上がり内面には屈曲は ない。	底部外側に回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲが 残されている。	灰白色	青、径0.5mm 溝の砂粒わず かに含む	軟質	不良		
45 15	側面部	杵	口径 13.8 器高 3.3 受部 16.9 立上 0.7	浅い直筒の秆部に短く盛 る立ち上がりが付く。立ち上がり羽内面の 屈曲は全くない。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。	灰白色	青、径0.5mm 溝の砂粒わず かに含む	軟質	反時計回 り		
46 15	円底	杵	口径 12.4 器高 3.5 受部 14.35 立上 0.65	浅い直筒の体部と短く上 方へ立ち上がる口締部と からなる。立ち上がりの 内面の屈曲が明瞭であ る。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲで 調整されている。	(外)灰白色・ 灰 (内)灰白色	青、径2mm 溝の砂粒含む	良好	時計回り		
47 15 9	側面部	杵	口径 10.95 器高 3.65 受部 13.2 立上 0.6	浅い直筒の体部に短く立 ち上がりが付く。立ち上 がりは内傾し上方へ屈曲 して、丸くおさめる。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。内部内面は回転ナゲ 後、一定方向ナゲ。	(外)オリーブ 色・灰白色 (内)灰白色	精良	良好	時計回り リバーラ ンド		
48 15 9	側面部 前底部	杵	口径 12 器高 4.2 受部 14.0 立上 0.65	浅い直筒の体部に短く立 ち上がりが付く。立ち上 がりは内傾し、内面に屈 曲はない。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。回転ナゲ調整は相対 でヘラ切りの痕跡が明顯 に残る。	浅黄色	精良	良好	反時計回 り		
49 15	側面部 前底部	杵	口径 14.5 受部 17.2 立上 0.7	短く内傾して立ち上がる 口締部をもつ。秆部は立 ち上がりに比してやや屈 曲。	底部外側に回転ヘラ削 り、その他の回転ナゲ調 整。	灰白色	精良	軟質	時計回り		

番号 回収	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調査の特徴	色 調	胎 土	焼成	回転台	備考
50 15	变速部	杵	口径 12.6 身高 15.5 立上 0.45	やや深い体部に底く内傾する立ち上がりが行く。	底部外面は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削。	灰白色	難良	軟質	反時計回り	
51 15	变速部	杵	口径 11.7 身高 4.6 受部 14.1 立上 0.4	深い円錐形と上方へ仄る口縁部とからなる。立ち上がり内面の屈曲は鋭。	底部外側に凹凸へテ開り、そのほかは回転ナガ削。	灰白色	やや軟	良好	反時計回り	緑色の自然釉付着
52 15 9	变速部	杵	口径 12.5 身高 5.5 受部 14.45 立上 0.25	やや深い体部に、次第に立ち上がりをもつ。立ち上がり内面には弱い屈曲がある。	底部外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削。	(外)明オリ ブル灰色 (内)灰白色	難良	良好	反時計回り	
53 15 9	变速部	杵	口径 11.2 身高 4.3 受部 14.0 立上 0.45	深い円錐形の体部に窓い立ち上がりが行く。立ち上がり内面は内側しており、やや斜手で、内面の屈曲はない。	底部外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削。	淡黄色	粗、径2mm未満の砂粒含む (外)良好 (内)やや 軟質	均計出力	底部外 面に青 色釉付 着	
54 15 9	变速部	杵	口径 11.95 身高 3.4 受部 9.8 立上 0.3	深い圓錐形の体部に窓い立ち上がりが行く。立ち上がり内面には弱い屈曲がある。	底部外側には回転ヘラ削りがなく、不整方向内のナギによって削ぎきれっていない。その他の回転ナガ削。底部内面は回転ナガ削後、一定方向ナガ。	灰色	粗、径2mm未満の砂粒含む 中に含む	良好	不明	「×」 のへう 記号
55 15 9	变速部	杵	口径 12.2 身高 3.1	口径に比して高め。立ち上がりが低い。立ち上がり内面の屈曲は弱い。	底部外側は回転ヘラ削り、そのほかは回転ナガ削によって削ぎきれっている。外側の一部に板ナガ状の痕跡。底部内面に回転ナガ削後の一方向ナガ。	灰色	難良	良好	反時計回り	
56 15 9	变速部	杵	口径 11.85 身高 3.9 受部 13.3 立上 0.35	深い圓錐形の体部に、非常に窓い立ち上がりをもつ。立ち上がり内面はやや強く屈曲している。	底部外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削。底部内面は回転ナガ削後、一定方向ナガ。底部外側のヘラ削りが弱いため、ヘラ切りの痕跡が観察できる。	(外)灰青褐色 灰白色 (内)赤灰色	難良	良好	均計回り	
57 15 9	变速部	杵	口径 12.06 身高 3.9 受部 13.7 立上 0.45	底面に平坦面をもつ。底部内面はナガにより凹内が弱い。立ち上がりは極端に高く、短い。立ち上がり内面の屈曲は全くない。	底部外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削。	(外)暗赤灰 (内)灰白色	粗、径1mm未満の砂粒やや 多く含む	良好	均計回り	

番号	部位	塔體	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
58 15 9	後退部	杯	口径 9.75 高さ 3.5 受部 12.1 立上 0.3	低い体部に、短い立ち上がりが付く。立ち上がりの内部は顯著で、内部の斜面も無い。	底部外側はへきり切り後の灰白色 表面はなく、その底辺部に同軸ヘラ削りがみられる。その後は回転ナダ削り。底辺内側は回転ナダ削り、一定方向ナダ削り。	灰白色 光、径2mm未満の砂粒わずかに含む	良好	反時計回り		
59 15 9	後退部	杯	口径 11.7 高さ 3.2 受部 13.0 立上 0.4	杯部には明瞭な平坦面があり、立ち上がりは僅く内傾している。立ち上がりの内部は全くない。	底部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ削り。	(外)灰白色 (内)灰白色 密、表面砂粒や多い。	良好	時計回り		
60 15 9	杯	口径 13.0 高さ 2.7 受部 13.5 立上 0.6	非常に低い体部に、短く内傾するU縁部がつく。 立ち上がりは基部が大きく、先端ほど尖っている。	底部外側には回転ヘラ削りがなく、へきり切り後の荒度はみられない。そのほかは回転ナダ削り。	黄灰色 精良	良好	不明			
61 15 9	後退部	杯	口径 10.7 高さ 4.4	外側へとすすぐ開口縫をもつ。底部は中央が尖り気味で、平底ではなく。	底部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ削り。	(外)灰白色 (内)灰白色 精良	良好	時計回り		
62 15 9	用部	杯	口径 14.5 高さ 4.4 脚跡 19.0	平底にまっすぐ開口縫をもつ。貼り付け両面は斯干台形を示している。	完全回転ナダ。高台の内側に回転ヘラ削りの痕跡。	黄灰色 精良	良好	不明		
63 15	周縁	杯	口径 13.8	縁やかに立ち上がる口縫をもつ。	全体に回転ナダ。	(外)明オリーブ灰色 (内)灰白色 精良	良好	不明		
64 16 10	高杯 蓋	口径 13.5 高さ 4.25	丸い大円形に低いみみが付く。口縫は丸くおさめる。	大円部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ削りが施されている。	灰色 吉、径5mmまでの砂粒がやや多く含まれる。	良好	反時計回り	天井部 外面に「」字のヘラ記号		
65 16	前進部	高杯 蓋	口径 14.5 高さ 4.7	つまみを付ける蓋で、前面にはやや尖った形をもつ。口縫がめぐる。つまみは端平で中央部には突起な幾をもつ。	大円部外側は回転ヘラ削り、その他は回転ナダ削り。つまみは複合的に回転ヘラ削りの痕跡を有している。	灰白色 吉、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む やや軟質	良好	時計回り		
66 16 10	前進部	高杯 蓋	口径 15.6 高さ 5.3	丸みをもつ体部につまみを付ける。底部にははっきりした縫合もつ。口縫部は内側に凹曲しているが、盖部はごくわずかに外側に凹曲している。つまみは端平で筋的な幾をもつ。	大円部外側は回転ヘラ削りを施しており、その範囲は本輪部内の他の部分よりも大きい。その他の部分は回転ナダ削りで、つまみは複合的に回転ヘラ削りの痕跡を有している。	灰白色 密 良好	良好	時計回り		

番号	持因 國版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
67		実底部	有蓋高 杯	口径 13.3	浅い円形容の体部に低い立ち上 りをもつち脚部に、 おそらく脚部の脚部が仔 く有蓋高脚片である。立 ち上がりは幅く内側し、 受け皿はナデによって内 側へ折れています。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ調 整である。底部外側は回 転ヘラ削り後、脚台の後 合の脚のナデによって一 部分ナデ削かれている。	(外部) 褐色 (内部) 褐色	密	良好	時計回り	
16				受部 15.4							
10				立上 0.55							
68		前底部	有蓋高 杯	口径 12.8	口部に比して短い立ち上 りをもつち脚部と、八の字 字状に開き脚部が上下に 成型する脚部からなる。	全体に回転ナデによって 成型されている。脚部外 側には回転ヘラ削りが 施されているが、脚部接 合部のナデにより大字が 消されている。	灰色	稍良	良好		
16				脚部 13.8							
10											
69		前底部	高杯	脚部 14.5	脚部の大部分を失した高 脚部脚片。2枚の脚部 によって2段構成となり、 それぞれに貝形の 透かしを前後2方向に穿 つ。脚部は水平となり、 端部は上下にやや大きめ に盛りしている。	残存部位は脚部ナデ調 整。脚部内側には強い凹 部ナデによって凹部が生 じている。	褐オリーブ灰 色	密、径1mm未 溝の砂粒や 多く含む	良好	不明	
16											
70		後底部	高杯	脚部 13.6	脚部の大部分を失す る高脚の脚部片。脚部は弱 い2枚の脚部によって2 段の構成になっており、 それそれにスリット状の 透かしを前後2方向に穿 っている。上部は脚部、 下段は八の字状に内広が りとなる。脚部は平にな っており、端部は上下に 成型している。底部外 側は弱い凹部を作り出 している。	脚部外側の脚部部位は回 転ヘラ削り。脚部はない が、脚部も回転ナデ調整。 脚部への接合部はやや強 いナデ。	褐オリーブ灰 色	やや粗、径2 mm未溝の砂粒 わずかに含む	良好	不明	
16											
10											
71		裏底部	無蓋高 杯 - 脚部	口径 6.3	丸く底と極やかに立ち上 りが脚部ととなる。 下部には上下1枚の脚部 で成型された文様部があり、脚部列点文と云々と記 されている。口縁部は丸く おさめる。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他は回転ナデ。 列点文は回転ナデの後に 施されている。	オリーブ灰 色	密	良好	反時計回 り	脚部と 接合部
16											
10											
71		裏底部	高杯	脚部 11.6	八の字状に広がる脚部 で、端部は斜めに抜 削する。弱い2枚の脚部 によって上下に区別され、 丸形透かしを前後2ヶ所に穿つ。	脚部外側は回転ナデ。	褐オリーブ灰 色	稍良	良好	不明	
16											
10											
72		裏底部	高杯	脚部 10.7	八の字状に内広がりで、 端部には下方のみ斜め 抜削がある。	全体に回転ナデ。	褐色	稍良	良好	不明	
16											
73		裏底部	高杯	脚部 11.0	八の字状に内広がりで、 端部は上下にわざか に盛りする。	全体に回転ナデで、脚部 の内外はナデによって抜 削をつくりだしている。	淡白色	密、径1mm未 溝の砂粒をや 多く含む。	良好	不明	
16											
74		裏底部	高杯	脚部 10.4	八の字状に内広がりの脚 部。端部はやや肥厚し、 両面にごくわずかな沈 めぐる。	全体に回転ナデ。	褐オリーブ灰 色	稍良	良好	反時計回 り	
16											

番号 機器 回転部	位置	器種 (cm)	法杖 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
75	後進部	知能部	7.0	体部はその下平に最大径をもつ、頭部はなだらかである。口顎部は頭や顎に外反し、さらに脇部で外側へ折り曲がる。	体部下半は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ削り。	灰色	精良	やや軟質	時計回り	
16			7.1							
10			8.0							
		脇部	8.8							
			最大							
			11.0							
			6.2							
76	後進部	知能部	12.0	平底な尖井部に直立する口顎部が付く。口顎部は外側で背側へ小さく屈曲する。頭部は丸くおさめている。	尖井部外側に向転ヘラ削りではなく、ヘタ切との直角で頭部に振る。その他は回転ナダ削り。	灰色	粗、径3mm未満の砂粒や多く含む	良好	時計回り	
16			10.25							
10			3.1							
			器種							
			6.4							
77	前進部	知能部	口徑	偏平な延舌形の体部から頭部が付く。頭部はナゲびる。	体部下半外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ削り。頭部内側はナゲによる凹凸の調節。	灰色	精良	良好	時計回り	
16			6.0							
10			6.0	体部と口顎部の頭頂部は内外側とも削り。						
			最大							
			10.5							
			地部							
			6.4							
78	後退部	右耳部	口徑	伴走最大径部分が張りだした複数玉形の豊唇に口顎部を丸くおさめる口顎部が付く。頭部は八の字状態で張り出している。頭部に3箇所の凹形透かし。	頭部下部のみ四面へ削り、その後に回転ナダ削りである。頭部内側には、口顎部接合時の餘りの削痕がある。	灰色	精良	良好	時計回り	
16			7.9							
10			14.35							
			膨大							
			16.6							
			膨脹							
			8.4							
			9.0							
79	前進部	頭	12.0	小形で偏頭形の頭部に、細長い突枝で上方へ大きくなっている。頭の上半の車輪部は常に直立する口顎部が付く。頭部は多くの沈線によつて文様化が施され、頭部を主としている。それは模倣していかなかった。口顎部の上半部に沈線や突起で囲まれた3つの文様窓をもち、上からへりによる頭の文鏡文：筆翰文：羽立文となっていた。	春部外側は回転ヘラ削り、その他の回転ナダ削り。頭部内側は回転ナダ削りによって削かれている。	(外側) 青灰色 (頭部)褐色	精良	良好	時計回り	
16			15.3							
11			20.0							
			8.5							
			4.2							
			頭部							
			5.5							
80	後進部	頭	11.0	やや上半より斜め下へ向かう頭孔がある。頭部の脇部は常に大きな明暗部で広がる口顎部が付く。頭部は体部の頭部の広さに比べて狭い。頭部の中央と頭部中心には1条の長い沈線がある。頭部は崩く内側へ傾曲して口顎部へつながり、口顎部はそのまま丸くおさめる。	頭部の脇部外側は静止ヘラ削り、その他の回転ナダ削り。	淡黄色	密、径3mm未満の砂粒含む	良好	不明	
16			10.1							
11			11.8							
			8.0							
			5.5							
			頭部							
			5.75							
81	周囲	頭	最大	二条の長い沈線を体部並大に流れる。口顎部は欠失している。	頭部外側は回転ヘラ削り。その他の回転ナダ削りを施す。	褐色	精良	良好	時計回り	
16			12.8							
11			頭部							
			3.75							

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
82 17 11	前部 平底	口徑 5.6 脚高 13.2 最大 15.1 深さ 3.75	体部は底面が丸く、天井 部がやや折となる構造と頂 きとなる形態。切り外反 する口縁は、体部の基部 の平坦部の端間にむけら れている。通常の輪形と 違うくなるために、粘土 内板の充填は底部内面で 行われている。	上半はタキス形 後、カキメで調整を施す。 上半は回転ヘラ削りによ る成形。	灰白	良	良好	時計回り	天井部 全体に 手のへ タ記号	
83 17	側面部 平底?	口径 6.2	外側へ入る大きさで開く平底の 口縁片。U字縫合部内面には ナットにより、弱い凹部が 生じている。	既存部位は回転ナダ。体 部への接合部はタテナ ダ。	灰色	良	良好	不明		
84 17 11	前部 平底	口径 7.0 脚高 16.9 最大 18.0 深さ 6.2	体部上半に最大径をもつ 丸い体部の、上面の中心 からややずれた位置に口 縁片付く。底盤は平底 に近く、U字縫合部はわずか に外側に開く。	体部下半には回転ヘラ削 り、その他に回転ナダで接 合が施されている。体部 上面には最初的に粘土板 の上の模様が引継ぎに繋が できる。	灰白色	良	良好	時計回り		
85 17	側面部 壺?	口径 14.0	口縁部が直立する。底部 には平底面をもつけ、内 側面が肥厚する。	内外面とも回転ナダ。	灰白色	良	軟質	不明		

第3表 SM1001出土鉄錠計測表

(単位:cm)

番号	形 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	莖部厚	備 考
188	三角形		6.0	2.3	0.2			0.7	0.3
189	三角形			1.5	0.3			0.6	0.25
110	片刃長脚		3.6	1.8	0.4			0.7	0.4
111	不明							0.6	0.45

第4表 SM1001出土耳環計測表

(単位:mm)

番号	材 質	技 法	縦 従	横 従	幅	厚	重さ(g)
112	金網	中空	28.80	31.00	8.25	10.25	
113	鋼地銀	中実	27.80	30.80	7.00	7.10	
114	鋼地銀	中実	21.35	26.10	6.00	6.35	8.19

第5表 SM1001出土切子玉計測表

(単位:mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ(g)	色 調	備 考
115	宝室	29.95	14.10	12.9	8.6	7.4	9.65	3.9	1.9	3.04	水晶質、半透明	片蓋穿孔

第6表 SM1001出土管玉計測表

(単位mm)

番号	上面径	下面径	厚み	上面孔径	下面孔径	重さ(g)	色調	備考	穿孔方法
116	6.95	6.9	21.59	2.3	1.9	1.91	ティールグリーン	第三制	両面穿孔

第7表 SM1001出土トンボ玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
117		9.46	6.15		0.26	ペールイエロー・ターコイズ	-部欠損
118		10.45	8.60		0.33	ペールイエロー・ターコイズ	
119	裏庭部	12.00	10.10		1.56	ペールイエロー・ターコイズ	-部欠損
120	玄室	10.02	8.70	2.4	1.02	ターコイズ	-部欠損

第8表 SM1001出土ガラス玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
122	裏庭部	12.90	9.65	4.0	3.88	カクテスグリーン	
123	裏庭部	12.25	9.50	3.2	3.52	カクテスグリーン	
124	玄室	10.30	6.60	2.4	0.49	ペールサードルグリーン	
125		9.00	6.20	2.8	0.70	オックスフォードブルー	
126	玄室	8.72	6.25	2.2	0.82	ミッドナイトブルー	
127		8.65	5.65	2.0	0.67	オックスフォードブルー	
128	玄室	8.50	6.40	1.8	0.14	ミッドナイトブルー	
129	玄室	8.20	4.30	1.9	0.40	ミッドナイトブルー	
130	玄室	8.12	7.05	1.0	0.71	オックスフォードブルー	
131	玄室	8.00	4.40	1.6	0.41	サファイアブルー	
132		7.95	4.30	2.4	0.46	オックスフォードブルー	
133	玄室	7.90	6.60	2.2	1.62	ミッドナイトブルー	
134	玄室	7.60	4.90	1.8	0.40	ウェストミンスター	
135	玄室	7.00	4.00	1.8	0.29	ディープグリーン	
136	玄室	6.25	3.80	1.6	0.21	オックスフォードブルー	
137	玄室	6.20	2.80	1.8	0.16	ブラックウイング	
138	玄室	6.15	3.70	2.1	0.21	パープリッシュブルー	
139	玄室	3.75	3.10	1.2	0.11	サファイアブルー	
140	玄室	5.50	3.80	1.4	0.15	ブラックウイング	
141		5.40	4.00	1.6	0.17	ピーコックブルー	
142	玄室	5.32	3.75	1.6	0.15	ミッドナイトブルー	
143	玄室	5.30	4.30	1.3	0.18	サファイアブルー	
144		5.00	3.00	1.3	0.11	ブルシアンブルー	
145	玄室	4.97	2.40	1.7	0.08	サファイアブルー	
146	玄室	4.97	3.70	1.8	0.12	ミッドナイトブルー	

番号	出力位置	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
147		4.87	3.40	1.3	0.11	ブラックティング	
148	玄室	4.80	2.40	1.8	0.09	ブラックティング	
149	玄室	4.75	3.30	1.4	0.08	フレンチーターコーズ	
150	玄室	4.75	2.45	1.4	0.09	ウルトラマリン	
151	玄室	4.70	4.22	1.3	0.13	バーブリッシャー	
152	玄室	4.50	2.75	2.0	0.07	シーグリーン	
153		4.50	2.75	1.6	0.09	ブルシャンブルー	
154		4.45	2.10	1.0	0.01	ブルシャンブルー	
155	後退部	4.45	2.70		0.04	オファイブルー	
156	玄室	4.42	3.25	1.1	0.08	インキブルー	
157	玄室	4.42	3.15	1.2	0.09	オックスフォードブルー	
158	玄室	4.42	3.45	1.6	0.07	バーブリッシャー	
159	玄室	4.40	2.40	1.5	0.05	バーブリッシャー	
160	後退部	4.30	2.35	1.2	0.06	バーブリッシャー	
161	玄室	4.27	2.50	1.6	0.05	ビリヤン	
162	玄室	4.27	2.60	1.6	0.07	シーグリーン	
163	玄室	4.22	2.35	1.7	0.06	シーグリーン	
164	玄室	4.20	3.00	1.3	0.08	ターコイズ	
165	玄室	4.20	1.70	1.5	0.05	シーグリーン	
166	玄室	4.20	2.40	1.0	0.05	ティールグリーン	
167	玄室	4.15	1.85	1.8	0.05	シーグリーン	
168	後退部	4.10	2.80	1.6	0.07	ビ・コックブルー	
169	玄室	4.10	3.20	1.3	0.09	オックスフォードブルー	
170	玄室	4.10	2.15	1.4	0.05	ブラックティング	
171	玄室	4.10	2.55		0.03	フレンチーターコーズ	細片
172	玄室	4.10	2.95	1.3	0.07	ブルシャンブルー	
173	玄室	4.02	2.10	1.2	0.04	エメラルドグリーン	
174	玄室	4.02	2.40	1.3	0.06	バーブリッシャー	
175		4.00	2.75	1.2	0.07	バーブリッシャー	
176	玄室	3.97	3.15	1.6	0.07	ブルシャングリーン	
177	玄室	3.95	3.00	1.4	0.07	ビ・コックブルー	
178		3.95	2.80	1.2	0.06	ベニスグリーン	
179		3.95	2.30	1.4	0.04	ターコイズ	
180	玄室	3.90	2.60	1.1	0.06	ミモザ	
181	玄室	3.90	2.10	1.2	0.05	オックスフォードブルー	
182	玄室	3.90	1.95	1.6	0.04	ターコイズグリーン	
183	玄室	3.90	3.10	1.3	0.07	ウルトラマリン	

番号	出土位置	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
184	玄室	3.90	2.10	1.5	0.04	ブライドグーニッシュブルー	
185	玄室	3.90	2.70	1.2	0.06	バーブリッシャブルー	
186	玄室	3.90	2.45	1.2	0.06	オックスフォードブルー	
187	玄室	3.90	2.10	1.1	0.07	ベニスグリーン	
188	玄室	3.90	2.90	1.0	0.08	フレンチテーコーズ	
189	玄室	3.85	2.60	1.2	0.05	グリーンフレア	
190	玄室	3.82	2.35	1.3	0.05	ベニスグリーン	
191	玄室	3.80	2.50	1.0	0.05	シアンブルー	
192	玄室	3.75	2.60	1.3	0.05	ブルシアングリーン	
193	玄室	3.75	2.10	1.5	0.04	インキブルー	
194	玄室	3.75	1.60	1.4	0.03	ベニスグリーン	
195		3.75	1.85	1.3	0.04	ブルシアンブルー	
196		3.70	2.15	1.4	0.03	サファイアブルー	
197	玄室	3.62	2.40	1.1	0.04	ベニスグリーン	
198	玄室	3.60	2.60	1.0	0.05	ナイルブルー	
199	玄室	3.60	1.85	1.0	0.06	ナイルブルー	
200	玄室	3.60	1.90	1.2	0.05	ピーコックブルー	
201	玄室	3.55	2.60	1.1	0.05	オックスフォードブルー	
202		3.55	2.25	1.4	0.02	ブルシアンブルー	
203	玄室	3.55	2.20	1.2	0.03	バーブリッシャブルー	
204	玄室	3.55	2.00	1.0	0.03	バーブリッシャブルー	
205	玄室	3.50	2.70	1.4	0.04	ベニスグリーン	
206	玄室	3.50	3.20	1.5	0.06	サファイアブルー	
207	玄室	3.50	2.40	1.0	0.05	オックスフォードブルー	
208	玄室	3.50	2.30		0.03	フレンチテーコーズ	一部欠損
209	玄室	3.50	2.30	1.2	0.04	バーブリッシャブルー	
210	玄室	3.45	2.10	1.2	0.07	ブラックティング	
211	玄室	3.45	1.65	1.2	0.03	ブルシアングリーン	
212	玄室	3.42	2.30	1.2	0.03	サファイアブルー	
213	玄室	3.40	3.40	1.2	0.05	ブルシアングリーン	
214	玄室	3.40	2.20	1.2	0.06	ブルシアングリーン	
215	玄室	3.40	2.00	1.1	0.03	シーグリーン	
216	玄室	3.40	1.90	1.3	0.03	ウェストミンスター	
217		3.40	1.70	1.3	0.01	ディープグリーン	
218	玄室	3.40	1.80	0.9	0.02	サファイアブルー	
219	玄室	3.40	1.75	1.2	0.03	ドライアズ	
220		3.40	2.30	1.1	0.01	ダークオーブ	

番号	出土位置	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
221	玄室	3.46	1.90	1.4	0.03	ゾーコックブルー	
222	玄室	3.35	3.00	1.2	0.05	サファイアブルー	
223	玄室	3.35	1.90		0.02	サファイアブルー	標次回
224	玄室	3.35	2.45	1.2	0.03	ブルシアンブルー	
225	玄室	3.35	1.70	1.2	0.03	オックスフォードブルー	
226	玄室	3.35	2.15	1.5	0.01	ベニスグリーン	
227	玄室	3.35	2.50	1.6	0.06	ブルシアンブルー	
228	玄室	3.32	2.90	1.2	0.04	ベニスグリーン	
229	玄室	3.30	2.35	1.2	0.03	ブルシアングリーン	
230	玄室	3.30	1.70	1.6	0.03	バーブリッシュブルー	
231	玄室	3.30	2.50	1.2	0.05	シーグリーン	
232		2.27	1.80	1.2	0.01	ブルシアンブルー	
233		3.27	1.80	1.1	0.03	バーブリッシュブルー	
234		3.25	2.00			マートルグリーン	一部欠損
235	玄室	3.25	2.70	1.2	0.05	ベニスグリーン	
236		3.22	1.80	1.6	0.02	バーブリッシュブルー	
237	玄室	3.20	2.40	1.6	0.04	ブルシアンブルー	
238	玄室	3.17	2.65	0.8	0.04	ブルシアングリーン	
239	玄室	3.15	1.70	1.2	0.02	ブルシアングリーン	
240	玄室	3.15	2.15	1.4	0.01	ウルトラマリン	
241		3.15	2.00	1.6	0.03	ベニスグリーン	
242		3.15	1.70	1.2	0.02	バーブリッシュブルー	
243	玄室	3.10	1.55	1.4	0.02	ブルシアングリーン	
244		3.10	2.00		0.01	サファイアブルー	標次回
245	玄室	3.10	1.70	1.3	0.01	ナイトブルー	
246		3.10	3.20	1.1	0.05	ベニスグリーン	
247	玄室	3.05	2.20	1.0	0.05	バーブリッシュブルー	
248		3.00	2.35	1.0	0.03	シアンブルー	
249	玄室	3.00	1.50	1.1	0.02	ブルシアンブルー	
250	玄室	3.00	3.00	1.0	0.05	ゾライアド	
251	玄室	2.95	1.95	1.1	0.02	ウルトラマリン	
252		2.95	2.80	1.0	0.03	ベニスグリーン	
253	玄室	2.90	1.30	1.2	0.01	ブルシアンブルー	
254	玄室	2.90	1.70	1.2	0.01	コバルトブルー	
255	玄室	2.87	1.60	1.2	0.02	ブルシアンブルー	
256	玄室	2.85	2.10	1.2	0.02	バーブリッシュブルー	
257	玄室	2.82	1.75	1.2	0.02	バーブリッシュブルー	

(単位mm)

番号	出土位置	様	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
258	宝室		2.80	1.95	1.0	0.02 オックスフォードブルー	
259	女室		2.75	1.20	1.2	0.01 バ・ブリッジブルー	
260	玄室		2.72	1.45	1.0	0.01 コバルトブルー	
261	宝室		2.20	1.70		0.01 ナイトブルー	細片
262	女室		2.20	1.70	1.0	0.01 ブルシアンブルー	
263	玄室		2.70	1.90		0.02 バーブリッジブルー	一部欠損
264	玄室		2.65	2.85	1.0	0.01 ナイルブルー	一部欠損
265	女室		2.65	2.30	0.9	0.02 サファイアブルー	
266	宝室		2.60	1.60	1.3	0.01 ブルシアンブルー	
267			2.60	1.70	1.0	0.01 ウエストミンスター	
268	女室		2.60	1.90	1.1	0.01 ピ・コックブルー	
269	宝室		2.55	1.10	1.1	0.01 バーブリッジブルー	
270	玄室		2.52	2.00	1.0	0.02 ミッドナイトブルー	
271	玄室		2.50	2.45	1.1	0.02 バーブリッジブルー	
272	宝室		2.50	1.60	1.2	0.01 バーブリッジブルー	
273	女室		2.50	1.50	1.0	0.01 ピ・コックブルー	
274	宝室		2.40	1.20	1.0	0.01 サファイアブルー	
275	玄室		2.30	1.85	1.1	0.02 オックスフォードブルー	
276			2.30	1.25	1.0	0.01 ピ・コックグリーン	
277			2.20	2.00	0.7	0.01 ピ・コックブルー	
278	女室		2.20	1.40	1.0	0.01 サファイアブルー	
279	宝室		2.20	2.00	1.0	0.01 コバルトブルー	
280	女室		2.10	1.10	0.8	0.01 サファイアブルー	
281	玄室		2.10	2.20	0.8	0.01 オックスフォードブルー	
282	玄室		2.00	1.20	0.8	0.01 サファイアブルー	
283	玄室		2.00	1.00	1.0	0.01 ターコーズ	
284	宝室		2.00	1.00	0.8	0.01 サファイアブルー	一部欠損
285	女室		1.80	2.05		0.01 ピ・コックブルー	
286				2.75	0.6	ブルシアンブルー	細片
287	女室		1.00	2.70		0.01 ウエストミンスター	
288				1.00		ペニスグリーン	細片
289				1.00		0.01 サファイアブルー	細片
290				1.30		バ・ブリッジブルー	細片
291	玄室			1.20		0.01 サファイアブルー	細片

第9表 SM1001出土土玉計測表

番号	出土位置	径 厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
292	玉室	8.50	6.35	0.18	黒色	一部欠損
293	文室	8.22	6.20	1.4	0.44	黒褐色
294	玄光	8.15	6.50	1.6	0.35	黒褐色
295	玉室	8.12	5.76	1.6	0.35	黒色
296	文室	8.00	6.25	1.3	0.40	黒色
297	玄光	8.00	5.75		0.19	黒褐色
298	玉室	8.00	6.00	1.4	0.40	黒褐色
299	玄光	8.00	5.60	1.5	0.46	黒褐色
300	玄光	7.95	6.85	1.8	0.41	黒褐色
301	玉室	7.85	7.20		0.27	黒褐色
302	玉室	7.80	5.40	1.6	0.33	黒褐色
303	玉室	7.75	6.10	1.6	0.40	黒褐色
304	玄室	7.75	4.70		0.14	黒色
305		7.65	5.00	1.8	0.31	赤褐色
306	玉室	7.49	7.00	1.8	0.45	赤褐色
307	文室	7.57	5.20	1.6	0.30	赤褐色
308		7.50	6.00	1.6	0.34	黒色
309	玉室	7.70	5.50	1.7	0.34	赤褐色
310	玄光	7.40	4.60	1.7	0.28	赤褐色
311	玉室	7.40	5.30	1.7	0.33	赤褐色
312		7.10	5.00	1.5	0.29	黒色
313	玉室	7.00	5.75	1.6	0.28	赤褐色
314	玉室	6.75	5.50	2.0	0.21	黒褐色
315	文室	6.70	5.30	1.5	0.25	赤褐色
316	玉室	6.70	5.00	1.1	0.25	黒褐色
317	文室	6.63	4.90		0.11	黒色
318		6.60	6.00	1.5	0.28	赤褐色
319	玄室	6.60	5.00	1.4	0.23	黒褐色
320	玉室	6.40	5.50	1.4	0.20	黒褐色
321		6.15	5.50	1.4	0.17	黒色
322	玉室	6.00	5.50	1.3	0.20	黒褐色
323	文室	5.90	5.30		0.11	黒褐色

第10表 SM1001周辺出土土器観察表

番号 種類 回数	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
324 25 11	女室	白磁碗	口径 19.0	外側へまっすぐ開き、内側は外側を折り曲げ。底部は丸くおさめる。	底座範囲は全面に磨かれており、内側は平均して0.3mmで、口縁部外側では0.7mmを測る。	灰白色	精良	良好		
325 25 11	後壁部	瓦器模	口径 14.8	西い磁器の形態で、腰から広がりえくおさまる口縁をもつ。裏面には低い脚取り付けの高台がつく。	全体にナメ調整の跡、体下半分の外側には弱いユビオサエがある。内側は施旋状の捺文が施されている。	灰白色	精良	良好	反時計回り	
326 26	F-4	杯	口径 12.0	口縁部のみの杯蓋片。唇高がや高くなると考えられる。	天井部各面に凹部へラ折り、その奥は回転ナダ。	灰白色	普通	良好	時計回り	
327 26	横外	杯蓋	口径 13.3 底 4.4	丸い天井部と直立し、丸い納めも(1種部)となり、天井部の平面度が小さくなる。	天井部外側にやや丁寧な回転ヘラ削りを施す。天井部アドによって調整されている。天井部内面には凹部へラ折り、一定方向ナダがあり。	(外)灰白色 (内)灰褐色・灰白	やや粗	良好	反時計回り	
328 26	I-3	杯	口径 14.4	扁平な器形の杯蓋破片。外縁は口縁部を除き、四輪へラ削り。その他の部位は回転ナダ。	(外)灰黄色 (内)灰白色	普通、砂粒を含む	良好	反時計回り		
329 26	横外	杯蓋	口径 12.5 唇高 4.7	口縁に比してやや標高が高く、天井部は半球底をもつ。唇部は丸みをもち、口縁底部は丸くおさめる。	天井部外側は凹部へラ削り、その他の部位は回転ナダによる凹凸が大きい。内面には粘土紐の突き上げ痕が観察できる。	灰白色	普通、0.5mm未満の砂粒が少し含む。	良好	反時計回り	
330 26	D-3	杯蓋	口径 14.8	半丸い天井部をもつと思われる杯蓋片。口縁底部はやや丸い(底)におさめられている。	天井部外側は凹部へラ削り、その他の部位は回転ナダ。	明オリーブ灰 色	精良	良好	反時計回り	
331 26	横天井	杯	口径 12.5 受部 14.7 立上 9.5	丸い立ち上がりをもつ杯受け部残片。立ち上がりの基部は厚く、内面に墨書きはない。	底部外側は凹部へラ削り、その他の部位は回転ナダ。	(外)褐色 (内)灰褐色	普通	良好	反時計回り	
332 26	F-3	杯	口径 11.3 唇高 3.4 受部 13.8 立上 6.7	底部は径6cmの半球底をもつ。口縁の立ち上がりは上方へ急角度で反っており、内面にやや深い屈曲がある。	底部外側は凹部へラ削り、その他の部位は回転ナダで調整されている。	灰白色	普通、表面砂粒 やや多い。	良好	時計回り	
333 26	I-3	杯	口径 14.0	口縁底部を欠く杯身片。口縁内面に凹曲はみられない。	底部内面は凹部へラ削り。底部は凹部へラ削り。	(外)オリーブ 灰色 (内)深オリーブ 灰色	普通、0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む。	良好	不明	
334 26	I-3 J-3	杯	口径 13.0 受部 15.6 立上 6.4	やや深い磁器の器形に内側する深い口縁がつく。内面に凹曲がある。底部に回転ナダによる凹凸が多い。	底部外側は凹部へラ削り。そのほかは回転ナダ。	オリーブ灰 色	普通、0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む。	良好	時計回り	

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
335 26	I-3	杯	11径 12.8 安部 11.8 立上 0.75	浅い皿形の器形に直立する 11縁起がつく。立ち上がり がりの基部はやや厚い。	残存部位は回転ナガ。	灰白色	赤、径0.5mm未 溝の砂粒わずかに含む	良好	不明	
336 26	F-4	高杯		高杯形部と脚部との隙 部分、脚部は逆鉤でござ く底盤的に開くものがあ くと考えられる。	脚部外側は回転ヘラ削 り、その他は回転ナガ調 整。軽底盤内面は回転ナ グ級、一定方向ナグ。	黄灰色	赤	良好	時計回り	
337 26	F-6	舟付盆	最大 12.7 脚端 12.2	下方への次第に開く底 盤片、半位に4方向の穿 孔がある。下方に斜傾な 様が2条ある。	残存部位は回転ナグ。体 部との接合部分にヘラ状 工具による接合跡。	オリーブ色	赤、径0.5mm未 溝の砂粒わずかに 含む	良好	反時計回 り	
338 26	舟形西 前	口盤	19	11縁起部を下に向直 し、上方を丸くするも の。頭の口盤部突片、11縁起 内面には溝やかくわき がある。	残存部位は回転ナグ調 整。	(赤)褐灰色 (内)灰白色・ オリーブ色	赤	良好	八時	
339 26	F-3 (腰丘 両凹)	口盤	22.35	山根がまっすぐ届く。口 縁端部の外側は點突等を 折り詰めて厚く作られて いる。	口縁端周辺は全体に回転 ナグによって調整されて いる。脚部と口縁部の機 刀の内面には回転ナグ調 整形が行なわれている。	褐灰	粗良	良好	不明	
340 26	古墳の 間	口盤	25.5	舟形的に外側へ開く口盤 部をもつ隻の11縁の板 片。11縁部外側は極度に 詰まし、さらにその下面 を折衷く角形に詰まして いる。内面には強いナグ により艶やかな凹凸が生 じている。	体部外側は格子タキ、 内面底は同心円タキによ て輪郭されている。 表面より上は回転ナグ調 整である。	青灰色	粗良	良好	不明	

第11表 ST1001出土須恵器観察表

番号 図版	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
341 20 19	石井内	杯裏	11径 13.3 脚高 4.0	全体に丸みを帯びる器形 で、口縁部はやや尖らし ている。11縁部は丸く おさめている。	天井部外側は回転ヘラ削 りが施されているが、田 盤は削られていらず。ヘ タリ後後の板ナグが觀察 できる。	青灰色	赤、径3mm未 溝の砂粒含 む。	良好	時計回り	
342 38 19	石井内	杯	11径 10.0 脚高 4.2 安部 14.5 立上 0.45	浅い皿形の器形に、窪 内側する立ち上がりが付 く。立ち上がり内面には 弱い鉛錆がみられる。	底部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナグ調 整。	青灰色	赤、径2mm未 溝の砂粒含 む。	良好	反時計回 り	
343 39 19	石室内	杯裏	口盤 13.1 脚高 3.9	丸みをもつ船形で、口盤 部はやや内側する。11縁 部はごくわずかに外反 し、P角くおさめている。	天井部外側は回転ヘラ削 り、その他の回転ナグ調 整。	灰色	赤、径3mm未 溝の砂粒含 む。	良好	時計回り	

番号 井戸 回数	位置	標高	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
344	石室内	井	口径 11.9 深さ 3.9 受部 14.6 立上 0.85	浅い弧形の体部に内傾する19個部をもつ。立ち↑ がり部分の内側へ著しく内傾し、やや上方へ反る。 内面にはやや弱い溝筋がある。	底部外縁は脚長へテ前りが現れるが、中央部分は削られていないためにヘラ切られた後の形状の感覚が観察できる。その部位は既にナメ剥離。	青灰色	赤、径3mm未 溝の砂粒含 む。	良好	時計回り	
345	石室内	接底	口径 5.3 深さ 19.9 最大 15.9 底部 4.85	扁平な球形の体部の側面部に口縫部を複合し、さらにその両側に丹手を2個もつけている。口縫部は厚手で、底面はよくおさめている。丹手は體として完結しない形態化の進んだ形態である。	体部外縁は一つの窓が開き、オーリー灰褐色 底カキ又は、もう一方の窓が脚部へテ所によって調整されている。体部内面と口縫部の外縁は既にヘラ前りによって削除されている。丹手カキメ第の窓の内面中央部には成形時最終的に東を留めた痕跡が明顯に残っている。	赤、径2mm未 溝の砂粒少し 含む	良好	反時計回 り		
346	石室内	瓶底直	口径 7.0 高さ 7.9 最大 11.05 底部 7.4	上半より最大径をもつ体部に、矧く直立する11個部が付く。	体部下半外縁は既にヘラ前り、その船は脚長ナメ剥離。工程ごとの調整を示すために、底盤の凹凸にヘラ前りが切り落している。	灰白色	やや粗、径3 mm溝の砂粒 やや多く含 む。	やや吸収	時計回り	

第12表 ST1001出土五類計測表

(単位mm)

番号	種別	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
347	ガラス玉	2.70	1.50	0.5	0.01	サファイアブルー	北側小口
348	ガラス玉	4.27	3.20	0.9	0.05	サルファイエロー	北側小口
349	ガラス玉	2.40	1.65	0.6	0.01	サファイアブルー	北側小口
350	ガラス玉	2.40	1.30	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
351	ガラス玉	2.20	1.45	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
352	ガラス玉	2.70	1.45	1.3	0.01	サファイアブルー	北側小口
353	ガラス玉	2.65	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
354	ガラス玉	4.00	2.20	1.5	0.05	ディープグリーン	北側小口
355	ガラス玉	2.30	1.40	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
356	ガラス玉	2.10	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
357	ガラス玉	2.40	1.80	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
358	ガラス玉	2.20	1.35	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
359	ガラス玉	2.60	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
360	ガラス玉	2.45	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
361	ガラス玉	2.25	1.10	0.8	0.01	サファイアブルー	北側小口
362	ガラス玉	2.30	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
363	ガラス玉	2.90	1.15	1.3	0.01	サファイアブルー	北側小口

番号	種別	径	厚み	孔径	重さ(g)	色調	備考
364	ガラス玉	2.25	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
364	ガラス玉	2.20	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
365	ガラス玉	2.20	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
366	ガラス玉	2.45	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
367	ガラス玉	2.60	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
368	ガラス玉	2.40	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
369	ガラス玉	2.45	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
370	ガラス玉	2.45	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
371	ガラス玉	2.70	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
372	ガラス玉	2.57	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
373	ガラス玉	2.50	1.20	1.0	0.01	サファイアブルー	
374	ガラス玉	2.05	1.60	0.7	0.01	サファイアブルー	北側小口
375	ガラス玉	2.45	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
376	ガラス玉	2.25	1.15	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
377	ガラス玉	2.55	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	北側小口
378	ガラス玉	2.70	1.30	1.1	0.01	サファイアブルー	北側小口
379	ガラス玉	2.50	1.40	1.0	0.01	サファイアブルー	北側小口
380	ガラス玉	2.00	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
381	ガラス玉	2.00	2.30	0.7	0.02	サファイアブルー	
382	ガラス玉	3.20	2.20	0.9	0.03	シトロンイエロー	
383	ガラス玉	2.10	1.30	0.7	0.02	サファイアブルー	
384	ガラス玉	2.20	1.10	0.9	0.01	サファイアブルー	
385	ガラス玉	2.15	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー	
386	ガラス玉	2.52	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
387	ガラス玉	2.40	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
388	ガラス玉	2.30	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
389	ガラス玉	2.30	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
390	ガラス玉	2.40	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
391	ガラス玉	2.22	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
392	ガラス玉	2.20	1.70	1.0	0.01	サファイアブルー	
393	ガラス玉	2.55	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
394	ガラス玉	2.50	1.05	1.1	0.01	サファイアブルー	
395	ガラス玉	2.00	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
396	ガラス玉	2.25	1.40	0.7	0.01	サファイアブルー	
397	ガラス玉	2.40	1.75	0.9	0.01	サファイアブルー	
398	ガラス玉	2.30	1.50	1.1	0.01	サファイアブルー	

番号	種別	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
399	ガラス玉	2.10	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
400	ガラス玉	1.90	1.50	0.8	0.01	サファイアブルー	
401	ガラス玉	2.30	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
402	ガラス玉	2.30	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
403	ガラス玉	2.25	1.40	0.9	0.01	サファイアブルー	
404	ガラス玉	2.00	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
405	ガラス玉	2.20	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	
406	ガラス玉	2.20	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー	
407	ガラス玉	1.90	1.40	0.8	0.01	サファイアブルー	
408	ガラス玉	2.00	1.00	0.7	0.01	サファイアブルー	
409	ガラス玉	2.30	1.20	0.8	0.01	サファイアブルー	
410	ガラス玉	2.20	1.60	0.8	0.01	サファイアブルー	
411	ガラス玉	3.50	1.60	1.1	0.03	オパールグリーン	
412	ガラス玉	2.20	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
413	ガラス玉	2.55	1.26	0.9	0.01	サファイアブルー	
414	ガラス玉	2.40	1.00	1.1	0.01	サファイアブルー	
415	ガラス玉	3.85	2.45	1.2	0.05	ペールイエロー	
416	ガラス玉	2.20	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー	
417	ガラス玉	2.60	1.20	1.1	0.01	サファイアブルー	
418	ガラス玉	2.70	1.40	1.2	0.02	サファイアブルー	
419	ガラス玉	2.60	1.60	0.9	0.02	サファイアブルー	
420	ガラス玉	2.00	1.15	0.9	0.01	サファイアブルー	
421	ガラス玉	2.30	1.20	1.0	0.01	サファイアブルー	
422	ガラス玉	2.40	1.55	1.0	0.01	サファイアブルー	
423	ガラス玉	2.10	2.00	0.7	0.02	サファイアブルー	
424	ガラス玉	2.30	1.90	0.9	0.01	サファイアブルー	
425	ガラス玉	2.15	1.50	0.9	0.01	サファイアブルー	
426	ガラス玉	2.62	1.50	1.1	0.01	サファイアブルー	
427	ガラス玉	2.40	1.15	0.7	0.01	サファイアブルー	
428	ガラス玉	2.15	1.10	0.9	0.01	サファイアブルー	
429	ガラス玉	2.35	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
430	ガラス玉	2.25	1.00	0.9	0.01	サファイアブルー	
431	ガラス玉	2.47	1.15	1.0	0.01	サファイアブルー	
432	ガラス玉	2.10	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	
433	ガラス玉	2.20	0.85	1.3	0.01	サファイアブルー	
434	ガラス玉	2.40	1.50	1.3	0.01	サファイアブルー	
435	ガラス玉	2.25	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー	

(単位mm)

番号	種別	径	厚み	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
436	ガラス玉		2.15	1.30	0.9	0.01	サファイアブルー
437	ガラス玉		2.10	1.10	0.7	0.01	サファイアブルー
438	ガラス玉		1.95	0.85	0.9	0.01	サファイアブルー
439	ガラス玉		2.40	1.60	0.7	0.01	サファイアブルー
440	ガラス玉		2.40	1.00	0.8	0.01	サファイアブルー
441	ガラス玉		1.90	1.20	0.9	0.01	サファイアブルー
442	ガラス玉		2.25	1.50	0.7	0.01	サファイアブルー
443	ガラス玉		2.15	1.10	1.1	0.01	サファイアブルー
444	ガラス玉		2.25	1.45	0.7	0.01	サファイアブルー
445	ガラス玉		2.00	1.30	0.7	0.01	サファイアブルー
446	土		6.95	4.80	1.1	0.27	黑色

第13表 ST1003出土鉄鎌計測表

(単位cm)

番号	形 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	葉部幅	茎部厚	備 考
447	片刃長鎌			3.9	1.0	0.25		0.5	茎部に木質残存
448	方頭				3.2	0.25			

第14表 ST1005周辺出土須恵器観察表

番号	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色 調	陶 土	焼成	回転台	備 考
449 42	上面	杯	口径 13.6	やや内寄する口縁唇部 片。端部はやや厚手で、 丸くおさめている。	残存部位は四輪ナデ鋼 盤。	(外)灰色、 (内)灰白色	黒、径0.5cm本 調の砂粒やや 多く含む	良好	不明	
450 42 24	上面	杯	口径 12.1 15 4.4	突起の唇部に強く壓 せ付ける口縁がつく。口縁 端部は丸くおさまれ、 内面の唇部はやや陥り、	底部外縁は四 輪ヘタ削り、 そのほかは四 輪ナデ。	灰白色	黒、径2 mm本調の 砂粒やや 多く含む	良好	弱め目 り	
451 42	上面	杯	口径 14.4	腹やかに窪く口縁をもつ。 残存部位は四輪ナデ。	底部外縁は四 輪ヘタ削り、 そのほかは四 輪ナデ。	灰白色	黒、径0.5cm本 調の砂粒わざ かに含む。	良好	不明	
452 42	上面	杯	口径 12.6	口縁が腹やかに外況する	全体に四輪ナデ	オリーブ灰	褐色	良好	不明	
453 42 24	上面	平瓶	口径 5.25 12.6 最大 14.5 腹部 3.9	圓平な球形の体部に外側 へ直線的に狭く口縁部が 付く。口縁部中央の外表面 には弱い波模様があり、 端部はそのまま丸く 封緘する。	体部下半の外表面は四輪ヘ タ削り、その他の部分は四 輪削り。口縁部内面及び 体部下半の内底部には、四 輪ナデによる凸凹が現し る。	灰色	褐色	やや軟質 反時計回 り		

第15表 SM1002出土須恵器観察表

番号 押出 回転	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
451	升蓋	口徑	全体に丸みをもつ圓形 で、口縁部はほど立し ていてる。蓋部は丸くおさ まる。	天井部外周は四輪ヘラ削 り、その他は四輪ナガ削 り。内面は四輪ナガ削。一足 方舟ナガ。口縁部外周に 工具小口によると考えら れる圧痕による文様が全 周する。	灰白色	密、径1mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り		
47			14.2							
28		器底	4.5							
155	杯	口徑	浅く僅かな形態にやや長 めの立ち上がりが付く。 立ち上がりは内側してい るが、途中で上方へ斜く 折折している。	底部外周は四輪ヘラ削 り、その他は四輪ナガ削 り。	灰色	密、径2mm未 溝の砂粒わず かに含む	良好	時計回り		
47			12.2							
28		器高	4.1							
		受部	15.9							
		立上	1.1							
456	杯蓋	口徑	全体に丸みをもつ圓形で 口縁部は外側へ腰やかに 聞く。	大井沿外周は四輪ヘラ削 り、その他は四輪ナガ削 り。大井沿内面に四輪ナ ガ後、一定刃舟ナガ。	灰白色	密	良好	時計回り		
47			15.6							
28		器高	3.9							
457	升	口徑	紙やかなカーブを描く條 部と、内側して立ち上る 口縁とからなる。立上 上がりは基部が厚く、先 端は細く仕上げられてい る。	底部外周は四輪ヘラ削 り、その他は四輪ナガ削 り。	灰白色	密、径2mm未 溝の砂粒ごく わずかに含む	良好	時計回り		
47			12.5							
28		器高	4.2							
		受部	15.0							
		立上	0.7							

第16表 SM1002出土鉄錫計測表

(単位cm)

番号	形 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	備 考
458	三角形		7.9	2.3	0.2			0.6	0.4
459	三角形			2.2	0.25			0.5	0.35
460	三角形			2.15	0.25			0.75	0.2
461	六角形			1.9	0.2			0.35	0.3
462	片刃長頭		2.8	0.9	0.2			0.45	0.4
463	片刃長頭		3	1	0.2			0.45	0.25
464	長頭?							0.5	0.35
465	長頭?							0.4	0.35
466	長頭?							0.45	0.35
467	玉頭		7.7	2.8	0.2			0.55	0.3
468	七頭		8.8	2.4	2	0.25	3.4	0.4	0.35 基部に水質西存
469	方頭			8.8		0.3		0.4	0.4
470	刀頭		9.1	4.9	2.2	0.25	4.2	0.45	0.25

第17表 SM1002出土刀子計測表

(単位cm)

番号	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部幅	茎部厚
471			1.5	0.4	1.1	0.4
472						
473			1.8	0.25		
474	13.5	9.1	1.5	0.35	0.6	0.3

第18表 SM1003出土須恵器観察表

番号	位置	器種	法部(cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
476 52 31	玄室內	杯盤	口径 14.5 脚高 4.5	大井部が丸みをもつ杯蓋 片。口縁内面にはごく弱い紋様が追る。	大井部外縁は回転ヘラ削り、その他の回転ナガ削り。	灰褐色	密、径1.5mm の砂粒やや多く含む。	良好	反時計回り	
477 52 31	玄室內	杯盤	口徑 14.3 脚高 4.8	天井部は全体に磨やかなカーブを描き、口縁はわずかに内傾し、端部は丸くおさめる。	天井部外縁は回転ヘラ削り、その他は回転ナガ削り。天井部内面は回転ナガ削り、一定方向ナガ削り。	灰白色	密、径0.5mm の砂粒やや多く含む。	良好	反時計回り	

第19表 SM1003出土耳環計測表

(単位mm)

番号	材質	技法	縦径	横径	幅	厚	重さ(g)
478	銀めっき	中実	26.10	27.05	5.60	7.80	14.88
479	銅地銀	中實	27.85	30.30	6.90	8.00	19.88
480	銀	中実	24.15	25.20	3.50	4.25	2.26

第20表 SM1003出土勾玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ(g)	色調	備考
481	玄室	29.40	30.61	7.6	10.35	3.6	1.2			5.27	碧母貝、赤瑪瑙	片面穿孔

第21表 SM1003出土切子玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ(g)	色調	備考
482	玄室	22.90	17.15	15.85	10.2	9.85	11.0	4.6	1.9	7.86	水晶製、半透明	片面穿孔

第22表 SM1003出土算盤玉計測表

(単位mm)

番号	出土位置	A	B	C	D	E	F	G	H	重さ(g)	色調	備考
483	玄室	10.00	11.60	7.3	7.2	5.8	4.4	1.7		1.96	水晶製、半透明	片面穿孔

第23表 SM1003出土管玉計測表

(単位:mm)

番号	上面径	下面径	厚み	上面孔径	下面孔径	重さ(g)	色調	備考	穿孔方法
484	8.10	7.95	22.65	2.5	1.5	2.76	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
485	8.20	7.85	20.60	1.5	1.3	1.13	明緑(内)	碧玉製、軟質、 摩滅著しい	片面穿孔
486	7.40	7.3	20.75	2.8	1.2	1.97	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
487	7.25	7.45	19.70	3.5	1.4	2.01	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
488	10.45	10.3	23.25	2.5	1.4	4.35	ボトルグリーン	碧玉製	片面穿孔
489	8.00		16.60			0.50	鮮紅色	碧玉製、軟質、 摩滅著しい	

第24表 SM1003出土土玉計測表

(単位:mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ(g)	色	調	備考
490	9.20	3.80		0.29	黑色		
491	7.60	5.20		0.21	墨褐色		
492	1.32	5.30	1.4	0.31	黒褐色		

第25表 SM1003出土ガラス玉計測表

(単位:mm)

番号	径	厚み	孔径	重さ(g)	色	調	備考
493	4.37	2.80	1.2	0.08	フレンチターコイズ		
494	3.90	2.60	1.0	0.03	シーグリーン		
495	3.30	3.20	1.0	0.04	オパールグリーン		
496	3.10	1.70	1.0	0.04	ブックワーリング		
497	2.90	1.80	1.0	0.02	コバルトブルー		
498	3.60	2.10	1.3	0.03	ナイルブルー		
499	3.80	2.50	1.2	0.06	シーグリーン		
500	3.60	1.80	1.0	0.02	シアンブルー		
501	3.10	2.80	1.2	0.04	タークウォーズグリーン		
502	5.10	4.20	1.4	0.14	フレンチターコイズ		
503	4.65	3.00	1.4	0.10	フレンチターコイズ		
504	3.50	2.40	1.1	0.01	シーグリーン		
505	3.50	2.00	0.8	0.04	シーグリーン		
506	3.32	2.90	1.0	0.05	シーグリーン		
507	2.65	2.50		0.02	ナイルブルー	細片	
508	3.32	1.50	1.2	0.03	フレンチターコイズ		
509	4.87	2.35	1.4	0.09	フレンチターコイズ		
510	4.95	2.85	1.4	0.10	フレンチターコイズ		
511	4.17	3.60	1.2	0.10	マートルグリーン		
512	4.22	2.70	1.2	0.06	シトロンイエロー		

番号	径	厚み	孔径	重さ	色調	備考
513	3.40	2.75	1.0	0.03	シーグリーン	
514	3.85	1.50	1.2	0.03	ジャスバーグリーン	
515	3.15	1.95	1.1	0.03	ナイルブルー	
516	3.25	2.15	1.0	0.03	ピーコックブルー	
517	2.10	1.90	0.9	0.02	シーグリーン	
518	2.85	2.50	1.1	0.03	シーグリーン	
519	3.02	1.85	1.0	0.02	オバルグリーン	
520	3.25	1.75	1.1	0.02	パープリッシュブルー	
521	3.10	2.65	1.0	0.05	ナイルブルー	
522	3.25	2.10	1.0	0.03	オックスフォードブルー	
523	2.70	1.80	1.0	0.01	オックスフォードブルー	
524	3.60	1.60	1.3	0.04	ショーンイエロー	
525	3.35	1.90	1.2	0.04	マンダリンオレンジ	
526	2.70	2.10		0.01	ブルシャンブルー	- 部欠損

第26表 SM1003周辺出土須恵器観察表

番号	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
527 54	H-1- 6-7 I-8	杯	口径 15	丸穴のある口縁部。11 mmの内窓にはやや明瞭 な縦をもつ。	残存部位は回転ナメ調 板。	(外)灰白色 (内)灰白色・ 灰色	灰、径1 mm の砂粒わず かに含む	良好	不明	
528 54	I-6-7 J-7	杯	口径 12.5 受部 15.6 立上 1.0	内側する立ち上がりが付 く舟受け部破片。受け 部はやや高く、全体に薄 く仕上げられており、内 面には弱い凹凸がある。	残存部位は回転ナメ調 板。	灰	稍良	良好	不明	
529 54	I-6-7 J-7	杯	口径 14.2 受部 16.5 立上 0.85	受け部は外側へ折り曲が る舟形をもつ舟受け部 破片。立ち上がりは上方 へ弱く立ち上がり、内面 にはやや無い凹凸があ る。	残存部位は回転ナメ調 板。	(外)灰白色 (内)灰色	灰、径0.5 mm の砂粒わず かに含む	良好	不明	
530 54	H-1- 6-7	杯	口径 12.9 受部 15.4 立上 1.2	内側する立ち上がりをも つ舟受け部破片。受け 部は平底で、立ち上 がりは上方へ弱く内面に弱 い凹凸がある。	残存部位は回転ナメ調 板。	(外)灰白色 (内)灰色	稍良	良好	不明	
531 54	H-7-8	杯	口径 12.4 受部 14.7 立上 0.7	弱い立ち上がりをもつ舟 受け部破片。立ち上 がりは上方へ弱く折り、内 面には弱い凹凸がある。	残存部位は回転ナメ調 板。	灰白色	稍良	良好	不明	2次焼 成による熟成 あり

第27表 ST2001出土土器観察表

番号	押印	位置	器種	法量(cm)	形態上の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
532		土器部	口縁	6.5	直線的に高く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさめられている。	底部外側は回転ヘラ切り後、ナゲ調整。ヨコナゲ調整。	淡黄色	泥、径1mm未満の砂粒ごくわずかに含む	良好	皮付回転	
60		小皿		基部 1.5							
34											
533		土器部	口縁	7.2	直線的に聞く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさめる。	底部はヘラギリ後ナゲ調整。その辺は四転ナゲ。	淡黄色	泥、径0.5mm未満の砂粒わずかに含む	良好		
60		小皿		基部 1.5							
34											
534		土器部	口縁	7.1	直線的に聞く口縁部をもち、底部は欠損。口縁部は丸くおさまる。	残存部位は四転ナゲ。	淡黄色	泥、径1mm未満の砂粒少しがれむ	良好	一	
60		小皿									
34											
535		土器部	口縁	10.4	直立する筒形をもつ。底部はナゲによって外周部にわざかに底部がふくらむ。器底の内面には斜角の瘤状突起が存在する。	外周は板押圧強ナゲ調整。その他はナゲ調整。	褐色	泥、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好		
60		背底部									
34											
536		土器部	口縁	11.5	直立し、口縁部付近でわずかに外反する。端部はナゲによって外周部にわざかに底部がふくらむ。器底の内面には粘土層の瘤状突起が存在する。	外周は板押圧強ナゲ調整。その他はナゲ調整。内底にナゲハケ。	褐色	泥、径1mm未満の砂粒わずかに含む	良好	一	
60		背底部									
34											
537		束腰部	口縁	25.4	直線的に聞くく窪くこね縫の1字縫を行なう。口縁部は外縁が肥厚し、端部は丸くおさまる。	残存部分は四転ナゲ調整。内底は回転ナゲ後斜め方向のナゲ。	灰色	泥、径1mm未満の砂粒少し含む	良好	皮付回転	9
60		こね縫									
34											

第28表 ST2001出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	押印	回版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
540	65	34		凝灰岩	2.55	21.7	1.4	10.3	10.4	12.8	8.2	13.2
541	65			砂岩	5.85	22	1.9	7.1	13	14.7	10.3	14.9
542	65	34		砂岩	6.5	22.6	0.3	9.2	13.2	16.4	13.6	16.35

第29表 ST2001出土火輪計測表

(単位cm)

番号	押印	回版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
543	65	34		砂岩	13.8	11.4	23.5	23.3	3.7	1.8	14.5	5.2	7.8	

第30表 ST2001出土地輪計測表

(単位cm)

番号	押印	回版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
544	65	34		砂岩	21	22.1	22.45	14.8			3.85	0.85
545	65	34		凝灰岩	10.7	21.3	27.85	10.15				
546	65	34		凝灰岩	5.4	20	23.15	11.05				

第31表 ST2002SK01出土空風輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
347	69	37		粗灰岩	0.64					10.6	9.2	12.1
548	69	37		粗灰岩	2.83	2.65	11.65			13.9	17.9	

第32表 ST2002SK01出土水輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
349	69	37		粗灰岩	16		32.2	20	6.3	6.2	21.4	9.8
550	69			粗灰岩	4.7		14.3					

第33表 ST2002SK01出土火輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
553	69	37		粗灰岩	32.84	13.2	29	29.3	7	1.4	18.4	5.5	11.4	2.4
554	69	37		粗灰岩	18.4	14.4		34.5	8.2	5.1	22.1		11	

第34表 ST2002SK01出土土地輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
551	69	37		粗灰岩	11.8	32	32.1	12.6	0.9	1.4		
552	69	37		粗灰岩	3.2	23.1	22.4	9.3	0.9	1.1		

第35表 ST2002出土空風輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
555	70	38		粗灰岩	3.85		1.7	10		13.2	11.6	15.2
556	70	38		砂岩	9.04	25.4	1.7	9	14.7	16.6	12.6	16.7

第36表 ST2002出土火輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
557	70			粗灰岩	5.39	10.15			6.65	4.15	14.9	4.75	4.75	2.4

第37表 ST2002出土水輪計測表

(単位: cm)

番号	押印	図版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	
572	78	41		粗灰岩	12.99		28.4	14.8				15.5	

第38表 ST2002出土基壙計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
560	70	38		凝灰岩	44.4	37.8	52	52.2	21.2	10	12.85	8.5

第39表 ST2002出土五輪板磚計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
561	72	38		砂岩	12.8	20	19.5	42.7	10.1	18.7	41.7	9	10.5	13	7.9
562	72	38		砂岩	19.7	17.8	20.8	48.7	13.3	16.8	44	8.6	6.2		
563	72			砂岩	9.4	16.3	16.3		16.3					12.9	15.5

第40表 ST2003出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
565	75	41		凝灰岩	3		1.9	10.05	10.1	11.1	11.5	14.35
566	75	41		砂岩	5.8	23.2	1.4	8.8	13		10.5	14.6
567	75	41		砂岩	10.6	27.8	1.9	10.9	16.65	16.8	12.3	16.65

第41表 ST2003出土火輪計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
568	75	41		砂岩	8.44	8	22.2	21.5	3.6	18.5	12.7	3.8		

第42表 ST2004出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
569	78			砂岩	4.67		0.95	9.3			12.96	17.85
570	78	41		砂岩	9.05		1.2	9	14.8	17.1	12.7	16.8
571	78	41		砂岩	12.8	30	1.9	11.2	16.9	19.55	14.4	19.6

第43表 ST2004出土水輪計測表

(単位cm)

番号	押國	國版	出土位置	材質	重量(kg)	A	B	C	D	E	F	G
582	80	43		砂岩	20	12	27	10.7	0.55	0.2	20.7	10
583	80	G-9	凝灰岩	16.5		30.15						

第44表 中世墓周辺出土土器観察表

番号 西暦 西暦	位置	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調査の特徴	色 調	胎土	焼成	回転台	備考
573 75	G-9	杯	口径 13.15	口部に丸みをもつ口縁部 片。底部はやや尖り気味 であるが、丸くおさめて いる。	底部外側は直輪へテ削 り、その他は回転ナガ削 り。	灰色	灰、径3mm未 満の砂粒含む	良好	薄け回り	
574 75 41	G-9	杯	口径 12.8 基高 4.8 受部 14.8 立上 1.2	平面な底面に内傾する立ち上がりが付く。立ち上 がりはこの邊溝の上部に 物としては高く、古い機 械で磨ぐ。内面の底面 はやや強い。	底部外側は直輪へテ削 り、その他は回転ナガ削 り。	灰白色	灰、径1mm未 満の砂粒含む	良好	反時計回 り	
575 75 41	F-9	杯	口径 12.7 基高 3.6 受部 16.4 立上 0.6	基部に比してやや口徑の 大きい器形に、聞く内傾 する立ち上がりが付く。 立ち上がり内面にはやは く凹凸がある。口縁部 部は突起気味だが、外輪 にはわずかな半球部があ る。	底部外側は直輪へテ削 り、その他の回転ナガ削 り。	灰色	灰、径2mm未 満の砂粒含む	良好	反時計回 り	
576 75	E-10	杯	口径 12.8 基高 4.25 受部 15.0 立上 0.7	高い頂部の外輪に窓はない 立ち上がりが付く。立ち上 がりは内傾し、高く仕上 げられている。内面の振 曲はない。	底部外側は直輪へテ削 り、その他は回転ナガ削 り。	灰色	灰、径1mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	薄け回り	
577 75	G-9	杯	口径 13.3 基高 10.0 受部 0.45	短い立ち上がりをもつ杯 受け張破れ。受け張部 は上方へ反ぞっている。立 上がり内面は中や強く 凹曲している。	既存部位は回転ナガ削 り。	褐色	灰、径0.5mm未 満の砂粒やや 多く含む	良好	不明	外面に 自然釉 付着。
578 75 +11	B-10	碗	口径 10.8	あっ状に聞く造のう 器。底部の内張となる1 側の突縁以上の口縁部破 片。裏やかに上方へ立ち 上がるが、底部付近でわ ずかに外反する。	既存部位は回転ナガ削 り。	(外)灰色 (内)朱灰色	灰、径0.5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
579 75 +11	B-10	碗	口径 20.5	外側へ直線的に窓なく窓なし 輪郭。外輪には奥2cm の広い突唇が残る。	既存部位は回転ナガ削 り。	(外)灰白色 (内)朱褐色	褐黄	良好	不明	
580 75	F-10	碗	口径 25.0	底やかに外側へ聞く窓の 口縁部片。外輪に奥1.5 cm、高5.0cmの突唇を残 す。	既存部位は回転ナガ削 り。	灰	灰、径5mm未 満の砂粒わざ かに含む	良好	不明	
581 75 41	土器質 青磁器	11盆	直立する瓶形をもつ。口 縁はわざかに内傾し、底 部は丸くおさまる。	外輪はタケハケ、内面は タケハケ後ナビナビ。口 縁部内外面はユビカサ ズ。	よい褐色	やや粗、径1 mm未満の砂粒 非常に多く含む	良好			
582 75 41	土器質 青磁器	口径 6.6	直立する瓶形をもつ。器 底及び口縁の器底は7mm と両面である。	外輪はタケハケ、内面は タケハケ。1箇密窓内 室にユビカサズ。	褐色	やや粗、径1 mm未満の砂粒 非常に多く含む	良好	—		

番号 神國 圓版	位置	器種	法量 (kg)	形態上の特徴	調査の特徴	色調	胎土	焼成	回転台	備考
583 75 41	B-10	土瓶 鉢	30.6	大きさ同じく複数のU字縁板片。口縁部は内外面とも7枚で往々上昇した。内側底はわずかにつまみ出されている。	内面は黒引目、ナメ無し。外口は口縁周辺は強烈なコリナデ、全体はユビサエ開拓。	にぼい黄褐色	陶瓦	良好	—	おろし 目は6 ~7条 /5cm

第45表 ST2001周辺出土空風輪計測表

(単位cm)

番号	神國	圓版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
584	80		G-9	砂岩	4.4			7.35		14.8	12.7	15.15
585	80	43	G-8	砂岩	5.79	26.5	1.0	8.1	11.2	15.1	11.5	13
586	80			砂岩	7.18	24.8	1.8	9.4	14.8	15.8	10.8	15.8
587	80		G-8	砂岩	8.0	23.9	1.7	9.3	1.7	17.15	11.85	17.55
588	80	43	G-9	砂岩	9.4	24.0	1.3	8.9	13.9	18.4	15.3	17.6
589	80			砂岩	10.5	25.7		10.2		18.0	13.8	18.5
590	80	43	G-9	砂岩	15.2	31.5	1.4	10.9	19.6	20.2	13.8	20.6

第46表 ST2001周辺出土火輪計測表

(単位cm)

番号	神國	圓版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
591	80	43	G-8	粗灰岩	15.7	13.9	32.13	33.35	6.15	3.65	22.7	8.1	9.3	2.5

第47表 ST2001周辺出土水輪計測表

(単位cm)

番号	挿因	圓版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
594	81		G-8	砂岩	17.25	11.25	25.2	11.5	0.5	0.75	26.2	10.6
595	81		G-8-9	砂岩	18.6	12.2	24.9	10.4		0.3	20.3	10.0
596	81	43	G-9	砂岩	16.0	10.9	25.55	10.3		0.2	18.85	10.0
597	81		G-9	砂岩	18.9	10.2	27.0	11.2	0.35	0.2	18.9	10.8
598	81	43	G-9	砂岩	18.8	11.2	26.7	10.5	0.25	0.35	26.7	11.0

第48表 ST2002周辺出土土地輪計測表

(単位cm)

番号	挿因	圓版	出土位置	材質	重量 (kg)	A	B	C	D	E	F	G
599	81	43		砂岩	27.5	24.85	25	20.4			5.0	0.8
600	81	43		砂岩	25.2		24.5	21.7			6.0	1.2
601	81			砂岩	30.2	22	23.1	23.5				

第49表 ST2001~2004周辺出土空風輪計測表

(単位:cm)

番号	捕獲	回版	出土位置	材質	重量 (kg)	(単位:cm)						
						A	B	C	D	E	F	G
602	87	44	D-10	砂岩	10.35			9.8	15.0	17.6	14.1	18.3

第50表 ST2001~2004周辺出土水輪計測表

(単位:cm)

番号	捕獲	回版	出土位置	材質	重量 (kg)	(単位:cm)						
						A	B	C	D	E	F	G
603	82			凝灰岩	14.2		28.8	15.3	1.4	0	20.9	12.5
604	82	44	D-10	砂岩	33.6	13.6	30.0	13.6	0.6	0.23	26.0	13.0
605	82			砂岩	37.2	21.85	31.8	17.7			23.2	15.0

第51表 ST2001~2004周辺出土火輪計測表

(単位:cm)

番号	捕獲	回版	出土位置	材質	重量 (kg)	(単位:cm)						
						A	B	C	D	E	F	G
606	82	44		凝灰岩	9.24	10.5	35.5	34.0			18.5	4.5
607	82			凝灰岩	28.8		42.0	39.0			24.3	8.8

第52表 ST2001~2004周辺出土地輪計測表

(単位:cm)

番号	捕獲	回版	出土位置	材質	重量 (kg)	(単位:cm)						
						A	B	C	D	E	F	G
608	83	44		凝灰岩								

第53表 ST2001~2004周辺出土五輪板碑計測表

(単位:cm)

番号	捕獲	回版	出土位置	材質	重量 (kg)	(単位:cm)								
						A	B	C	D	E	F	G	H	I
609	83	44		砂岩	17.0	19.3	8.6	33.0	11.4	18.1	43.9	11.0	7.8	14.3
610	83		C-11	砂岩	19.4	19.3	20.5	51.6	11.6	18.4	5.1	10.5	10.3	14.2
611	83	44	C-11	砂岩	17.5	20.1	16.3	51.1	11.3	18.2	51.1	10.8	9.5	13.6

写 真 図 版



調査前風景（北より）



調査前風景（西より）

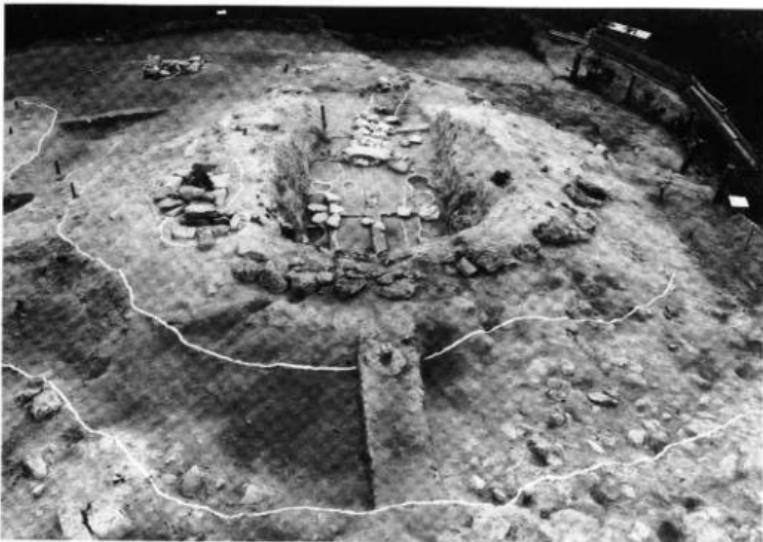


調査区全景

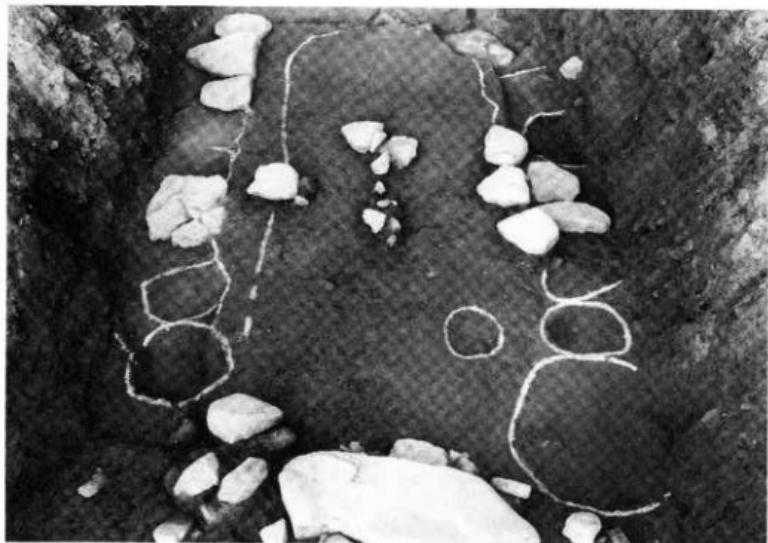


尾根中央部の造構

図版 3



SM1001全景（北より）



SM1001横穴式石室

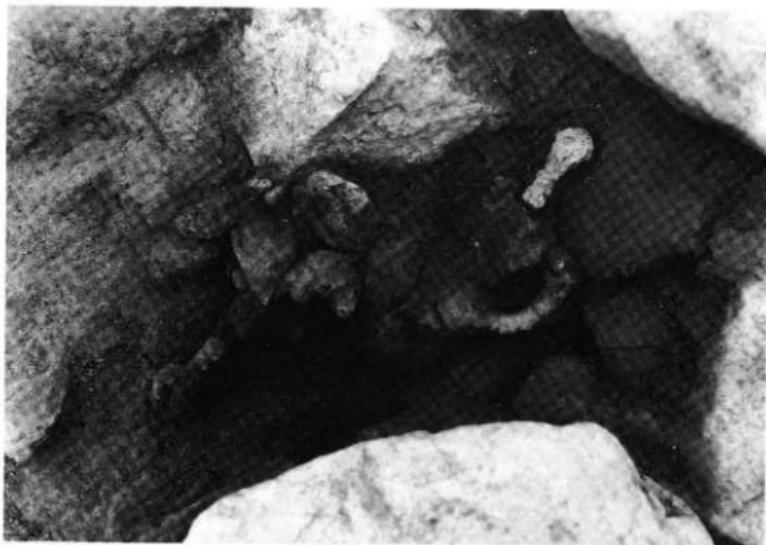


SM1001横穴式石室内堆積状況



SM1001排水溝上面集石状況

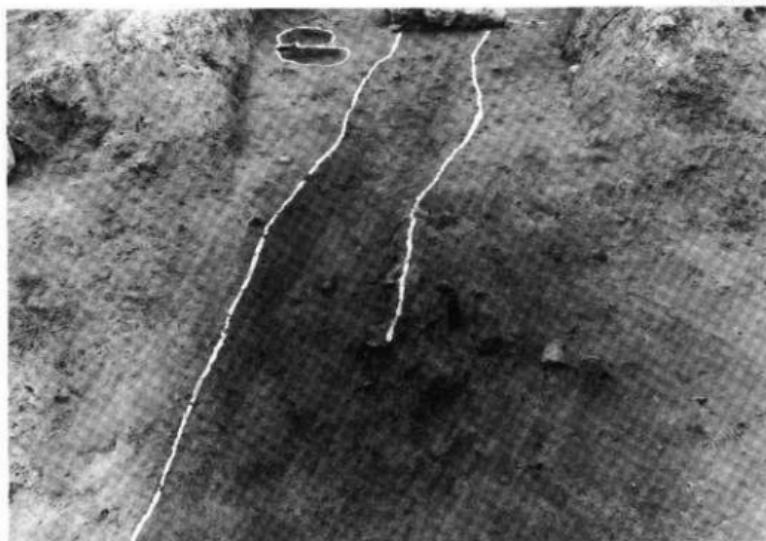
図版 5



SM1001遺物出土状況 排水溝内



SM1001遺物出土状況 前庭部



SM1001排水溝完掘状況



SM1001周濠断ち割り状況

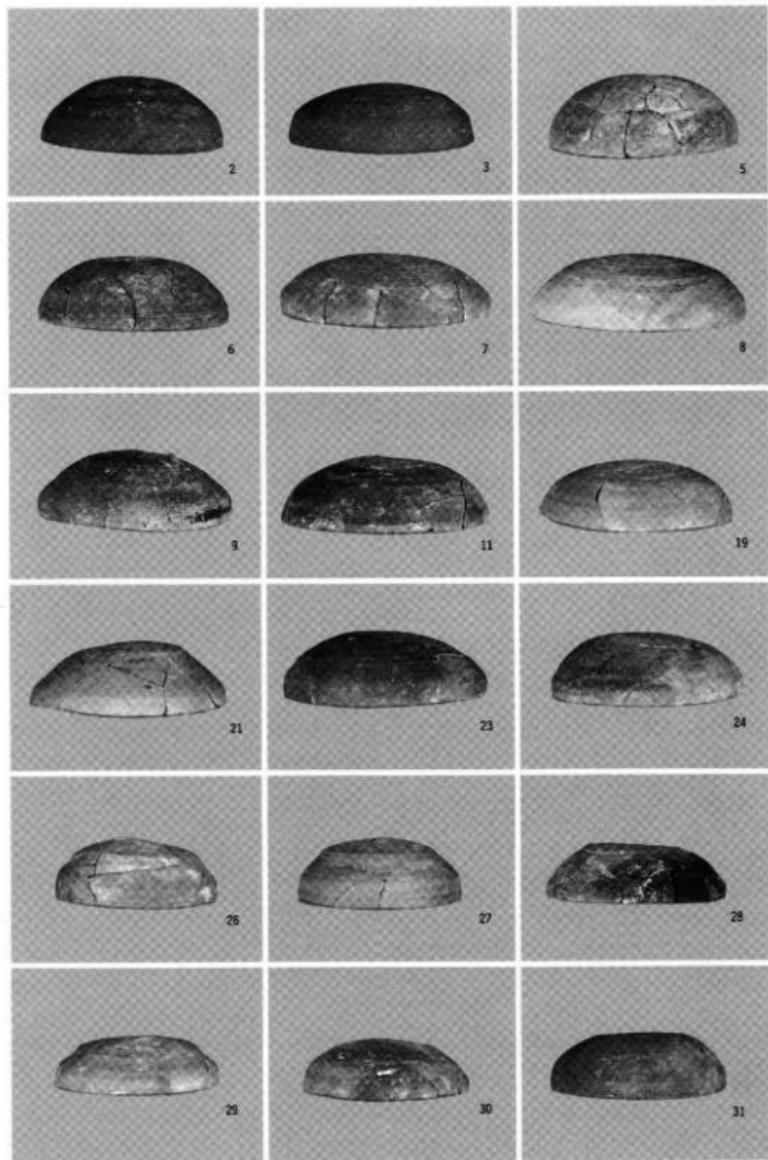
図版 7



SM1001墳丘断ち割り状況（西半）

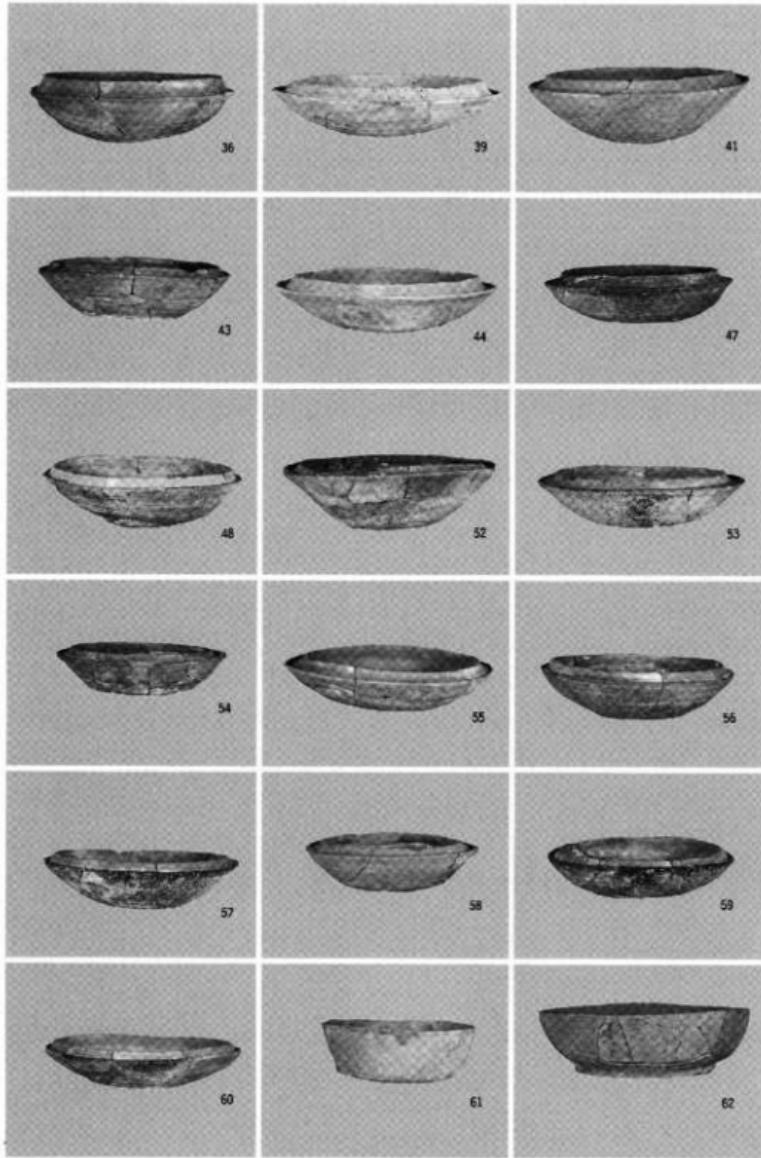


SM1001墳丘断ち割り状況（東半）

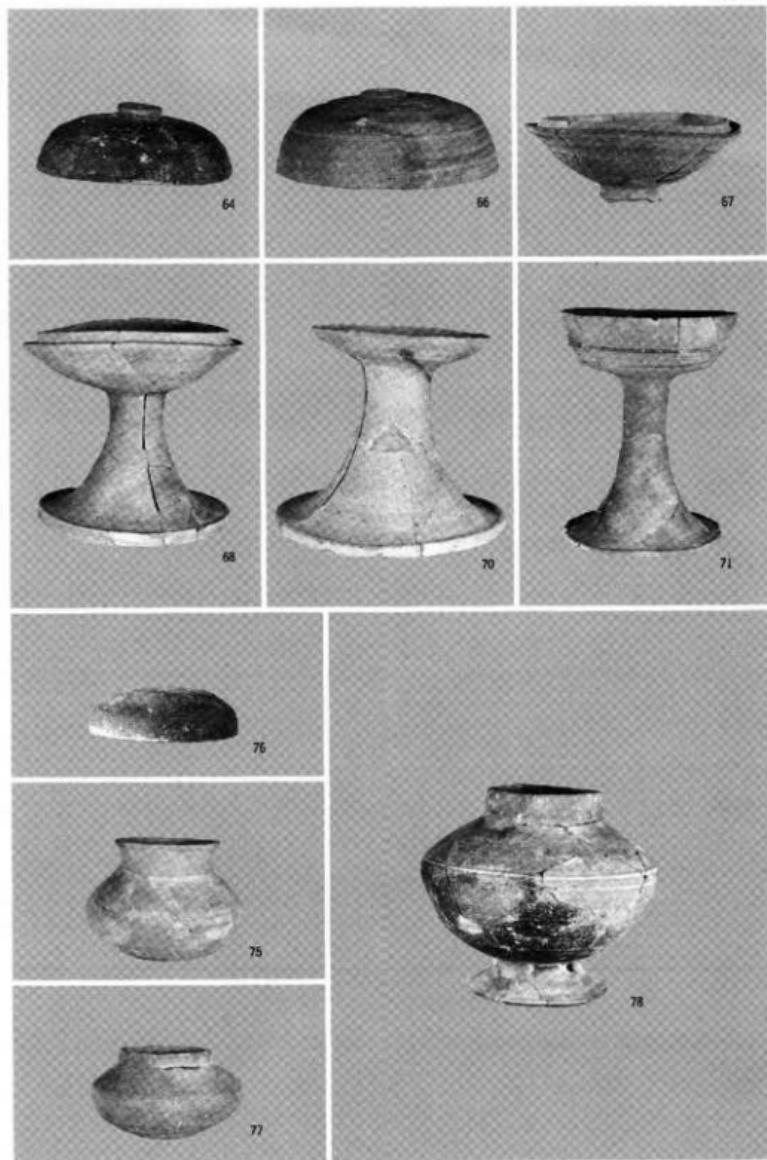


SM1001出土須恵器 (1)

図版 9

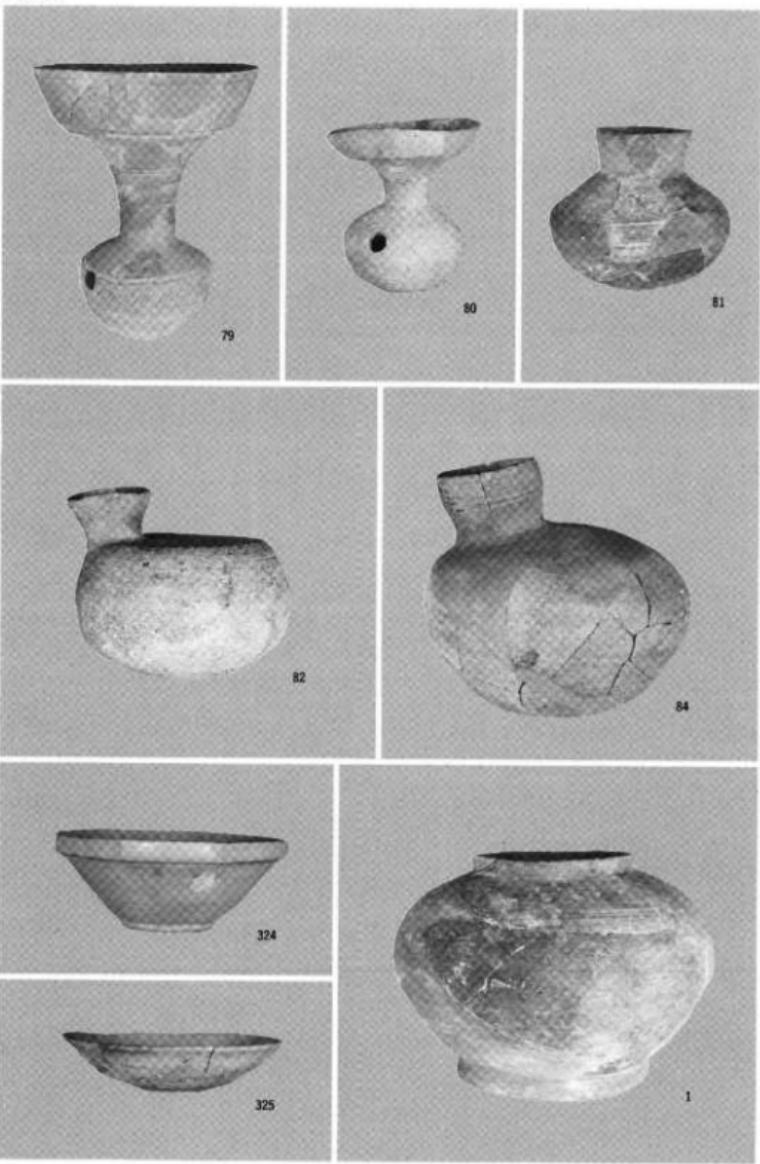


SM1001出土須恵器 (2)

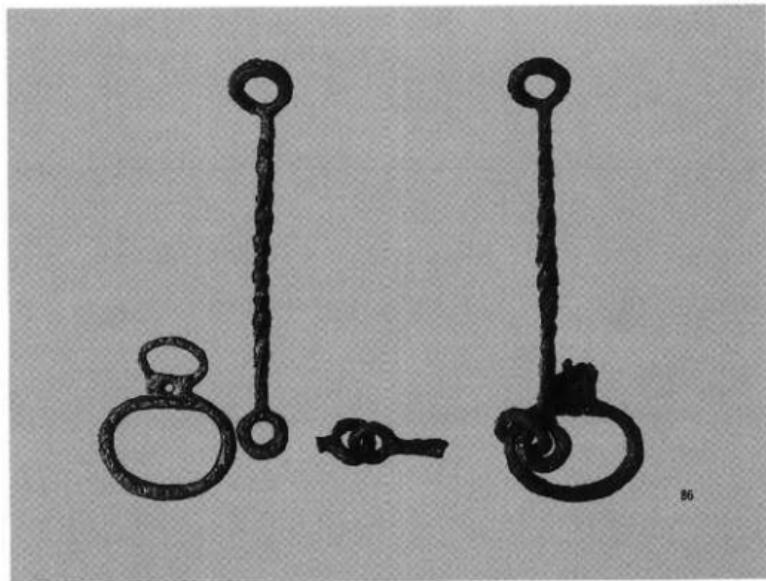


SM1001出土須恵器 (3)

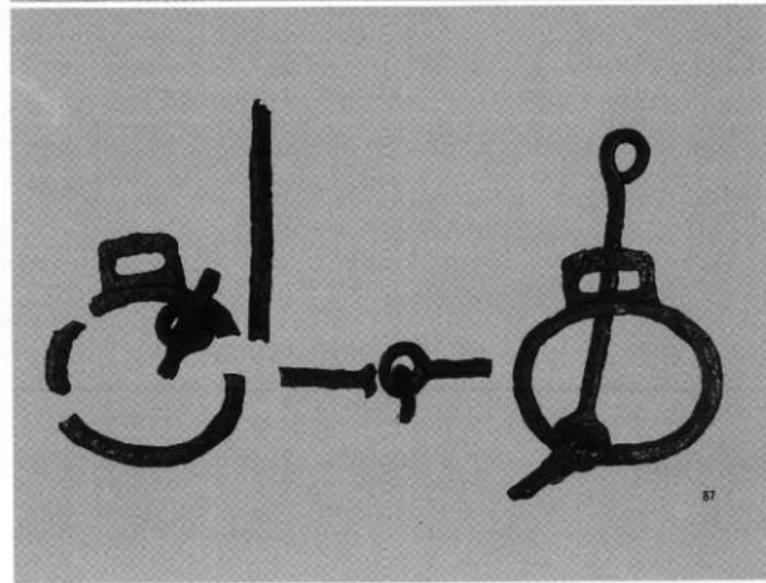
図版11



SM1001出土須恵器 (4)・骨蔵器



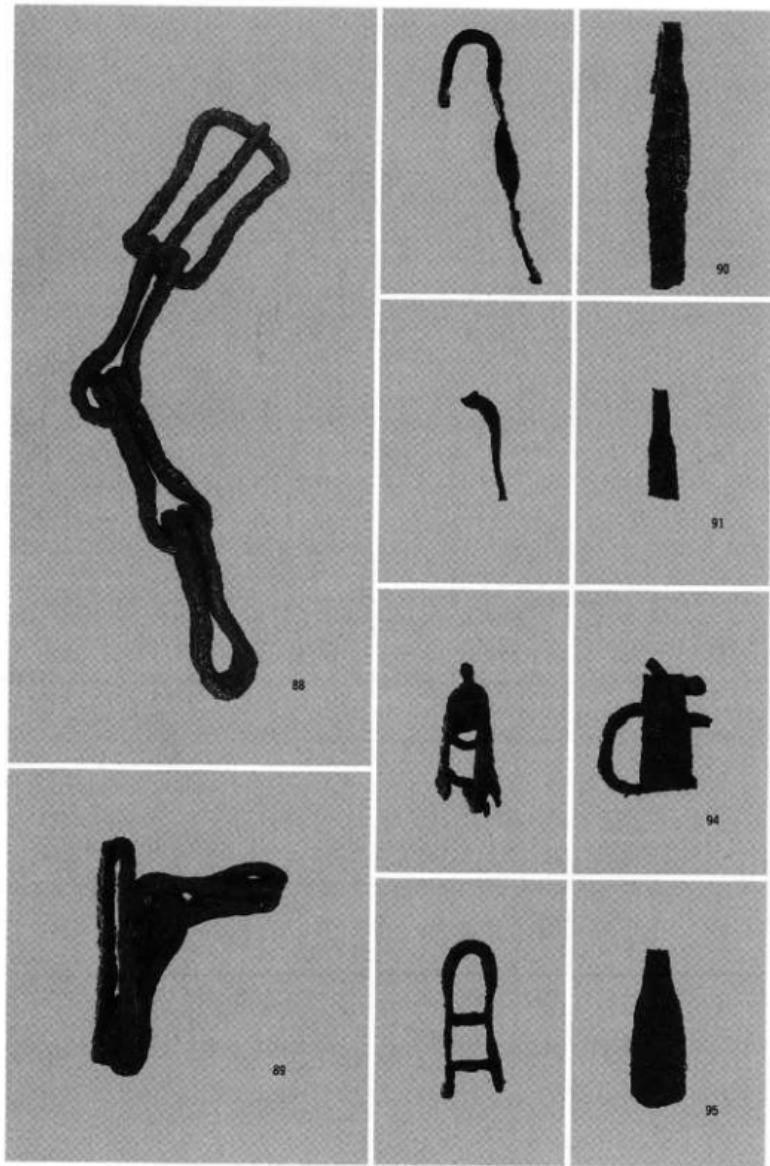
86



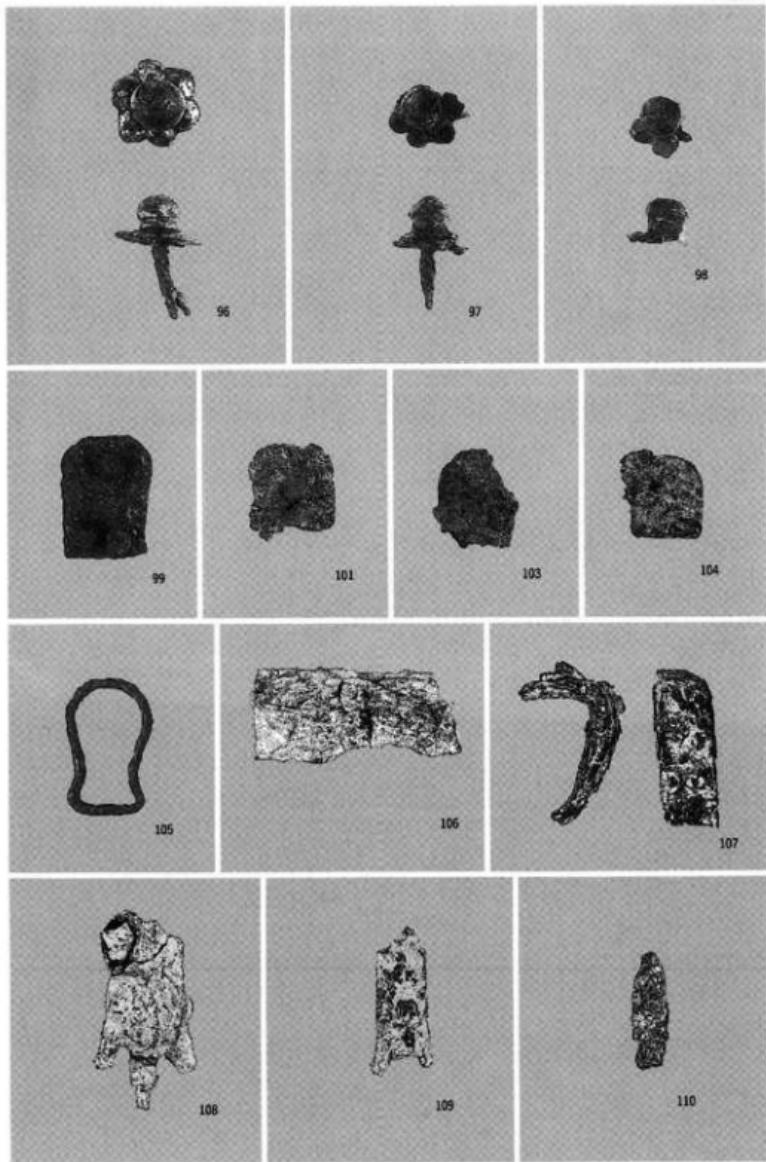
87

SM1001出土馬具 (1)

図版13

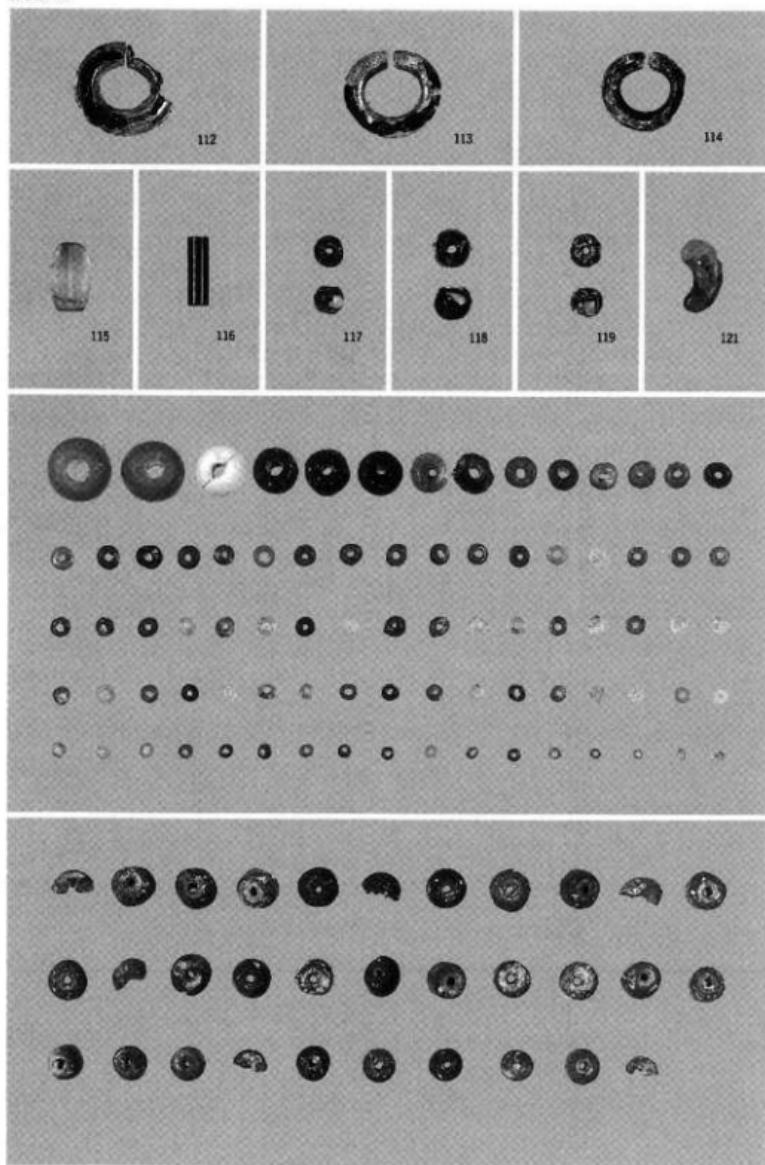


SM1001出土馬具 (2)



SM1001出土馬具 (3)・その他の鉄器

図版15



SM1001出土玉類